クロス学園Ｚ(ゼット)組!!

ring

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クロス学園Ｚ（ゼット）組！！

【Ｎコード】
Ｎ２１９１Ｏ

【作者名】
ｒｉｎｇ

【あらすじ】
銀八先生がまたやってきた。ここはクロス学園。色々な人が集う場所！！　銀八が、なのはが、ルルーシュが、ハルヒが、当麻が、一護が、エドが、唯が、リクオが、こなたが、ツナが、孝が、剣心が、アーチャーが！！　原作設定は皆無！！　みんなもともとこの世界の住人だ！！　つまり世界はここしかない！！　異世界なんてない！！　学園生活（ちょっと違うが）を楽しむがいい！！　この小説はとにかくたくさんキャラが出て、さらにキャラ崩壊も起こしています。苦手な人は見ないでください。現在人気投票開催中！！

どしどし投票してください！！　『登場作品』銀魂、Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ、魔法少女リリカルなのはシリーズ、けいおん！、らき☆すた、コードギアス反逆のルルーシュ、とある魔術の禁書目録、とある科学の超電磁砲、涼宮ハルヒの憂鬱、学園黙示録ＨＩＧＨＳＣＨＯＯＬ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＤＥＡＤ、ぬらりひょんの孫、ＢＬＥＡＣＨ、家庭教師ヒットマンリボーン、るろうに剣心、鋼の錬金術師、スマブラＸ、ニコニコＲＰＧ、ゼロの使い魔、スクライド、ひぐらしのなく頃に、ジョジョ、ａｎｇｅｌｂｅａｔｓ！！、ボボボーボ・ボーボボ、東方ｐｒｏｊｅｃｔ、機動戦士ガンダム００、めだかボックス

第一話『プロローグとは良くも悪くもその小説を決定づける』（前書き）

…やっちまった…。

まぁ暖かい目で見てください…。

第一話『プロローグとは良くも悪くもその小説を決定づける』

…ここはクロス学園。由来も何も分からないがとにかく色々な人がいる学園だ。

平和な校風に、文武両道をモットーとした高校である。

…その中に…あるクラスがあった。そのクラスは、この高校の中でも特に異彩を放つクラス。その名も…。

―Z組

なのは
「…と言うわけでね、学園モノをやることになったの!!」

かがみ
「…と言うわけって何よ…」

ここはZ組の教室。ここには数多くの人が集まり、勉学に励み、スポーツに励み…まぁなんたらやってる所だ。

かがみ
「適当に流すな解説！！」

へ？　まぁいいじゃん。

ルルーシュ
「といってもな…この小説あれだろ。作者が書けないから…」

なのは、フェイト、はやて
「「「それを言っちゃあいけない（の）（よ）（で）！！」」」

ルルーシュの発言に魔法少女三人衆が突っ込む。ちなみに今ここで話しているのは高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、八神はやて、柊かがみ、そしてルルーシュ・ヴィ・ブリタニアである。かがみとルルーシュはチェスに興じている。…ルルーシュの圧勝のようだが。

ルルーシュ
「そろそろ降参したらどうだ？」

かがみ
「何を…今に見てなさいよ！！」

難しい顔でかがみは盤面を睨むが、どう見たって負けだ。

ルルーシュ
「ご愁傷様だな、柊。王手（チェックメイト）！！」

かがみ
「あ…うぅぅ…」

こなた
「あーあー。ま～たかがみん負けちゃったの？」

ハルヒ
「だっらしないわねぇ～。次は私よルルーシュ！！」

いつの間にかかがみの親友の泉こなた、涼宮ハルヒがやってきていた。ハルヒはかがみを押しのけてルルーシュの眼前に座り、真剣にチェスをしだす。みんなはそれを見つめた。

と、その瞬間、窓が爆音と共に吹っ飛んだ。

ルルーシュ

「なんだ!?」

みんな一斉に振り返る。すると、窓から男が飛びこんできた。

当麻
「やめろビリビリ!!　会って早々なんだそれは!!」

美琴
「うっさいわね!!　勝負しなさいよ勝負!!」

かがみ
「なによ～またあの二人？」

かがみが呆れた声を出す。あの二人とは、上条当麻と御坂美琴である。毎朝毎朝美琴が当麻に挑み、当麻はそれから逃げている。何でも当麻と美琴には深い因縁があるんだとか。しかしみんなからは仲が良いカップルとしか思われていない。

ルルーシュ
「まぁ幻想殺しがあるから死ぬことは無いだろ…」

ルルーシュとハルヒは平気のへいざでチェスを続ける。

なのは
「でもさルルく「やめろビリビリ！！」…ルル君は学級委員だ「うるさい！！」…学級委員だしさ…止めないと「避けんな！！」「避けんと死ぬわ！！」ピキィッ…」

何度も話を邪魔されたなのはの頭から変な音がした。フェイト、はやて、ルルーシュ、ハルヒ、かがみ、こなたははっとして飛び退く。

なのは
「…なんで、話の邪魔するのかな…」

右手にレイジングハートを持って立ち上がるなのは。体中から爆発的な冷気が吹き出している。ルルーシュはそれを認めた瞬間叫ぶ。

ルルーシュ
「みんな！！　…死ぬなよ」

ＡＬＬ
「「「「「ごめん…無理かも…」」」」」

…ですよね～。

なのは
「全力全開！！　スターライトォ…」

その瞬間、教室のドアが開き、気の抜けた声がした。

銀八
「オイオイ…朝っぱらから騒ぎ立てやがってよォ…お前らはあれか、A○Bとか見て興奮してる奴らですかコノヤロー」

死んだ魚の目のような天然パーマに白衣の男。そう、この男こそが、このクラスの担任、坂田銀八である…。

作者
「やっちまったな…色々と」

ルルーシュ
「今さらか？」

ハルヒ
「言えてるわ」

作者
「ま、いっかな。この程度…」

なのは
「にゃはは…。あ、そういえばさ」

作者
「何？」

なのは
「この作品は異世界カップリングはありなの？」

作者
「あぁ。ありだよ。考えてある。それとな…」

かがみ
「何よ？」

作者
「ただの学園コメディだと思ったら痛い目みるぜ？」

こなた

「痛い目？」

作者
「ああ。なぜならな…色々バトル要素があるからだ」

ＡＬＬ
「はあ！？」

かがみ
「ちょ、何言ってんのよ！？　なのはさん達や美琴達は分かるわよ。あたし達は！？」

作者
「心配するな。お前らも戦えるように作者の権力を行使したからな（エッヘン）」

フェイト
「作者の権力…何それ？」

はやて
「つまりは…」

美琴

「キャラ崩壊？」

作者
「まぁそういうこったな。心配すんな。そんなに悪いモンにはしねぇ。それともう一つ」

当麻
「次から次へなんだ？」

作者
「お前らは原作の能力はある。が…原作の設定は皆無に等しいぞ」

ＡＬＬ
「何ぃぃ！？」

なのは
「つまり私やフェイトちゃん、はやてちゃんは管理局の魔導士じゃなかった！？」

作者
「ただ魔法が使える高校生だ」

当麻
「俺とビリビリもか？」

美琴
「ビリビリ言うな！！」

作者
「まぁそういう事だな。理由はまぁ後でな。さて、そろそろ次回予告だ。どうぞ～」

次回！！

ルルーシュ
「取り合えずはクラスの皆を紹介だ」

出席確認でキャラ紹介！！

…まぁ色々出ますよ。

乞うご期待！！

銀八
「てな訳で。次回、クロス学園Z（ゼット）組第二話『キャラ紹介はめんどいが必要だ』見てくれよな！！」

第一話『プロローグとは良くも悪くもその小説を決定づける』（後書き）

次回、Z組キャラ勢揃いだ！！

第二話『キャラ紹介はめんどいが必要だ』（前書き）

キャラ紹介に近いのであんまりおもしろくないかもしれません…。

第二話『キャラ紹介はめんどいが必要だ』

銀八
「よ～し席つけ～。出席とるぞ～」

みんなが席に座ったのを確認し、銀八が出席を取り始める。

銀八
「よ～し。じゃあ出演漫画ずつにまとめて行くぞ～」

かがみ
「ちょっと待ってください先生」

かがみが遮った。

銀八
「なんだ、ツインツッコミ」

かがみ
「それツッコミ二回やるみたいじゃないですか！？　いや、前回作者が原作のキャラ設定は皆無とか言ってましたよ。だから原作でまとめるのはマズくないですか？」

銀八
「いんだよメンドくせー。どうせｒｉｎｇの奴が設定作りやすいからやりやがったんだろうが…関係ねぇ関係ねぇ」

銀八はかがみの言葉を無視して出席をとりだす。

銀八
「じゃあまずは『銀魂』だ…。神楽、ヅラ、エリザベス！！」

神楽
「はいアル」

桂
「ヅラじゃない桂だ」

エリザベス
『キャラ紹介の度に言ってますよねそれ』

銀魂からは神楽、桂小太郎、エリザベスだ。何でこの三人か？　作者の好みだ。

銀八
「あ、それとこのクラスにいないキャラでもこの小説には出る可能性はあるからな？」

神楽
「銀ちゃん誰に言ったアル？」

銀八
「気にすんな。んじゃあ次だ。『魔法少女リリカルなのは』より、なのは、フェイト、はやて！！」

なのは
「はい♪」

フェイト
「はい（なのは…さっきあんな顔してたとは思えないよ…）」

はやて
「はい（間違いなくこのクラス最強の魔王や…）」

返事に何か意味深な響きがある気がする。

銀八

「はい、読者のみんな、魔王には「先生、ちょっとO☆HA☆NA☆SHIしようか？」すみませんでしたぁぁぁぁぁ！！」

銀八が全力全開に土下座した。

銀八
「さて、どんどん行くぞ～。次は…あ？　学園パロディには珍しいな…『学園黙示録』より、小室孝と宮本麗！！」

孝
「はい…なんか俺達場違いじゃねぇか？」

麗
「気にしない気にしない」

そういう麗は孝の腕にひっついている。この二人もみんなが認知しているカップルである。

銀八
「何朝っぱらからいちゃいちゃしてんだお前ら『ドカッ！！』…へ？」

いきなり麗がモップの柄だけを投げ、その柄が銀八の頬をかすめて

黒板に突き刺さった。

麗が銀八を睨む。その目が言っている。

麗

”邪魔したら『奴ら』みたいに殺すわよ?”

銀八

「すみませんでしたぁぁぁぁぁ!!」

またもや銀八が全力全開に土下座した。

フェイト

”麗…相変わらずなのはに匹敵する怖さだよ…”

はやて

”銀ちゃんも可哀想になぁ…この魔王二人がおるクラスを持ってるんやから…”

銀八

「くそ…俺は麗より冴子さんの方が「一回死んどく?」すみませんでしたぁぁぁぁぁ!!」

もう土下座しっぱなしである。

銀八
「じ、じゃあ次行かせてもらうぜ…あ、前回出番組だな。『コードギアス』よりルルーシュ、『らき☆すた』より泉こなた、柊かがみ、『とあるシリーズ』より上条当麻と御坂美琴！！」

ルルーシュ
「ああ」

こなた
「はい」

かがみん
「はい…って何でかがみんになってんのよ！？」

当麻
「ああ」

美琴
「はい」

こいつらは前回で大体分かるだろう。ちなみにルルーシュはこのクラスの学級委員だ。

銀八
「さて次は～『涼宮ハルヒの憂鬱』より、ハルヒ、長門！！」

ハルヒ
「はい！！」

長門
「…」

『涼宮ハルヒの憂鬱』よりはこの二人だ。ハルヒはルルーシュと同じ学級委員。長門は図書委員だ。

銀八
「はい次～。『ぬらりひょんの孫』より、奴良リクオと及川氷麗！！」

リクオ
「はい」

氷麗

「はい！！」

リクオと氷麗だ。この世界では、リクオは昼でも夜でも自在に妖怪化できる。だが妖怪の姿を見たのはまだ少ない。

銀八
「リクオよぉ。お前はまだみんなに…「何の話ですか？」…いや、すまん」

リクオは自身が妖怪である事はあんまり話したがらない。知ってるのは側近の氷麗に偶然見たルルーシュ、ハルヒ、こなたに銀八ぐらいだ。

銀八
「次だ。…おお。ジャンプだな。『ＢＬＥＡＣＨ』より黒崎一護に朽木ルキア！！」

一護
「ああ」

ルキア
「うむ」

一護達二人が返事する。前話でも言ったが、一護は死神の力などは持っているが、尸魂界など知らないし、他に死神がいるとも思ってはいない。つまり、能力は藍染を倒した時。知識は尸魂界突入前だ。

銀八
「どんどん行くぜ。次は『けいおん!!』より、平沢唯、そして『リボーン』より、ツナ、山本、雲雀!!」

唯
「はい!!　…って私だけ?」

銀八
「作者がけいおんあんまり知らないからだ。出してみたかったらしいが」

唯は納得しきれない顔で椅子に座る。

ツナ
「はい」

山本
「おう」

雲雀
「…」

リボーン組が挨拶する。これも作者の好みだ。

銀八
「つづいては…『るろうに剣心』より緋村剣心と緋村薫！！」

剣心
「ああ」

薫
「はい」

何故か原作より若々しさを見せる剣心と、あまり変わってない薫だ。

銀八
「つーか剣心たしか２８じゃなかったか？」

剣心
「今は１８でござるよ」

なんと、剣心を出したいが為に若返らせたのである。もはや作者権力は何でもありである。

銀八
「んで、薫は？」

薫
「…私17よ？」

…変える問題全くなしである。

銀八
「んでお前らは学生結婚してる訳か」

薫
「そう、ね…」

…もはや何でもありである。

銀八
「最後だ。『鋼の錬金術師』より、エドとアル！！」

エド
「ああ」

アル
「はい」

『鋼の錬金術師』の錬金術師兄弟、エドと鎧のアルが答える。…もう終わった？　関係ないっての。

銀八
「以上。今日は全員いるな。一時間目まで、まー適当にやっとけ」

生徒一覧

［男］

［銀魂］
桂小太郎
エリザベス

［学園黙示録］
小室孝

［コードギアス］

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア（学級委員長）

［とある魔術の禁書目録］
上条当麻

［ぬらりひょんの孫］
奴良リクオ

［ＢＬＥＡＣＨ］
黒崎一護

［リボーン］
沢田綱吉
山本武
雲雀恭弥

［鋼の錬金術師］
エドワード・エルリック
アルフォンス・エルリック

［るろうに剣心］
緋村剣心

［女］

［銀魂］
神楽

［魔法少女リリカルなのは］
高町なのは

フェイト・T・ハラオウン
八神はやて

［学園黙示録］
宮本麗

［らき☆すた］
泉こなた
柊かがみ

［とある科学の超電磁砲］
御坂美琴

［けいおん！！］
平沢唯

［涼宮ハルヒの憂鬱］
涼宮ハルヒ（学級委員）
長門有希

［ぬらりひょんの孫］
及川氷麗

［ＢＬＥＡＣＨ］
朽木ルキア

次回予告

ハルヒが何か言い出した

ハルヒ
「暇ね～。遊び行かない？」

ハルヒが仲間達と連れ立って行く場所は…ボウリング！！

…あれ、なんかまとも…な訳ないだろ！？

当麻
「こんなのボウリングとか言う生易しいモンじゃねぇ！！」

桂
「感じる…この圧倒的な畏怖！！」

なのは
「ディバイン…バスタァーッ！！」

ルルーシュ
「まさかこんな手を使うはめになるとはな…」

次回、第三話『罰ゲームがあるとないとじゃ真剣味が変わる』

銀八

「期待して待っとけ！！」

第二話『キャラ紹介はめんどいが必要だ』（後書き）

次回はコメディです。

第三話『罰ゲームがあるとないとじゃ真剣味が変わる』（前書き）

長くなりますので二回に分けます。

第三話『罰ゲームがあるとないとじゃ真剣味が変わる』

ハルヒ
「ひまね～」

ハルヒが呟く。ここは図書室だ。ちなみに今は放課後。部活の無い生徒の溜まり場である。よくZ組もここに溜まる。

麗
「はい、ハルヒ」

ハルヒ
「あ、ありがと」

麗がコーヒーをハルヒに渡す。

ハルヒ
「…美味しいじゃない。よく淹れられるわね？」

麗
「中学の時に喫茶店でバイトしてたから。パパにバレて一週間でや

めたけど」

ハルヒ
「へぇ～」

ハルヒはコーヒーをすする。

ハルヒ
「麗は今日部活は？」

麗
「今日は休みよ」

麗は原作と同じく槍術部所属である。

ハルヒ
「はぁ…ひまね～。何か面白いことないかしら？」

ルルーシュ
「…あるぞ」

いきなりルルーシュが入ってきた。

ハルヒ
「なんかあるの！？」

ルルーシュ
「ああ。噂なんだが…」

ルルーシュ曰わく、街のはずれにあるボウリング場。古く、ボロなのだが、そこである噂がたっているという。

ルルーシュ
「なんでも…ちゃんと経営はされているらしいのだが…ここ一週間…入った人が次々と消えているらしい。もっぱらの噂だ」

麗
「…よくあるオカルトじゃない」

麗は呆れたが、ハルヒは…

ハルヒ
「そのボウリング場行くわよッ！！　Z組、出動！！」

麗
「ハルヒならこうなるわよね…」

麗は額を抑えた。

ハルヒ
「ここ、よね…」

ルルーシュ
「ああ」

ハルヒ達は例のボウリング場に来ていた。ちなみに、集まったZ組の面々はハルヒ、ルルーシュ、麗の他に…

当麻
「ボウリングなんか久しぶりだな」

なのは
「にゃはは～。楽しみだね！！」

フェイト
「まぁ暇だったしね」

桂
「ふ、俺の華麗なるボールさばきを見せてやろう！！」

エリザベス
『ボールさばきとかボウリングあんま関係ないよな』

孝
「ボウリングあんまりやってねぇなぁ…」

こなた
「今日は見たいアニメも無いし…よしとしようかな」

…以上の面々だ。

ルルーシュ
「しめて十人…これだけいれば大丈夫だろ」

ハルヒ
「そうね。なら、行くわよ！！」

ハルヒが先頭を切って中に入る。そこにいた者は一

銀八、さらには同じクラスの一護、唯、エドだった。

ハルヒ
「先生!?」

ルルーシュ
「なんでこんな所に!?」

四人は振り向いた。

銀八
「オイオイ…お前らも来たのかよ…」

銀八が頭をかかえた。

こなた
「ゆいにゃん、いっちー、エド、なんでこんな所に?」

一応言うが、ゆいにゃんとは唯の事、いっちーとは一護の事だ。

唯
「うん。今日は部活が早く終わったからぶらぶらしてたら、銀八先生に呼ばれてね」

一護
「なんでも、うちの高校にここに来て消えた奴がいるらしいんだ」

エド
「それを調べる為にな」

ハルヒ
「へぇ…で、どうなのよ？」

一護
「それがよ…消えた人達どころか従業員も出てこねぇんだ」

銀八
「全くよォ…いきなりこんな事に駆り出されるとは…不幸だぜ」

エド
「…特別ボーナスに飛びついた奴が言う事じゃねぇな」

エドが言った瞬間、唯が気づいた。

唯
「誰か来るよ！！」

明敏な音感を部活で養った唯が真っ先に気づく。

耳をすませると、確かに足音が聞こえる。

ハルヒ
「…総員、戦闘準備…」

ＡＬＬ
「了解」

やってきたのは…。

？？？
「いらっしゃい」

ボウリングのピンの着ぐるみを着たおっさんだった。

ハルヒ
「え、ええ…（何よこの着ぐるみ！？）」

銀八
「ぼ、ボウリングをやりに来たんですが…（おっさんがこの着ぐるみはキッツいな！？）」

おっさん
「わかりました。何名様でしょうか？」

ルルーシュ
「十四名だ…（いや、これは誰が着てもキツいぞ…）」

三人ともかなり失礼な事を思っている。

おっさん
「承知しました。では、ルール説明をさせていただきます」

こなた
「ルール説明？　なんで？　ボウリングぐらい分かるよ」

おっさん
「我がボウリング場はルールが特殊でして…説明させていただきます」

おっさんはホワイトボードを取り出してきた。

おっさん
「まず、ボールがありません」

当麻
「はい？」

ボールが無いのだという。

おっさん
「このボウリング場ではボールでは無く、自らの能力や体を使い、ピンを倒すのです」

フェイト
「…それ簡単じゃない？」

フェイトが面子を見る。確かに強い能力を持っている者ばかりだ。

おっさん
「無論、そう簡単には倒れないように細工が施してあります。ステージは全部で１１ステージ。１ステージにつき三人の挑戦が認められています」

銀八
「三人？　全員でポイントを競争するんじゃないのか？」

銀八が聞く。

おっさん
「いいえ。このボウリングはチーム戦。チームで１１ステージ全てストライキ…いえストライクを取ればクリアです。つまり、三人の内一人がストライクを取ればクリアになります」

唯
「なるほど…」

おっさん
「また、チームは七人で組んでいただきます。そして…失敗したら、分かっているとは思いますが…罰ゲームを受けていただきます」

銀八

「…それが”消える”って意味か…」

ハルヒ
「面白いじゃない。受けてたつわ！！」

ハルヒが宣言し、チームを分ける。

1ステージから挑戦するチーム

ハルヒ
ルルーシュ
麗
孝
一護
エド
唯

ステージ11から挑戦するチーム

銀八
桂
エリザベス
なのは
フェイト
こなた
当麻

銀八
「いや、待てェェェ！！」

なのは
「もう４ページだから行数稼ぎはいらないよ～にゃはは」

桂
「違う！！　なぜラスボスからなのだ！？」

エリザベス
『卑怯だぜ！！』

銀八たちがシャウトする。

おっさん
「ご安心を。ステージの順を変え、ステージ６を最難関とします」

銀八
「あ、なるほどな…そんな事出来るのか」

銀八も納得した。

おっさん
「では、今回は十四人で一つのチームとし、七人のグループに分かれて行います。では、どうぞ」

おっさんはハルヒ達を右側の、銀八達を左側の入り口に誘導した。

おっさん
「では、行ってらっしゃいませ」

ハルヒ
「行くわよ!!」

銀八
「面倒くせぇが…行くか」

ＡＬＬ
「おう!!」

みんな入り口に入り、消えた。

残ったおっさんは一人呟く。

おっさん
「あいつらなら…クリアしてくれるかもしれん」

ハルヒ
「ここが1ステージね」

『1ステージ』とでかでかと書かれた扉の前に立つ。

ルルーシュ
「何が出てくるか分かったもんじゃない…気をつけろ」

ルルーシュが用心しながら扉を開ける。そこには…

麗
「こいつらは…」

孝
「”プリム”！？」

そう、そこにいたのは、スマブラXのザコキャラ、プリム（紅白カラー）が十体であった。

ハルヒ
「何でプリム！？　これボウリングじゃなくてただの討伐ゲームじゃない！？」

ルルーシュ
「…紅白カラーでボウリングのピンをイメージしてるのか？」

一護
「言ってる場合かルルーシュ！！　とにかく誰か三人でこいつらを全滅させ…」

一護がそこまで言った時、孝と麗が飛び出した。いつのまにか孝の手にはショットガン、麗の手には銃剣が握られている。

孝
「頭を狙って…撃つ！！」

ショットガンがプリムを轟音と共に吹っ飛ばす。

孝
「慣れてるって嫌なもんだな！！」

麗
「安心して孝…」

麗が銃剣でプリムの頭を貫く。

麗
「私ほどじゃあ…ないよ！！」

孝と麗は戦い続ける。ハルヒが言った。

ハルヒ
「あと一人は誰が！？」

唯
「私が！！」

唯が飛び出す。

一護
「唯！？　戦えるのか！？」

ハルヒ
「戦えるわ！！　作者権力は怖いわよ！！」

唯は手首についているブレスレットに話しかける。

唯
「行くよ…ギー太！！　セットアップ！！」

ギー太
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！！　Ｍａｓｔｅｒ！！」

唯の手元にいきなりギターが現れる。そう、これこそが唯の為に化学担当のジェイル・スカリエッティ先生が作ったインテリジェントデバイス、『ギー太』である！！

ちなみにバリアジャケットは桜ヶ丘の制服である。

唯
「行くよ!!　デモリッシュ・ソナー!!」

唯がギー太を弾きはじめる。すると、プリムの動きが止まり、次々と倒れていく!!

唯が弾くのを止めた時には、すでにプリムは全滅していた。

唯
「以上!!　ご静聴、ありがとうございました!!」

一護
「いやすごいな!?　音波攻撃か!?」

エド
「作者権力は怖いな…」

ハルヒ
「演奏としてもすごいわね…感服したわ!!」

みんな口々に唯を褒め称える。その中で、ルルーシュは厳しい顔をしていた。

ルルーシュ
”あいつらにもこのぐらいの敵が来ているはず…まぁなのは達がいるから心配は無いか”

ハルヒ
「ルルーシュ！！　行くわよ！！」

みんなが待っている。

ルルーシュ
「ああ。すまん」

武器紹介

インテリジェントデバイス
『ギー太』

使用者　平沢　唯

スカリエッティ先生が唯のために作ったデバイス。今のところスタ

ンバイモードとギターモードが確認されている。

特殊な音波による魔法音波攻撃もあるが、なんといっても音波による回復などの補助魔法に長けている。

スタンバイモード時はブレスレットになって唯の手首に装着されている。

唯の事を「ｍａｓｔｅｒ」と呼ぶ。唯とは意志疎通が出来ているようで、お互いに信頼しあっているようだ。

また、普通のギターとしても使用可能。

第三話『罰ゲームがあるとないとじゃ真剣味が変わる』（後書き）

…唯が強いなぁ…。やりすぎたかな？

まぁいいや。みんな戦えるんだし。あ、痛い、物投げないで！！

次回もお楽しみに～。

第四話『雑魚キャラが出たら大抵その作品のボスキャラも出る』（前書き）

…まだまだ続くボウリング…じゃないな、討伐ゲーム…。今回でも終わらなかったんで次回が終幕…のはず。

今回はこなたの能力が分かります。

第四話『雑魚キャラが出たら大抵その作品のボスキャラも出る』

当麻
「こんなのボウリングとかいう生易しいもんじゃねぇ！！」

当麻が叫ぶ。銀八チームは今はステージ8、ビッグプリム（やはり紅白カラー）四匹と戦っていた。戦っているのは、なのは、当麻、こなたである。

ちなみに、ステージ11にいたスパー（スマブラXの雲みたいな敵）、ステージ10のソードプリム、バズーカプリム、ブーメランプリム、ステージ9のファイアプリムは、主になのはとか、なのはとか、なのはとかが砲撃魔法で一瞬で殲滅した。まさに魔王。

なのは
「何か言ったかな？　ちょっとO☆HA☆NA☆SHIしようか？」

いえ、なんにも。だから砲撃だけはやめてね。

なのは
「…ふーん。ならあのデカブツにお見舞いしてあげるの！！」

なのはがビッグプリムにレイジングハートを向ける。

なのは
「ディバイン…バスタァァー！！」

桃色の砲撃がビッグプリムを襲う。今回も殲滅…

ビッグプリム
”A．Tフィールド”

出来なかった。ビッグプリムのA．Tフィールドがディバインバスターをはじく。

銀八
「A．Tフィールドだとぉぉ！？　あいつはエヴァンゲリオンか！？」

フェイト
「あれを破らなきゃ…攻撃は届かない！！」

今回は見ている銀八とフェイトが言う。

こなた

「とはいえあれはA・Tフィールド…そう簡単には…」

当麻
「…俺にまかせろ」

当麻が呟いた。

当麻
「幻想殺し（イマジンブレイカー）で壊す!!」

こなた
「おお!!　その手があったか!!」

当麻
「こなたは援護を頼む。なのはさん!!　俺がA・Tフィールドを破りますから…でかいの一発お願いしますよ!!」

なのは
「分かったの!!」

なのはが空中で魔力を集めだす。

当麻
「行っくぜぇぇぇ！！」

こなた
「援護するよ！！」

当麻とこなたが走りだす。こなたは腰につけている刀を抜き放ち、叫ぶ。

こなた
「青天に舞え…蒼炎丸！！」

刀が姿を不死鳥が彫られた薙刀に変えた。こなたの周りに蒼き炎が渦巻く。これこそがこなたの斬魄刀、蒼炎丸である。

こなた
「駆けろ蒼炎！！」

蒼炎丸が炎をまとう。

こなた
「蒼炎疾駆！！」

蒼き炎が走り、ビッグプリムに直撃した。Ａ．Ｔフィールドによって防がれたが、当麻にとっては最高の時間稼ぎだった。

当麻
「食らいやがれ！！」

当麻は一気にビッグプリムに接近し、右拳を放った。

パリィン

Ａ．Ｔフィールドが破壊される。当麻は次々と四体のＡ．Ｔフィールドを破壊していく。

こなた
「今だよ、なのは！！」

なのは
「ＯＫ…全力全開！！　スターライトォ…ブレイカァァァー！！」

桜色の砲撃が守る物が無くなったビッグプリムを襲い、消し飛ばした。

なのは
「…ふぅ。ちょっと疲れてきたかな…」

銀八
「今まで出ずっぱりだったからな…次は俺達がやるぞ。なのはは休んどけ」

なのは
「お言葉に甘えさせてもらうよ…」

銀八達がステージ7の扉を開けた。そこには…

銀八
「…なんだコイツ」

なんだかデカい車みたいな物があった。ミサイルのような物を装備している。

フェイト
「戦車かな?」

桂

「違うだろう。戦車だろうか？」

フェイト
「あんた今私の言葉否定したよね！？　クールボケかますな！！」

フェイトが突っ込む。

銀八
「お前ら！！　そんな事言ってる場合じゃねぇ…来るぞ」

銀八が白衣を脱ぎ捨て眼鏡をとって、和服を羽織った銀時になる。

こなた
「変身？　白衣の下に和服着てたんだ」

銀時
「まぁそんなとこだ…」

するといきなり戦車も変形しだした。

腕が組み変わり、足が出てきて、頭が飛び出し、二足歩行のロボットに姿を変える。そう、こいつは…

銀時
「『ガレオム』だぁぁぁぁぁぁ！！」

そう、スマブラXのボスキャラの中でもかなりの攻撃力を持つが防御が紙な超極端ボス、ガレオムである！！

ガレオム
「グォォォォォ！！」

ガレオムが腕を振り上げ、フェイトに叩きつける！！

フェイト
「バルディッシュ！！」

フェイトがバルディッシュを起動し、拳をかわす。

フェイト
「ハーケンセイバー！！」

金色の魔力刃が唸り、ガレオムに直撃する。

ガレオム
「グォォ！？」

ハーケンセイバーはガレオムの肩付近の装甲を易々と斬り裂き、大ダメージを与えた。

フェイト
「いける、さっきのナレーションが言った通り、攻撃力はすごいけど防御は弱い！！　一気に決める！！」

ナレーションとかの発言はやめようぜ、フェイトさん。

フェイトはバルディッシュを振りかぶりながら高速移動し、ガレオムに接近する。フェイトの一撃ならば、ガレオムの腕を落とすぐらい出来るだろう。だがしかし、だった。

ガレオム
「グォォォォォ！！」

なんと、ガレオムはいきなり片足でバレリーナのように高速回転したのだ。

フェイト
「しまっ…」

フェイトが回転に巻き込まれそうになった瞬間、銀髪の侍が飛び上がり、フェイトの前に躍り出た。

フェイト
「銀さ…」

銀時
「おるぁッ！！」

銀時はフェイトを抱きかかえ、回転するガレオムを木刀でぶん殴り、その反動でガレオムから見事に離れた。

銀時
「大丈夫か？　フェイト」

フェイト
「は、はい…」

フェイトがほんのり顔を赤くする。

フェイト
”ぎ、銀さん…かっこよかった…”

その後ろでは…

こなた
「フェイトちゃんにフラグが！！」

なのは
「フェイトちゃん…相手見つけちゃって…ズルいよ…」

フラグが立ったと騒ぐこなたと魔王を通り越してもはや第六天魔王になりか「何でランクアップしてるのかな？」…恋に飢えた猛禽の「聞いてないのかな？」…恋に憧れる魔法少女、高町なのはがいた。

なのは
「…まぁそれなら許してあげるの」

銀時
「おい！！　何話してるかは知らねーがとっととあと一人出てこい！！」

こなた
「はいはい～」

こなたが前に出て、蒼炎丸を解放する。

こなた
「フェイトちゃん、銀さん、ガレオムは攻撃力が高い。一撃でももらっちゃったら致命傷になる可能性がある」

フェイト
「ならどうするの？」

こなた
「私が一撃で沈める。でも時間がかかるから…仕込みが終わるまで時間稼いで！！」

銀時
「一撃で決められる程威力は申し分ないんだな？」

こなた
「それについては任せて。かがみん達の太鼓判つきだよ」

フェイト

「なら…行こう、銀さん！！」

銀時
「いよっしゃ！！」

フェイトと銀時はガレオムに接近する。ガレオムは背中につんだミサイルポッドからミサイルを撃った。

銀時
「遅え！！」

フェイト
「当たらないよ！！」

銀時は左に動いてかわし、フェイトは飛び上がる。

ガレオムは銀時は無視し、フェイトに拳をアッパー気味に繰り出した。

フェイト
「その程度なら…」

フェイトは逃げず、左手を突き出す。

フェイト
「プラズマスマッシャー！！」

フェイトの左手から雷撃が放出され、ガレオムの腕にぶつかる。

ガレオム
「グワァァァア！！」

ガレオムがたまらず腕を下げる。その瞬間、ガレオムの腕にヒビが入り、腕がくだけ落ちた。

フェイト
「よし！！　やった！！」

フェイトは喜ぶが、今回は深追いはしない。今回の目的はこなたのために時間を稼ぐこと。自分が倒す必要は無い。深追いはいらなかった。

ガレオム
「ガァァァァア！！」

ガレオムはミサイルをフェイトに向ける。フェイトはバルディッシュを構え直す。

その瞬間、いきなりガレオムががくんと膝をついた。

フェイト
「あれ？」

よく見ると、銀時がいつの間にかガレオムの後ろに周りこんでいた。

銀時
「おいおい…さっきから女ばっかり狙いやがってよォ…思春期ですかコノヤロー」

銀時が後ろから所謂『膝カックン』を決めたのだ。

フェイト
「銀さん…思春期ですかって…」

フェイトがやんわりと突っ込んだ。

ガレオムは立ち上がろうとする。が、立ち上がる前にこなたが叫んだ。

こなた
「銀さん!!　フェイトちゃん!!　用意できた、離れて!!」

銀時とフェイトはすぐさま離れる。こなたはそれを確認し、叫んだ。

こなた
「卍…解ッ!!」

こなたの周囲の蒼き焔が、こなたを取り巻き、形を作り出す。その姿は…不死鳥!!

こなた
「大無間蒼炎丸(だいむけんそうえんまる)…」

背中に蒼き焔で作られた不死鳥を背負い、薙刀を構えるこなた。これこそが、こなたの卍解、大無間蒼炎丸である。

銀時
「う、おおっ…」

フェイト
「これが…こなたの卍解…」

銀時とフェイトが唸る。それ程こなたの卍解はすごかった。

こなた
「銀さんとフェイトちゃんが頑張ってくれたおかげで…私は準備に徹する事が出来た…」

こなたが蒼炎丸を地面に突き刺す。すると…

こなた
「見せてあげるよ…」

地面から炎が立ち上がり、長さ十メートル、直径三メートルはあるであろう蒼き炎の柱が数十本生まれた。

こなた
「大気中には水素も酸素もある。炎使いの戦いとは…あらゆる物を武器にし、戦うこと…いくよ」

こなたは蒼炎丸をガレオムに向け一一言だけ呟き、薙刀をカシャッ、

と向きを変えた。

こなた
「千年　炎牢」

炎の柱が一気にガレオムに集まり、封じ込め、そして…激しく燃え上がった。

武器紹介並びに斬魄刀設定

この小説での斬魄刀は、ただの能力を持った刀です。霊なるものだけじゃなく、普通の人や物などにも攻撃できます。そこんとこを踏まえて、こなたの『蒼炎丸』を説明します。

斬魄刀　『蒼炎丸』

所有者　泉　こなた

こなたの斬魄刀で、その名の通り、蒼き炎を操る炎熱系の斬魄刀。攻撃力と素早さに特化する。解号は、青天に舞え『蒼炎丸』。

解放すると刃に不死鳥が彫られた薙刀になり、蒼き炎をまとう。また、戦闘術は麗とはやての家にいるシグナムに教えてもらっている。

卍解は『大無間蒼炎丸』。蒼き炎で出来た不死鳥を背に負い、飛行する事が出来るようになり、様々な攻撃の威力が上がる。また、もう一つ隠された能力があるとか…。

また、似たような卍解の日○谷君みたいに未完成ではない。

また、斬魄刀の本来の姿は蒼き不死鳥である。

次回予告!!

連戦連勝で意気上がるハルヒ隊の前に、さらなるボスが!!

エド

「ふ、ふざけてやがる…」

??

『サァ、カクゴハイイデスカ?』

ハルヒ、ついに力を解放!?

ハルヒ

「見せてあげるわよ…私の戦いを！！」

そしてついにラスボス現る！？

？？？

「貴様等の手にあるのは…地獄への片道切符だ！！」

銀時達の元に、諸悪の根源が迫る！！

銀時

「次回！！　クロス学園（ゼット）Ｚ組！！　第五話『エ〇ーマン…いやラスボスはレベル上げないと倒せない』。みんな、正座して見やがれ！！」

第四話『雑魚キャラが出たら大抵その作品のボスキャラも出る』（後書き）

…はい、こなたの能力は完全に日〇谷君です。やらかしましたが後悔はしてません！！（キッパリ）

では次回もお楽しみに！！

第五話『エ〇ーマン…いやラスボスはレベル上げないと倒せない』（前書き）

「濡れるッ！！」ー毒島冴子（学園黙示録）

「え…ぬ、濡れ…」ー高町なのは

「あ、あう…濡れる…なんて…」ーフェイト・Ｔ・ハラオウン

「何考えてんだお前らぁぁぁぁぁあ！！」ー小室孝

第五話『エ〇ーマン…いやラスボスはレベル上げないと倒せない』

一護
「おらぁ！！」

エド
「うおらぁ！！」

一護の月牙天衝がエアーマン…じゃなくてアーマン（スマブラ）を装甲ごとぶった切り、エドが錬金術で作り出した槍がアロアロス（やはりスマブラ）を次々貫く。

ハルヒ
「せりゃあ！！」

ハルヒはエドから借りた槍で対応していた。しかし…

麗
「ハルヒの能力って何なのかしら」

孝

「そういえば見たこと無いな…」

唯
「私も知らないよ～」

Z組ではかなり一般人に近い三人組が呟く。ハルヒの能力はまだ誰も見たことが無いらしい。

一護
「最後の一匹！！」

一護が最後のアーマンを斬り捨て、ステージ8もクリアとなった。

ハルヒ
「楽なもんね。もっと、ガーッ！！　みたいな敵出て来なさいよ！！」

ハルヒが槍を投げ捨てて言う。彼女にとってはかなり楽らしい。

ルルーシュ
「ごちゃごちゃ言うなハルヒ。まだステージ8をクリアした所だ。まだステージ7、ラスボスのステージ6がある。気を抜いてたらやられるぞ」

ハルヒ
「そんなの分かってるわよ」

ハルヒがステージ7と書かれた扉を開けた。そこにいたのは…。

？？？
『ドウモ。ハジメマシテ』

真っ黒い平面だった。

ハルヒ
「へ、平面よ。真っ黒な平面がいるわ！！」

ルルーシュ
「あ、あいつは…」

唯
「何ーっ！？　知っているのか、雷〇…ルルーシュ！！　あいたっ！？」

ルルーシュ

「雷〇じゃない！！　たまにボケるな唯！！」

ルルーシュが唯に突っ込んだ。

一護
「んで、あいつは何なんだルルーシュ？」

ルルーシュ
「あいつは…『Ｍｒ．ゲーム&ウォッチ』！！　任天堂の中でも最古参のゲームキャラで、その容姿から『平面』と呼ばれているスマブラキャラだ！！」

ちなみに、作者はゲーム&ウォッチをよく使います。タコ強いよタコ。横スマも好き。世間的には弱いみたいだが。

平面
『ソノトオリ。ソシテ、コンカイハ…ステージ7ノ、バンニントイウコトデス。…サクシャ、→、ヘイメンハヤメロ』

唯
「な、なんか強そう…」

ルルーシュ

「しかし…三対一だぞ？　スマブラで言うとチーム戦だ。お前一人で何が出来る！？」

ゲーム＆ウォッチ
『タシカニ。デスガ…』

いきなりゲーム＆ウォッチの体から影虫が大量に出てきた。そして形を形成していく。

ルルーシュ
「ッ！！　ま、まさかッ！？」

ハルヒ
「あの影みたいな虫…こいつから出て来てたの！？」

ゲーム＆ウォッチ
『サテ…』

現れたのは…

ルルーシュ
「デュ…『デュオン』…ッ！！」

そう。体の双方に頭があり、片方には大剣のような腕、もう片方にはレーザーガンのような腕がついて車輪で動く機械的なボス、『デュオン』であるッ！！

エド
「ふ…ふざけてやがる…」

デュオン
『サァ、カクゴハイイデスカ？』

デュオンがいきなり突進してくる。エド、ハルヒ、唯が飛び退いてかわした。

エド
「こいつは俺がやる！！」

ハルヒ
「三対一よ！！」

唯
「手伝うよ、二人共！！」

ステージ7
エドワード・エルリック&涼宮ハルヒ&平沢唯VSデュオン

唯
「ギー太!!　セットアップ!!」

ギー太
『OK!!　Master!!』

唯がギー太をセットアップし、ギターモードにする。

デュオン
『マズハヤッカイナアナタカラダ!!』

唯に向かってデュオンがいきなりレーザーを放った。

唯
「リフレクト・ソナー!!」

唯がギー太を演奏すると、唯の前に盾が現れ、そのレーザーを跳ね返した。レーザーはデュオンへと向かう。

デュオン
『フム』

デュオンはレーザーを飛ばし、ぶつけて相殺した。

デュオン
『ヤハリナカナカヤリマスネ』

唯
「えへへ～それ程でも～」

ルルーシュ
「真面目に戦えっ！！」

照れた唯にルルーシュが突っ込んだ。

エド
「挟み撃ちだ！！」

いきなりエドが唯とデュオンを挟む形に動き、デュオンに飛びかかる。

デュオン
『ワタシニハフタツカオガアリマスヨ？』

デュオンはナイフのような腕を振り回し、エドの槍と打ち合う。ナイフなどの打撃がある顔と、レーザーなど遠距離に優れる顔。二つの顔を持つデュオンは、近距離も遠距離も備えた万能のボスといえる。

今は唯が遠距離、エドが近距離の相手をしていた。

ハルヒ
「なら横から攻めるわよ！！」

ハルヒが槍を振り回してデュオンの横に飛びかかる。横からはデュオンは無防備だった。

デュオン
『サンニンカ！！　シマッタ！！』

デュオンの反応が完全に遅れた。ハルヒの槍がデュオンに振り下ろされ一

デュオン
『ナンテ、イウトオモイマシタカ？』

ハルヒ
「え？」

デュオンはいきなり手を折りたたみ、回転しだした。

デュオン
『スピニング・タックル』

ハルヒ
「ぐっ！！」

ハルヒはデュオンの回転により弾き飛ばされ、壁に激突した。

唯
「はるにゃん、大丈夫！？」

ハルヒ
「かっは…いったぁ…な、なんとか大丈夫…槍で防いだからっ…！？」

ハルヒが槍を見ると、槍が先程の衝撃に耐えられず、折れてしまっていた。

デュオン
『デハ、トドメトイキマショウ』

デュオンの頭に青色のエネルギーが集められる。

ハルヒ
「やっば…」

唯
「はるにゃん!!」

唯がハルヒの前に飛び出し、先程と同じ防壁を張る。しかし…

デュオン
『スミマセン。コレハ、バリアガキカナイビームナンデスヨ』

唯
「んな!?」

デュオン
『オソイデス』

デュオンの頭部からビームが放たれる。そのビームが唯の防壁に触れるやいなや、防壁を打ち砕き、唯を吹っ飛ばした。

唯
「きゃぁぁぁぁあっ！！」

唯はビームを受けて吹き飛び、壁に叩きつけられ倒れ込んだ。気を失ったようだ。

ハルヒ
「唯ちゃん！！」

デュオン
『コレハヨソウガイ。デハ、アナタカライキマショウ』

デュオンが唯に向けてレーザー腕を上げる。

デュオン

『デハ、サヨウナラ』

レーザーが放たれ、唯に飛び、爆発した。

デュオン
『…オワリマシタカ』

エド
「…ざけんなよ…てめぇ…」

エドの言葉にデュオンは振り返る。

デュオン
『フン。チカラガナイヤツハシヌダケナンデスヨ』

ハルヒ
「それはどうかしら？」

デュオン
『ナニ？』

爆煙の中からハルヒの声がする。まさか…

ハルヒ
「ギリギリ間に合ったわね…見せてあげるわよ…」

煙がはれ、唯をお姫様抱っこしたハルヒが現れる。ハルヒの周りには、黒き炎が渦巻いている。

ハルヒ
「私の戦いを!!」

デュオン
『ホオ…。コレハオドロキマシタ。マダチカラヲカクシテマシタカ。コレハ…［シヌキノホノオ］？』

ハルヒ
「えぇ…その通り…。私が持つ死ぬ気の炎は…闇!!　能力は…模倣!!」

ハルヒはその辺落ちていた石に闇の炎を当てる。そして、指を鳴らした。すると…炎が触れた石が爆発を起こした。

ハルヒ
「模倣とは…一つだけ、他の人の能力を自分の物に出来る事。私が

持つ能力は…『キラークイーン』！！　闇の炎が触れた箇所を爆弾に変える事が出来る能力よ！！」

エド
「それジ〇ジ〇の吉良〇影じゃねぇか！！」

エドが突っ込む。

ハルヒ
「そうよ」

ハルヒはあっさり認めた。

デュオン
『アタラナケレバヨイノデショウ？』

ハルヒ
「そう簡単にはいかないわ！！」

ハルヒはそう言いながらポケットから筐を取り出した。ハルヒの筐兵器のようだ。

ハルヒ
「来なさい!!　闇龍(アップイヤーレ・ドラーゴ)!!」

指にある黒いリングに炎が灯り、筐に注入される。そして飛び出したのは…。

デュオン
『コ、コレハ…』

漆黒の体と瞳をした空を飛ぶ巨大な闇の龍であった。

ハルヒ
「驚いた？　この子はストーレ。私の龍よ」

ストーレと呼ばれた龍はハルヒの所まで顔を下げ、ハルヒはストーレの頭を撫でてやっていた。流石ハルヒ。龍もあっさり手懐けている。

ハルヒ
「ストーレ、行くわよ!!　形態変化(カンピオ・フォルマ)!!」

ハルヒが形態変化を宣言すると、ストーレが大量の闇の炎に飲まれて消えた。すると…無数の武具が空中に現れるではないか。

ハルヒ
「無数の兵器（アスティオーゾ・インヌメレーヴォレ・アルマ）！！」

ハルヒの周りに闇の炎をまとった多数、また多種多様な種類の武具が現れる。刀、槍、薙刀、戟、斧、銃に投げナイフや鉄爪、それこそなんでもある。

ハルヒ
「さて、行くわよ！！」

ハルヒは刀を二本取り、他の武具を消した。デュオンに突撃する。

デュオン
『ヌウ！！』

デュオンはレーザーを放つが、ハルヒは片っ端から闇の炎を当てて爆発させ、防いだ。

ハルヒ
「はぁっ！！」

ハルヒがデュオンの足を切り裂く。切れ味は抜群だ。そして…

ハルヒ
「喝！！」

デュオンの足が爆発した。

デュオン
『グオオ！？』

一護
「すげぇ！！」

ルルーシュ
「デイダラかよ！？」

一護は驚き、ルルーシュは冷静に突っ込んだ。

デュオン
『キ、キサマ…』

ハルヒ
「そんな顔しても無駄よ。何故なら…」

ハルヒはデュオンを刀で指す。

ハルヒ
「『キラークイーン』はすでにあなたの下の地面に触れている！！
食らいなさい！！」

ハルヒが自分の目の前で刀を十字に組む。

ハルヒ
「喝！！」

デュオン
『グオォォォォォォォ…』

デュオンは大爆発を起こし、塵になって消えた…。

銀時

「さて…ラスボスという訳だが…」

銀時達はステージ6とでかでかと書かれた扉の前に立っていた。

桂
「しかし…一言言っていいか？」

エリザベス
『俺からも』

フェイト
「何？　二人とも」

フェイトが聞く。

桂
「俺を活躍させろ、作者ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

エリザベス
『俺もじゃゃコルァァァァァァァァ！！』

今までは戦っていない二人が叫ぶ。

なのは
「まぁまぁ…まだボス戦もあることだし…多分活躍あるよ！！」

桂
「むぅ。ならいいのだが…」

ハルヒ
「あ、いたいた」

そこまで話した時、ハルヒ達が向こうからやってきた。

銀時
「無事だったか」

ハルヒ
「筐兵器使う羽目になっちゃったけどね…」

こなた
「私も蒼炎丸使ったよ」

唯

「私もギー太を使ったよ」

オリジナル設定がある三人が話す。

桂

「さて…では行くか」

桂がドアノブに手をかける。その瞬間、桂の動きが止まった。

銀時

「どうした、ヅラ」

桂

「ヅラじゃない桂だ。いや…感じる…この圧倒的な畏怖!!　間違いなくこの先にラスボスがいる!!」

ルルーシュ

「そんな事分かってる!!　カッコつけてないで早く開けろ!!」

ルルーシュが突っ込む。もはやルルーシュはかがみと並ぶ突っ込みキャラである。銀魂のメガネ涙目。

ルルーシュ
「メガネと一緒にするな!!」

ごめん。やっぱ失礼だったな。

桂
「では行くぞ!!　天皇陛下バンザーイ!!」

なのは
「何言ってるの!?」

桂が勢いよく扉を開けた。そこにいたのは…

普通の会社員だった。

そう。普通の会社員だった。スーツを着て、いやに老け顔だ。

銀時
「あ、あなたは…穴子さん!?」

穴子
「その通りだよ。坂田くん」

そう。この部屋にいたのは、国民的アニメ『サザエさん』のキャラ、穴子であった。

ルルーシュ
「…あなたがラスボスなのか？」

当麻
「…え？　ただの会社員じゃ…」

当麻がそこまで言った時、三人の少女が前に出た。ハルヒ、なのは、こなただった。

ハルヒ
「…まだ、生きてたのね…」

なのは
「久しぶりだね…」

こなた

「まさか、また相対するとはね…」

ハルヒ、なのは、こなた
「「「魔王アナゴ！！」」」

－ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

なのは
「ここからは武器、能力紹介なんだよ…。興味無いとか言っちゃってる人は少し…頭冷やそっか…」

死ぬ気の炎『闇』

使用者　涼宮ハルヒ

能力は『模倣』。他の誰かの能力を一つだけ自身の物に出来る。ハルヒはこれで『キラークイーン』を持っている。

ちなみに、ハルヒは精製度Ａの闇のリングを所有している。

まだまだ未知の死ぬ気の炎であり、他にも能力があるのかもしれない。

『キラークイーン』

闇の炎で触れた物、又は者を爆弾に変える能力。爆弾になっても外見は全く変化無し。一度に複数の物を爆弾にすることも可能。しかし、酸素が無い場所では爆発しない。

触れた一部だけを爆弾にしたり、一部に触れただけで大きな物体を丸ごと爆弾に変える事も出来るなど、爆弾の大きさも選択可能。だが、あまりにも巨大な物を爆弾にすると力を使い果たすため、ハルヒは任意で爆弾の大きさを調整している。一度爆弾にしたものを爆発させずに元の物に戻す事は出来ない。

爆弾には、ハルヒが指を鳴らす、また『喝！！』と叫ぶことによって爆発するタイプと、地雷や機雷のように何かが触れた事によって爆発する接触起動型タイプの二種類が存在し、ハルヒは任意にこれを選択する。前者は爆発のタイミングを任意で選択可能だが、逆に意思表示が無いと爆発しない欠点がある。後者は触れた瞬間爆発する事でそのデメリットを解消したが、触れただけで爆発するので狙いが定まらず、誤爆の危険性もある。

爆破のタイプも二種類あり、通常の爆弾のように爆弾そのものが爆発し、爆圧と炎によるダメージを与える物と、爆弾そのものではなく、「爆弾に触れていた物、又は者」が爆発し、爆弾そのものはそのまま残る物がある。どちらの爆弾にしてもハルヒは爆発の規模を調整可能で、大発破をかましたり、小規模爆発をさせたりなど応用の幅は広い。

また、ハルヒは任意で闇の炎に触れた物を爆弾にしたりしなかったりも出来る。

なお、原作に出た鋼鉄戦車、通称キラークイーン第二の爆弾『シアーハートアタック』、そして無敵の能力と謳われた時を吹っ飛ばす

キラークイーン第三の爆弾、『バイツァ・ダスト』は使用不可能らしい。

筐兵器『闇龍（アップイヤーレ・ドラーゴ）』

闇の炎をまとった巨大な龍。イメージ的には遊戯王の『オシリスの天空竜』を真っ黒にし、少し痩せ形にした感じ。

性別は男。ハルヒは彼を『ストーレ』と名付け手懐けている。

口から闇の炎を吐く。また、体に炎をまとい攻撃する事で敵を爆弾にする事も可能。

形態変化（カンビオ・フォルマ）『無数の兵器（アスティオーゾ・インヌメレーヴォレ・アルマ）』

ストーレが闇に包まれて消え、あらゆる種類の武具を出現させる。武具ならば剣から銃まで種類は幅広い。ハルヒが呼び出せばいきなり空間に現れる。

そのままでも殺傷能力は高いが、闇の炎、また『キラークイーン』と掛け合わせる事で真価を発揮する。

次回予告！！

アナゴ

「アイテムなんぞ使ってんじゃねぇぇぇぇぇ！！」

ラスボスは…魔王アナゴ！！

実は若本キャラのアナゴの実力はいかに！？

こなた
「相変わらず…強い…」

なのは
「…私だって、あの時とは違う」

ハルヒ
「バイツァ・ダスト（負けて死ね）！！」

こなた、なのは、ハルヒの魔王アナゴとの関係とは！？

ルルーシュ
「次回、クロス学園（ゼット）Z組、第六話『続き物の前作のラスボスは大体が続編にもチョイ役で出る』。ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命ずる…貴様は、次の話も見ろ！！」

銀八
「さーて。今回から、読者の皆様にある募集をしようと思う。」

かがみ
「何よ？」

銀八
「それは…この小説、又はキャラクターへの質問、要望、その他諸々だ！！」

剣心
「ほう！！　ということは…」

銀八
「そう。この小説でもやるぜ…。毎度おなじみ質問コーナー、『教えて！！　銀八先生！！』」

リクオ
「どんな質問でも要望でもいいから、どんどん送ってきてください！！」

美琴
「送ってこないと、このコーナー自体、出来ないしね」

作者
「その通り。読者の皆様。よろしく頼むぜ！！　どんどん送ってきやが…あ、嘘です、送ってきてください！！　お願いします！！」

第五話『エ〇ーマン…いやラスボスはレベル上げないと倒せない』（後書き）

質問、要望お願いします！！

…ってか『魔王アナゴ』知ってる人いるのかなぁ…。

知らなかったら質問してください。まぁ次回でアナゴの過去を明かしますが。

次回もお楽しみに！！

第六話『続き物の前作のラスボスは大体が続編にもチョイ役で出る』（前書き）

人は「入れ」と言うと用心して入らない。「入るな」と言うとムキになって入ってくる―鋼田一豊大（ジョジョの奇妙な冒険第四部ダイヤモンドは砕けない）

「入れ」って言ってくれたら遠慮なくお邪魔するよ。「入るな」って言ったらスターライト・ブレイカーなの!!―高町なのは

押し問答だけで家を壊すな!!　怖すぎるわ!!―坂田銀時

第六話『続き物の前作のラスボスは大体が続編にもチョイ役で出る』

ハルヒ、なのは、こなた
「魔王アナゴ！！」

アナゴ
「ふむ…久しぶりだな、涼宮、高町、泉」

こなた、なのは、ハルヒに『魔王』と呼ばれたアナゴは三人に軽く頷きながら答える。

銀時
「お前ら…接点があるのか？」

ルルーシュ
「それに…魔王？」

銀時とルルーシュが聞く。ハルヒはゆっくりと語り出した。

ハルヒ
「あれは数年前の事…

以　下　省　略

…という訳よ」

ルルーシュ
「省略すんなぁぁぁぁぁあ!!　読者の皆さんも知らない人が多いんだよ!!」

ルルーシュが鋭い突っ込みを入れた。

なのは
「あれは…私がまだ、幼かったころ…」

銀時
「勝手に回想すんな!!」

なのはは銀時の突っ込みなんか気にせず、回想に入った。

なのは
「以前、私達は世界を支配しようと企む魔王と、異世界の『ニコニコ』で戦ったの」

［回想　ニコニコ（異世界）］

アナゴ
「サイコ…クラッシャー！！」

アナゴがサイコパワーを纏った突撃で前線にいた仲間、ロックマンや阿部さん、リョウを吹き飛ばした。なのはは間一髪でサイコクラッシャーを避ける。

なのは（A's時代）
「ふざけるな…なの…」

アナゴ
「ふん…貴様等の力はこの程度か！？　くだらん！！　全員粉々に打ち砕き、亜空間にばらまいてくれるわ！！」

海馬
「そんな事はさせんわ！！　神の鉄槌を喰らうが良い！！　オベリスク、ゴッドハンドクラッシャー！！」

仲間の海馬瀬人がアナゴに神の鉄槌を喰らわせる。が、アナゴはそれを受け止めた。

アナゴ
「ぐ…ぶるぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

アナゴは叫び、ゴッドハンドクラッシャーにダメージを受けながらも耐えた。

アナゴ
「どうした…この程度か？」

しかしその時、アナゴは膝をついた。

アナゴ
”なに…まさか…ダメージが足に…！？”

言葉
「どうやら限界のようですね…行きます！！　ヒテンミツルギスタイル…」

仲間の一人、桂言葉が愛用の刀、古青江を構え、アナゴに突撃する。

言葉
「お取り寄せェェェェェェェェェェェェ！！」

言葉が繰り出したのは飛天御剣流の技の一つ、九頭龍閃だ。ちなみ

にお取り寄せとは、アメリカの「るろうに剣心」の空耳だ。

九頭龍閃が完璧にアナゴをとらえ、吹き飛ばした。

アナゴ
「ぐぁぁぁぁあ！！　おのれぇ…」

こなた
「終わりだよ！！　虚空烈風斬！！」

レバ剣を装備したこなたが虚空烈風斬をアナゴに喰らわせる。

なのは
「ディバイン…バスター！！」

なのはの砲撃がアナゴにヒットし、壁に叩きつけた。

アナゴ
「ぐぁぁぁぁあ！！　お、おぅんのれぇ…次はこちらの…「何勘違いしてやがる」…ヒョ？」

アナゴの台詞に遊戯が割り込んだ。

遊戯
「まだ俺達のバトルフェイズは終了していないぜ！！」

アナゴ
「な、何だと…！？」

遊戯
「速攻魔法発動、バーサーカーソウル！！」

アナゴ
「バーサーカーソウル？」

遊戯
「俺のＭＰを全て支払い、効果発動！！　こいつは俺のデッキからモンスターカード以外のカードが出るまで、何枚でもカードをドローし、墓地に捨てるカード。そして、その墓地に捨てたカードの枚数分だけ、攻撃力１５００以下のモンスターは、追加攻撃出来る！！」

アナゴ
「な、何だってー！？」

遊戯
「さぁ行くぜ！！　まず一枚目、ドロー！！　モンスターカード、クイーンズナイトを墓地に捨て…魔導戦士ブレイカー、追加攻撃！！」

アナゴ
「ぐおぁぁぁあ！！」

苦しむアナゴをよそに、遊戯は二枚目をドローする。

遊戯
「二枚目ドロー、モンスターカード！！」

アナゴ
「ぐおぁぁぁあ！！」

アナゴが膝をつき、倒れた。

遊戯
「ドロー、モンスターカード！！　ドロー、モンスターカード！！　ドロー、モンスターカード！！　ドｒ「もうやめて、遊戯君！！」…ああ」

こなたが叫び、遊戯も攻撃を止めた。かなりのオーバーキルであろう。しかし…アナゴは、立ち上がった。

アナゴ
「こ、こうなっては…あれを使うしかない…」

ハルヒ
「何かしてくるわよ！！」

ハルヒが身構える。アナゴは体を屈め、力を貯めた。

アナゴ
「喰らえ…ワールド・デストロいッ！？」

アナゴは、いきなり体が動かなくなるのを感じ、倒れた。

アナゴ
「ふっ…ワールドデストロイヤーは最後の切り札。使用は一回のみ、か…」

そう、アナゴはすでに先程のＦｏｏさん、八雲紫、マスク・ザ・斉藤、ビリー・ヘリントンとの戦いでワールドデストロイヤーを使用していたのである。

アナゴ
「ふっ…最後ともなると…死ぬのが惜しいな…」

アナゴはそう呟き、消えていった…。

ルルーシュ
「なる程、知った敵って事か…しかし、アナゴの声、どこかで聞いた事があるんだが…」

ルルーシュが首を傾げた。

アナゴ
「さぁ、私がラスボスだ。戦おうじゃないか。人数は…原作、ニコニコRPG通りだと味気ない、ここは九人で来い！！」

こなた
「上等！！」

ハルヒ
「バイツァ・ダスト（負けて死ね）！！」

なのは
「…私だって、あの時とは違う！！」

フェイト
「絶対…負けない」

桂
「ようやく出番か！！」

エリザベス
『待ちくたびれたぜ！！』

ルルーシュ
「賽は投げられた…か」

一護
「…本気で行くぜ…」

銀時
「んじゃ、一丁行くか…」

ステージ６、泉こなたａｎｄ涼宮ハルヒａｎｄ高町なのはａｎｄフェイト・Ｔ・ハラオウンａｎｄ桂小太郎ａｎｄエリザベスａｎｄル

ルーシュ・ヴィ・ブリタニアａｎｄ黒崎一護ａｎｄ坂田銀時ＶＳ魔王アナゴ

ハルヒ
「無数の兵器（アスティオーゾ・インヌメレーヴォレ・アルマ）！！」

ハルヒがまるで王の○宝のように闇の炎を纏った武器を展開する。が、出てくるのは宝具では無く、ただの武器であるが。

アナゴ
「新たな力、か…成長したようだな、涼宮」

ハルヒ
「ご丁寧にどうも…挨拶代わりに、喰らいなさい！！」

ハルヒはナイフを指に十本程はさみ、投げつけた。

アナゴ
「ふん、当たるとでも思ったか？」

アナゴはすぐさまかわす。しかし…

ハルヒ
「喰らいなさい！！」

ハルヒが指を鳴らす。すると、大音響と共にナイフが爆発した。

ハルヒ
「キラークイーン！！　ただのナイフじゃあないわよ！！」

ハルヒはガッツポーズをする。しかし、アナゴは…

アナゴ
「なる程な。触れた物を爆弾に変える能力か」

なんと、アナゴは無傷で立っていた。

ルルーシュ
「今ので無傷だと！？」

ハルヒ

「違うわ…多分…」

アナゴ
「その通り…若本〇夫奥義、ベリィーメロンで回復してやったのだ！！」

アナゴはメロンの皮を指し示す。アナゴは中の人が若本〇夫だ。使う技も自然と強力になる。

アナゴ
「今度はこちらから行くぞ！！　若本〇夫奥義…かめはめ波！！」

アナゴの手からかめはめ波が発射され、銀時達へ向かう。これはセルのかめはめ波だ。かなり強力のはずである。

銀時
「やべ…みんな、かわせ！！」

銀時達はかわす。するとかめはめ波はなんと壁を数枚ぶち抜き、空へと飛んでいった。恐るべしである。

なのは
「あ、あまりにも強力すぎる！！」

アナゴ
「どした？　この程度か？」

こなた
「卍解！！　大無間蒼炎丸！！」

かめはめ波を飛んでかわしたこなたが卍解し、蒼き炎の不死鳥で飛び上がり、上空からアナゴに攻撃をしかけた。

こなた
「炎鳥閃嘴…不倒！！」

こなたの蒼き炎がアナゴを襲う。だが…

アナゴ
「甘いな。ジェノサイドカッター！！」

アナゴが勢いよく足を振り上げると、足がカッターになり、こなたを襲った。こなたは不死鳥の翼で受けるが、翼を斬り裂かれアナゴから離れた。

こなた
「むぅ。卍解でも駄目かぁ…相変わらず…強い」

アナゴ
「次は私から行くぞ!!　死を、くれてやる…。若本〇夫奥義、サイコクラッシャー!!」

アナゴがサイコパワーを纏い、突撃してくる。

ルルーシュ
「まずい!!」

一護
「任せろ…卍解!!」

一護が右手に斬月を持ち、構える。すると、いきなり一護から爆発的な霊力が放たれた。

一護
「天鎖斬月!!」

一護の手に黒刀が握られる。もはや言わずとしれた一護の卍解、天鎖斬月だ。

一護
「月牙天衝！！」

黒き月牙が放たれ、アナゴにぶつかった。

アナゴ
「ぐ！？」

サイコクラッシャーと月牙は相殺された。アナゴは驚いたように呟く。

アナゴ
「ほう…我がサイコクラッシャーを相殺するとは…中々だ。出来るな？」

一護
「そいつはどうも。だがな、俺の卍解の真髄は月牙天衝じゃねぇ…」

アナゴ
「ほう…。見せてみろ、お前の真の力を！！」

アナゴが叫んだ瞬間、一護の姿が消えた。

瞬間、一護がアナゴの後ろに回り込み、天鎖斬月を振りかぶる。決まった、誰もがそう思った。だが…

一護
「終わり…ぐぁっ!?」

なんと、いきなり一護が斬り裂かれた。アナゴは何もしていない!!

アナゴ
「甘いな…神速の抜刀術!!　貴様が神速で動けるなら…私は神速の抜刀術を見せるだけだ!!」

一護
「か、刀の軌道が…全く見えなかった…速すぎる…」

一護は呆然とした。

フェイト
「カートリッジロード!!」

フェイトが隙をみてカートリッジをロードする。アナゴは気づき、フェイトに顔を向けた。

フェイト
「トライデントスマッシャー！！」

三叉槍のような雷撃が放たれ、アナゴへと向かう。

アナゴ
「ふん…ならばバルバトスカウンターを喰らうがいい…術なんぞ使ってんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！」

アナゴが叫ぶと、なんとトライデントスマッシャーが消え去った！！

フェイト
「えええ！？　何今の！？」

ルルーシュ
「く…今のはバルバトスカウンター！！　テイルズオブディスティニー2の裏ボス、バルバトス・ゲーティアが使用するカウンターだ！！　アイテムを使う、術を使う、回復する等の条件を満たした場合、カウンターで速攻攻撃してくる技だ！！　だが今回は…ただ術を消し去るだけのようだな」

アナゴ
「ニコニコＲＰＧ遵守でな。まぁあの中ではＭＰを０にする能力だが」

銀時
「な、なんだそれ無敵じゃねーか！！」

あまりにも強いアナゴの能力に皆言葉を失う。だが…

桂
「くらえ！！」

エリザベス
『そおりゃあ！！』

桂とエリザベスが刀と板でアナゴを殴りつけた。

アナゴ
「ぐお！？　き、貴様…な！？」

アナゴが驚き、足下を見る。なんと、砂がアナゴの足を固め、動きを封じていた！！

銀時
「おいヅラ、まさかてめー…」

桂
「ヅラじゃない…我津羅だ！！」

そう言う桂は何故か瓢箪を背負っており、額に『桂』という文字が描かれている。

フェイト
「いや我〇羅だぁぁぁぁあ！！」

フェイトが鋭く突っ込む。

我津羅
「貴様が中の人ネタを使うなら…こちらも使うだけだ！！　くらえ、石〇彰奥義、流砂爆流！！」

大量の砂が現れ、アナゴを飲みこむ！！

我津羅

「石〇彰奥義、砂爆大葬！！」

我津羅が砂に圧力をかけ、アナゴにダメージを与えた。

アナゴ
「ぐ…ぶるぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

アナゴが砂から飛び出すが、かなりのダメージがあったようだ。

アナゴ
「お、おのれ…まさか貴様等も中の人ネタを使うとは！！」

ハルヒ
「なら私もいくわよ！！　平野〇奥義！！」

ハルヒが上空に飛び上がる。

ハルヒ
「念動（サイキック）ー！！　超踵落としッ！！」

ハルヒがどっかの中学生念動能力者のような技を繰り出し、アナゴに踵落としを決めた。

アナゴ
「ぐはぁ！！」

アナゴは床に叩きつけられた。

アナゴ
「お、おのれ…ならばこれでどうだ！！　若本〇夫奥義、オールハイル、ブリタニアぁぁぁ！！」

アナゴが叫ぶ。オールハイルブリタニア。敵全体を支配する能力を持つ技である。

アナゴ
「さぁ…奴らを殺せ！！」

なのは
「イエス、マイロード」

フェイト
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ」

銀時
「…」

事実、今回も味方全体が操られていた。…ただ一人を除いては!!

ルルーシュ
「福〇潤奥義…裂き狂え、瑠璃色孔雀!!」

アナゴ
「な、なんだとぉぉぉぉ!?」

いきなりアナゴにルルーシュが瑠璃色孔雀を繰り出し、縛り付けた。

アナゴ
「ば、バカな!?　何故支配されない!?」

ルルーシュ
「子供の頃から聞き飽きてるんだ…今更支配なんかされるか!!
なんか聞き覚えがある声だと思ったぜ…」

ルルーシュが叫ぶ。親父の声などでは支配などされないのだろう。

アナゴ
「く、こんな物！！　私はクール◯ーンではないぞ！！」

ルルーシュ
「無駄だよ…御覧」

ルルーシュが瑠璃色孔雀にある蕾を示す。

ルルーシュ
「その蕾に溜まっているのは…お前の力だ。その花達はお前の力を奪って成長する。ここから先お前の放つ力は…全てその花の物になる。…分かるな？　その花の咲く瞬間が、お前の最後だ…魔王アナゴ！！」

アナゴ
「く、くそぉおおおおおお！！」

花が…裂き狂った。まるで砂漠に咲く…蒼き百合のように…。

アナゴ
「ぶ、ぶるぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

ルルーシュ

「まだ倒れないだと！？」

アナゴは死力を振り絞り、立ち上がった。

アナゴ
「ゆ、許さん…許さなぁぁぁあい！！　若本〇夫奥義！！　ジェノサイドヘブン！！」

アナゴがルルーシュに突進する。しかし…

なのは
「ディバイィーン！！　バスター！！」

いきなりアナゴの横から桜色の砲撃が放たれ、アナゴを襲った。アナゴはなんとか避ける。

なのはがルルーシュの前に出る。

なのは
「ルル君には私が手を出させないよ…」

ルルーシュ

「ありがとうな、なのは」

ルルーシュがなのはに礼を言う。

なのは
「い、いいよ！！」

なのはが顔をほんのり赤くしてルルーシュを見てアイコンタクトした。

フェイト
”あれ…何だか…違和感が…”

この時フェイトは、今感じた違和感が次回の話になっていきなり急展開を見せる事などは知る由もなかった…。

さて、次回の話は置いておき、アナゴとの戦いに戻ろう。

アナゴ
「お、おぅんのれぇ…。な、ならば…また一度だけ使用出来るようになった…ワールドデストロイヤーで丸ごと撃滅してくれる！！」

ワールドデストロイヤー。先程も出たバルバトス・ゲーティアが使う最強技で、一度発動するとガード不能の画面全体攻撃を行い、問答無用に味方全員を即死させるという鬼畜技だ。

なのは
「ワールドデストロイヤー！？」

ハルヒ
「…また使用可能になったのね…」

こなた
「紫さん達が負けた技…ヤバいね…」

技の詳細を知っているハルヒ達が唸る。ワールドデストロイヤーはそれほど強力なのだ。

アナゴ
「ならば、喰らうがいい！！　ぬうぉぉぉぉぉぉ！！」

アナゴが力を貯める。ワールドデストロイヤーの予備動作だ。

しかし、アナゴは気づいていなかった。いつの間にか、ハルヒ達の中から、一人の侍と金色の魔導士がいなくなっていた事に。

アナゴ
「ふ、ふふ…一撃で沈めてやるよぉ！！　覚悟は出来たかぁぁぁあ！？」

銀時
「覚悟？　そんな物とっくにしてるぜ…」

アナゴ
「何ぃ？」

いきなりアナゴの上空から声がした。アナゴは上を振り仰ぐ。そこには銀時とフェイトがいた。いつの間にか上空に飛び上がっていたのだ。

フェイト
「魔王アナゴ。あなたもワールドデストロイヤーに頼るようならもう限界だ…。これで終わらせる！！」

フェイトが叫ぶ。そう言うフェイトは何故か黒い仮面をつけ、腕は機械で覆っていた。

エド

「…ランファン？」

フェイト
「うん」

そう。フェイトは「鋼の錬金術師」で作者が一番好きなキャラクター、ランファンになっていた。

フェイト
「行くよ…水樹〇々奥義！！」

ランファンの姿をしたフェイトが瞬間、アナゴの後ろに回った。

アナゴ
「ぬ！！」

フェイト
「はぁぁぁあ！！」

フェイトが機械の腕についた刃を肘鉄でアナゴに叩きこむ。

アナゴ

「ぐぁぁぁぁあ！！」

フェイト
「まだまだぁ！！」

フェイトはさらに連続攻撃を加える。

アナゴ
「ぐ、ぐぅ…おのれ…」

フェイト
「もう投降したらどうですか？」

アナゴ
「誰がするか！！」

フェイトの投降勧告をアナゴが突っぱねる。仮にも魔王。投降する気は全く無いようだ。

銀時
「なら…とどめと行くぜ」

アナゴ
「こい…坂田銀時！！」

銀時とアナゴが向かい合った。フェイト達は離れる。…近寄り難い雰囲気が、二人から出ていた。

その時、二人の間を一陣の風が吹き抜けた。

それを合図に、銀時が走り出した。アナゴも同時に走り出す。

二人の距離が段々近づいていく。銀時は木刀ではなく、右手に巨大なハサミ、左手にデバイス、デュランダルを持っている！！

フェイト
「ってデュランダル盗んできたのぉぉぉぉぉぉ！？」

ルルーシュ
「しかもそのハサミはまさか！？」

フェイトとルルーシュが突っ込む。

銀時

「行っくぜぇぇぇぇぇぇ！！」

アナゴ
「ぶるぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

銀時とアナゴが同時にジャンプする。

銀時
「杉田〇和…極悪斬血”提督”真拳奥義…」

なのはａｎｄフェイト
「「”提督”がついたぁぁぁぁぁあ！？」」

銀時は何故か極悪斬血真拳に提督をつけた。

アナゴ
「何をやってくる！？」

銀時
「『イチゴが果物じゃないのは何故じゃあぁぁぁぁぁあ！！』」

なのはａｎｄフェイト

「「全くクロノ（君）とＯＶＥＲ関係ない私情で技名決めたぁぁぁぁぁあ！？」」

銀時がまるで鬼神のようにハサミでアナゴを斬りつけ、デュランダルで…殴りつけた。

ルルーシュ
「それって殴りつける物か！？」

ルルーシュの強烈なツッコミが炸裂した。

アナゴ
「ぐはぁぁぁあ！？　ぐ、ぐ…耐えた…ぞ！！」

アナゴは銀時の攻撃に耐えきった。…はずだった。

銀時
「そいつは甘いな…」

銀時はいつの間にかデュランダルを投げ捨て、木刀を握っていた。

銀時

「食らえぇぇぇぇぇぇぇ！！」

アナゴ
「ぐぁぁぁぁぁあ！！」

銀時の木刀がアナゴに炸裂した。アナゴは吹き飛び、壁に激突した。

アナゴ
「ぐは…まだ…まだ…な！？」

壁に激突したアナゴの体が、塵になりだした。もはや限界を超えたようだ。

アナゴ
「ふ…限界…か。坂田銀時！！」

銀時
「なん、だ…？」

アナゴが死力を振り絞り、銀時に話しかける。銀時も疲労困憊だったが、アナゴに言葉を返した。

アナゴ
「貴様…私で…終わりと思うなよ…私を…復活させた男が…いる…。
そいつこそが…黒幕…っ！！」

アナゴは完全に、塵になって消えた。

ハルヒ
「やった…かしら？」

唯
「多分…分かんないけど…」

銀時
「…強敵…だったな…」

皆、風に舞うアナゴの塵を眺めた…。

ボウリング編　完

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！！」

銀八
「はいはい、始まりましたこのコーナー。銀魂がある小説なら大体ある定番コーナー『教えて！！　銀八先生』。今回は記念すべき第一回だ！！　今回のアシスタントは、人呼んでZ組最強の魔王、高町なのは「スターライト・ブレイカー！！」ぐぁぁぁぁあ！！」

なのは
「魔王とか言ってる人は容赦なくスターライト・ブレイカーなの！！　まぁそれを覚悟でそれに関する質問をしてきてもよろしい！！」

銀八
「お前、読者にはやめとけよ…」

なのは
「私を魔王と呼ぶ人にはＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩなの！！　それは銀八先生も同じなの！！」

銀八
「怖すぎるわ！！」

なのは
「では早速行くよ！！　ペンネーム、『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問、『こなた、唯、ハルヒのオリジナル武器って元ネタあるんですか？　そしてこれから先、他のキャラにもオリジナル設定ってあります？　気になるので教えてください。』だって。…確かに気になるね。あの三人」

銀八
「まぁこれはあの三人自身に答えてもらうか。来い、ハルヒ、こなた、唯！！」

三人が歩いてくる。

銀八
「お前らの武器の元ネタってなんだ？」

ハルヒ
「私はｆａｔｅの『王の財宝』らしいけど…全く違うんじゃないかしら？　作者があんまりｆａｔｅ知らないらしいのよね…。だから『とある』の白井黒子のテレポート的な物と考えてもらっていいわ。『キラークイーン』は…『ジョジョの奇妙な冒険』ね」

こなた
「私は完全に『ＢＬＥＡＣＨ』の日番谷冬獅郎君の炎バージョンだ

ね」

唯
「私のギー太は完全オリジナルだよ～。私につける能力が思い浮かばなかったんだって」

銀八
「結構考えてはあるんだな…」

なのは
「それと、二個目は？」

銀八
「あぁ。まだまだオリジナル設定は出るらしいぞ。特に期待できるのは…原作で戦えない奴だ！！」

こなた
「かがみんとか？」

かがみ
「かがみん言うな！！」

銀八

「いや、いきなり出てくるな！！」

かがみ
「いいじゃない。私達出番ゼロよ、ゼロ！！　ここぐらいで出させてもらってもいいじゃない！！」

美琴
「そうよ！！　私だって出番無しよ！！」

銀八
「次回には出番を作るらしいから次回まで待ちやがれ！！」

かがみ
「うっさいわね！！　とにかく出させてもらう「スターライト・ブレイカー！！　…なの」うわぁぁぁあ！！」

なのはがゴネるかがみんと美琴を吹っ飛ばした。

なのは
「邪魔者は消えたの」

銀八
「容赦ないなお前…。さて、ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん

は廊下に立たなくてもいいからかがみと美琴を保健室に連れて行ってください」

なのは
「では、二個目の質問いくの。ペンネーム『三国同盟』さんからの質問『ここのハルヒは原作にある願望を現実世界に実現させる力は持ってるんですか？　また、持ってたら自覚があるのですか？』…なかなか突っ込んだいい質問だね…」

銀八
「こいつもハルヒに答えてもらうか。どうなんだ、ハルヒ？」

ハルヒ
「持って”いた”わ。一年前まで。元々持っていたんだけど、徐々に力が薄れていったみたい。今は完全に消えてしまったわ。私は一年と少し前気づいたんだけど…惜しい事したわね。もう少し早く気づいていたら面白かったのに！！」

銀八
「では、ペンネーム『三国同盟』さん、ハルヒが力に気づいてから何をやったか妄想しながら廊下に立ってなさい！！」

なのは
「今回は質問は以上だね」

ハルヒ
「お疲れ様、なのは」

なのは
「うん。あ、まだ言わなきゃならない事があったよ。では…コホン。このコーナーは、読者の皆様からの質問を受け付けております」

銀八
「どんな質問でもいいから、送ってきてくれよな！！　では、次回もお楽しみに！！」

次回予告

緊　急　事　態　発　生

Z組の高嶺の花（魔王だから）、高町なのは

一熱愛疑惑！！

そのお相手は！？

はやて
「これは由々しき事態や…」

美琴
「…マジ？」

神楽
「そういえば…良くしゃべってるアルな」

新キャラも登場！？

？？？

「スキマツアーにご招待するわ」

？？？

「ザ・ワールドッ！！　時よ止まれ」

真実を突き止めるべく、はやて達は行動を開始する…。

なのは

「次回！！　クロス学園Z（ゼット）組、第七話『友達が付き合っている事を羨ましいと言っている奴は実は意外と付き合っている』。見なかったら少し…頭冷やそっか…」

第六話『続き物の前作のラスボスは大体が続編にもチョイ役で出る』（後書き）

今回出た中の人ネタ解説

アナゴ

ベリィーメロン＝ビクトリーム（金色のガッシュベル！！）

かめはめ波＝セル（ドラゴンボールＺ）

ジェノサイドカッター、同じくジェノサイドヘブン＝ルガール・バーンシュタイン（ＫＯＦ）

サイコクラッシャー＝ベガ（ストリートファイターシリーズ）

神速の抜刀術＝ジョニー（ギルティギア）

術なんぞ使ってんじゃねえぇぇぇぇぇぇ！！　同じく、ワールドデストロイヤー＝バルバトス・ゲーティア（テイルズオブディスティニー２）

オールハイルブリタニア＝シャルル・ジ・ブリタニア皇帝（コードギアス反逆のルルーシュ）

桂

流砂爆流、砂爆大葬＝我愛羅（ＮＡＲＵＴＯ）

ハルヒ

念動超踵落とし（サイキック）―明石薫（絶対可憐チルドレン）

ルルーシュ

瑠璃色孔雀―綾瀬川弓親（ＢＬＥＡＣＨ）

フェイト

黒い仮面と機械の腕―ランファン（鋼の錬金術師）

銀時

極悪斬血真拳―ＯＶＥＲ（ボボボーボ・ボーボボ）

デュランダル―クロノ・ハラオウン（魔法少女リリカルなのはシリーズ）

第七話『友達が付き合っている事を羨ましいと言っている奴は実は意外と付き合

お前のいる世界はな、自分で自分の生きる術を見つけられる奴しか
生き残れねーんだ－シャマル（リボーン）

立派な事言うとるやん－八神はやて

いや、私じゃないですから！！－シャマル（リリカルなのは）

第七話『友達が付き合っている事を羨ましいと言っている奴は実は意外と付き合

「これは由々しき事態やで…」

関西弁の女が話し出す。ここはクロス学園の会議室。なぜか電気が消されており、話している女の下から光が当てられ、口から上が暗闇で見えず、誰だか分からない。

どうやら会議室にはこの女の他にも数人の男女がいるようだった。

「…何がだよ。いきなり呼び出されてよぉ、何の話だ一体…」

下から当てられた光によって白い天然パーマが見え隠れしている白衣の男がけだるそうに言う。

「今から話す所や…さて、みんな、今回の招集の理由は他でもない…これや！！」

女が叫んだ瞬間、スクリーンに映像が現れた。このために電気を消していたのである。

その映像とは…

「…マジ？」

「…えぇ！？」

「ま、マジアルか！？」

この三人は上から茶色の短髪、ツインテール、チャイナ服である。

「マジや。偶然見かけたんやけどな…」

「…でもこの前のボウリングで『相手見つけちゃってズルいよ』とか言ってなかったか？」

天然パーマ「天パ天パうるせぇ！！」…白衣が隣に座っている金髪に聞いた。

「うん…多分、それもこれを隠す為のブラフだったんだよ…」

金髪が呟く。やはり顔の下側しか見えていないが、なにやら怒ったような声だ。…友人が秘密を黙っていた事に怒っているのだろうか。

「そんな事は無いけどね…。やっぱり言って欲しかった、ぐらいだよ」

あ、そうなの。

「それで？　今からは何をするのでござるか？」

赤髪の逆刃刀を持った男が聞く。その隣には彼の妻がいた。

「私的には応援してあげたいな…。私とあなたの時もそんな感じだったし」

「私だって邪魔しようなんて思うとらんよ。むしろ応援したろうと思っとる」

初めの関西弁女が答える。

「ただな…面白い情報があるんや」

彼女は脇に座っているハンマーを持った少女に視線を送った。少女は視線を捉え、話し出す。

「これは偶然聞いた話なんだが…どうやら今週の日曜…デートに行くらしいんだ」

『な、なんだってー！？』

みんなが口を揃えて少女の言葉に注目する。

「間違いないと思うぜ。たまたま町を歩いてたら二人がいてな…偶然聞いちまったんだ」

「みんな…面白いと思わへん？」

関西弁女の声が幾分黒い感じになった。しかも薄笑いを浮かべているようだ。

「…てことは何よ…尾行するの？」

「そのとぉーりや！！」

ツインテールの言葉に関西弁が激しく机を叩いて立ち上がった。

「や、やめといた方いいんじゃねぇか？　相手はコンビ・ザ・魔王だぜ？」

白衣が慎重論を唱えるが…。

関西弁
「魔王など恐れようか！？」

チャイナ
「これは無視出来ないアル！！」

ツインテール
「み、みんなが行くから行くんだから！！　決して興味がある訳じゃないんだからね！！」

茶色短髪
「そ、そうよ！！　し、心配なだけよ！！」

ハンマー少女

「そ、そうだぜ、心配だからな！！」

金髪
「二人とも…大丈夫かなぁ…」

流浪人の妻
「心配ね…経験者として、見た方がいいと思うわ」

…恋バナと甘い物は女の大好物なのだ。白衣と赤髪流浪人は顔を見合わせて嘆息した…。

「まずは尾行のメンバー集めや」

「みんなに声をかけてみるわ」

「二人にバレないようにね」

恋バナと甘い物大好きな女達は人員集めに入ったようだ。それを横目で見ながら、白衣と流浪人が話す。

「全く…面倒な事になったでござるな」

「まぁしょうがねぇ…。『触らぬ魔王にたたりなし』だと思うんだがなぁ…」

二人がそう言いながらスクリーンに映された映像を見る。その問題の映像とは…

Z組最強の魔王、高町なのはと…

Z組のギアスを持ったツッコミ役兼学級委員長、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが…

手をつないで仲睦まじそうに歩いている写真だった…。

なのは
「クシュン！！」

ルルーシュ
「どうした？　風邪か？」

その頃、件のお二人は学園よりかなり離れた喫茶店にいた。わざわざ離れた喫茶店まで来るということは、やはりバレたくないのだろうか。

なのは
「うーん。大丈夫だと思うんだけどな…あ、ルル君、はい、あ～ん」

ルルーシュ
「ん…ありがとな」

…なのはとルルーシュの周りだけ、ピンク色に見えるのは気のせいではないだろう。二人はお互いにあ～んでケーキを食べさせてもらっている。

ちなみに、今は二人以外に客は数人しかおらず、ルルーシュ達の周りにはいない。

ルルーシュ
「ん、うまいな…なのは、はい、あ～ん」

なのは
「あ～ん…おいしい！！」

…ダメだ、もうこれ以上書いたら甘すぎて作者が死ぬ…。

ルルーシュ
「ん、なのは、頬にクリームついてるぞ」

ルルーシュが身を乗り出してなのはの頬についたクリームを…舌で舐めとった。

なのは
「はにゃ！！　あ、ありがと…」

ルルーシュ
「い、いや、いきなりすまなかった…」

二人は顔を真っ赤にする。

なのは
「で、でもね…せっかくなら、唇に欲しかったかな…」

ルルーシュ
「そ、それは…あ、後でな…」

二人は顔を真っ赤にしたままとんでもない事を言う。も、もうやめて～！！　作者のライフはもうとっくに0よ～！！

なのは
「それで、今度の日曜、どこ行こっか？」

ルルーシュ
「そうだな…そういえば、新しい遊園地が出来たんだっけ？」

どうやら、二人は今度のデートの打ち合わせをしているようだ。…それからどうやってあんなに甘くなるのか、不思議なものだ。

なのは
「クロス・ワールドだっけ。楽しそうだったよね！！　あそこ行こっか！！」

ルルーシュ
「そうだな。確かに楽しそうだった。あそこに行くか！！」

二人は日曜の予定を決めると、立ち上がってレジへと向かった。

…その時、ルルーシュとなのはがいた席からは死角になって見えない所から、三人の男女が顔を出した。

スカリエッティ
「たまには遠出をしてみるものだね。実に面白い話を聞けた」

一人はクロス学園化学担当教師、ジェイル・スカリエッティ。

ディオ
「確かにな。太陽が平気になるとやはりいい。昼間からこんな話が聞ける」

そしてクロス学園英語担当教師、ディオ・ブランドー。

「どうするの、二人とも？」

もう一人は、二人の前に座っている少女臭ただよう女だった。彼女は二人に聞く。

スカリエッティａｎｄディオ
「「当然、尾行だ」」

「やっぱり？」

女がクスクス笑う。

「まぁいいわ。面白そうだし…私も行くわ」

女は手に持つ傘をくるりと回す。そう…この女は…

スカリエッティ
「すまないね、校長先生」

紫
「お安いごよう。さ、学園に帰りましょう」

クロス学園日本史担当教師兼校長先生、『神隠しの主犯』八雲　紫である！！

銀八
「教えて」

生徒全員

「銀八先生！！」

銀八
「はい、二回目となりましたこのコーナー『教えて！！　銀八先生』、今回のアシスタントは、次回からのキーマンとなりえるか、クロス学園日本史担当教師兼校長、八雲　紫先生だ！！」

紫
「クロス学園校長の八雲　紫よ。こういう学園モノの校長は銀八に振り回される役割だけど、私はそうはいかないわ」

銀八
「はじめっから全否定！？」

紫
「私があなたごときにやられると思って？」

スキマを開く紫。

銀八
「いえ、すいませんすいません…」

紫

「なら最初の質問行こうかしら。ペンネーム『三国同盟』さんからの質問よ。『当麻に質問です。原作設定がほぼ無いなら、自分の記憶は失ってないんですか？　また、ステイルやインデックスなどの魔術世界についてはどのくらい知ってるんですか？』だそうよ」

銀八
「どうなんだ、当麻？」

当麻
「ああ。記憶は失っているが、クロス学園であった事は大体分かっている。魔術についてはカジリぐらいは知ってる。ちなみにインデックスとは同居生活だ。ステイルは近くに住んでるぜ。記憶喪失の事は…ビリビリとハルヒとルルーシュと銀八ぐらいしか知らない」

紫
「インデックスは私にもよく懐いてくれてるわ」

銀八
「いつかインデックスもステイルも出すらしいぜ。さて、ペンネーム『三国同盟』さんは、インデックスとステイルについて『とある魔術の禁書目録』を読んで復習しておきなさい！！」

紫
「さて、次の質問…あら？　何か同封してあるわ…。ペンネーム『

ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問『今こちらではボーボボとクロスしてますが、其処でなのは、フェイト、はやての三人が撃沈したサービスマンのサービスシーンの載った写真を送ります。どんな反応を示すか教えて下さい（特に白い魔王）』…こ、怖いもの知らずね…」

銀八
「…」

紫
「あら？」

銀八
「ぐ、ぐぁぁぁぁあ！！」

銀八、倒れる。その手には例の写真がある。

紫
「…？　…まぁいいわ、では、今回はそちらと同じく、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんに来てもらったわ」

三人が歩いてくる。

なのは
「校長先生、なんなの？」

フェイト
「…校長先生の呼び出しって悪い予感しかしないよ…」

はやて
「それは私もや…」

紫
「まぁいいわ。ところで、この写真を見てちょうだい。こいつをどう思う？」

紫はなのは達に写真を見せる。

なのはａｎｄフェイトａｎｄはやて
「「「…（ガン見）」」」

なのはａｎｄフェイトａｎｄはやて
「「「…にゃ」」」

なのはａｎｄフェイトａｎｄはやて
「「「にゃあぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」」」

三人は目を押さえて倒れ込んだ。

紫
「…はい、こんな結果よ」

紫が呆れたように片手を上げる。すると…

なのは
「校長先生!!」

紫
「何よ?」

なのはが立ち上がる。フェイトとはやてもふらり、ふらりと立ち上がった。

なのは
「あれを送ってきたのはだれ!?」

紫
「『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんよ。彼の作品、リリカルなのはとボー

ボボのクロス、『リリカルボーボボ　爆闘！！　ハジケ大戦』。すごく面白いから読んでちょうだいね」

さらっと宣伝する紫さん。

なのは
「そうですか…行くよ、フェイトちゃん、はやてちゃん！！」

フェイト
「うん！！」

はやて
「合点や！！」

三人がバリアジャケットになる。

なのは
「全力全開！！　スターライトォ…」

フェイト
「雷光一閃！！　プラズマザンバー…」

はやて

「響け終焉の笛！！　ラグナロク…」

どうやらトリプルブレイカーを放つようだ。

紫

「まぁこんな質問してきたらしょうがない…あら？」

質問の紙を拾った紫がある事に気づいた。

紫

「追伸があるわ…。何々？　『追伸…砲撃してきたらそちらにサービスマンを投下しますぜぃ（ニヤニヤ）』って…」

なのはａｎｄフェイトａｎｄはやて

「「「ブレイカァァァァー！！」」」

砲撃が空に消えた。

紫

「や、やっちゃった…」

紫が呟く。すると、いきなり声が聞こえてきた。

sibugaki
『はぁーっはっはっは！！　砲撃が来たぞ…罰ゲームだぁぁぁあ！！　サービスマン、投下ぁぁぁあ！！』

その叫びと共に…空がピカリと光った。そして…

サービスマン
「サァァァァービィィィス！！」

サービスマンが降ってくる！！

サービスマン
「食らえ三人娘！！　疾風のサービス分身！！」

サービスマンが三人に増え…

サービスマン×３
「「「疾風のサービス旋風！！」」」

なのはａｎｄフェイトａｎｄはやて
「「「にゃあぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」」」

今度こそ…三人は完全に失神した。

サービスマン
「ふん、こんなものか…」

サービスマンが一人に戻る。その瞬間…

紫
「主の所に帰りなさい！！」

紫がサービスマンをスキマに叩き込む！！

サービスマン
「ぐぁぁぁぁあ…」

サービスマンはスキマに消えた。

紫
「一件落着、と…」

紫が呟く。その瞬間…

銀八
「ん…俺は何を…」

紫
「あら、気がついた?」

銀八が復活する。

紫
「ちょうどいいわ。私行くところあるから、終わらせててちょうだい」

銀八
「どこ行くんだ?」

紫は妖しく微笑む。

紫
「ちょっと『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんに八雲流Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしてくるわ。じゃあね～」

紫はスキマに消える。

銀八
「…では、『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんは校長が行きますので命がけで逃げて下さい。生存を祈ってます…。今回はここまでだ！！　次回もお楽しみに！！」

次回予告

なのはとルルーシュのデート場所は…遊園地！！

銀八
「クロス・ワールド…最新の遊園地だそうだ」

はやて
「うわ！！　めっちゃ楽しそうやん！！」

かがみ
「あれ乗りたいわね…」

楽しみながらなのは達を尾行する一行を追跡する陰…。

スカリエッティ
「ルルーシュ君となのはちゃんの絆…試させてもらおう！！」

ディオ
「さて、どうでるか…？」

クロス学園校長、八雲　紫の目的は！？

紫
「愛があるなら…これくらい、乗り越えてみせなさい！！」

フェイト
「次回！！　クロス学園（ゼット）Z組、第八話『恋には試練と戦いがつきものである！？』。次回も見てくれないと、雷落ちるよ！！」

第七話『友達が付き合っている事を羨ましいと言っている奴は実は意外と付き合

ルルーシュとなのは…やっちまったぁぁぁあ！！

すみません、すみません、すみませんー！！

第八話『恋には試練と戦いがつきものである!?』（前書き）

永遠なんて無いよ。みんな変わっていく。変わっていかなきゃいけないんだ―高町なのは（魔法少女リリカルなのはA's）

今回からはこの作品に出てくるキャラクターの名言を発表していくぜ!!―坂田銀時

知ってて「ニヤリ」とするもよし!!―フェイト・T・ハラオウン

為になると思うもよし!!―ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア

色々楽しんでね!!―泉こなた

第八話『恋には試練と戦いがつきものである！？』

日曜日　ＡＭ９：００　遊園地クロス・ワールド噴水前

…ここはクロス・ワールドの噴水前。そこに、甘甘魔法少女、高町なのはさんがいた。

なのは
「早く来すぎちゃったかな…ルル君遅いな～」

当然ながらルルーシュ待ちらしい。しかし、実は待ち合わせは１０時なのだ。一時間前行動である。恋する少女は行動が速いのだ。

…しかし、その期待に答えるのがルルーシュという男だ。なのはがため息をついた瞬間、ルルーシュは噴水の向こうから歩いてきた。

ルルーシュ
「待たせたか？　なのは」

なのは
「ううん。待ってないよ」

なのはがルルーシュの腕に抱きつき、ルルーシュと瞳を合わせる。

なのは
「じゃ、行こ？」

ルルーシュ
「ああ！！」

二人は歩き出す。…仲睦まじそうなそれを見つめるいくつかの集団がいた。

銀時
「動き出したぜ…」

美琴
「みたいね…まずは…ジェットコースターみたいね」

フェイト
「追うよ、はやて、神楽、リクオ」

はやて
『了解や』

神楽
『ラジャーアル』

リクオ
『何で僕が…』

フェイトの手にはトランシーバーが握られている。どうやら四つの班に分かれ尾行しているようだ。

フェイト
「最終確認をするわ。第一班、私、銀時、美琴ちゃん。みんないるわ。第二班？」

はやて
『私、シグナム、ヴィータ、麗。みんなおるわ。第三班？』

神楽
『私、かがみん、薫、剣心。みんないるネ。第四班？』

リクオ
『僕、氷麗、ツナ、こなたさん。みなさんいます』

フェイト

「よし。ならば出発よ。くれぐれも気をつけて」

はやて、神楽、リクオ
『『『ラジャー』』』

四つの班、しめて１５人はなのはとルルーシュを追って動き出した…。

フェイト
「あ、ここからはＢＧＭ『踊る大捜査線』だよ！！　そういう訳でよろしく！！」

なのはとルルーシュはジェットコースターへと歩いていき、順番待ちに並んでいた。

フェイト
「この遊園地の目玉、ジェットコースターだね」

その名も、『ジェットコースター・オブ・東方』である。

銀時

「実にそのまんまなネーミング！？」

まぁいいじゃん。

二人はジェットコースターに入っていく。

フェイト
「どうする？」

はやて
『誰か二人でジェットコースターに行きい。私らは待機するわ』

リクオ
『誰が行きますか？』

そこまで言った時、銀時が立ち上がった。

銀時
「行くぞ、フェイト」

フェイト
「えっ？　あ、うん」

銀時とフェイトが立ち上がり、ジェットコースターへと歩いていく。二人は、いつもの服装ではなく、真っ黒なＳＰみたいな衣装にグラサンであった。

はやて、神楽、リクオ

『『『あんたらどこのＧメンだぁぁぁあ（やぁぁぁあ）！？』』』

いやにフェイトが似合っているのは気のせいではないだろう。

銀時とフェイトは中に入った。ルルーシュとなのはは最前列に乗っている。二人は、二つ席を開けてその後ろに座った。

さて、このジェットコースター。ジェットコースターと銘打ってはあるが、どちらかというとシューティングに近い。スピードはそれほどではなく、進んでいると３Ｄで敵が現れ、それを備え付けのレーザーガンで撃つ。隣の人と二人でチームを組むのだ。

銀時

「さて、誰が出るか…？」

フェイト

「校長先生とかでるかもね…」

銀時
「それは怖いな…」

二人が話していると…出た。何がって？　分かるだろ。あれだよ、加齢しゅ…じゃなくて、少女臭ただようスキマ妖怪。

銀時＆フェイト
「「マジに出たぁぁぁぁあ!?」」

そう、出てきたのは校長、八雲　紫であった。

銀時
「いや待てぇぇぇぇ!!　最初っからボスレベルかよぉぉぉお!?」

紫（３Ｄ）
「廃線『ぶらり廃駅下車の旅』!!」

巨大なスキマから電車が飛び出し、二人に迫り…

銀時＆フェイト

「「ぐわぁぁぁぁあ！！」」

一撃必殺！！

フェイト
「ポケモン！？」

なんという威力。なんと、一撃で二人の体力を0にしてしまった。

銀時
「…てか、作者このスペカ好きなのか？」

フェイト
「『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんへの感想返信でもやってたね…」

電車でひき殺すトンデモスペカ。作者は大好きです。

そんなことを言っている間に、ジェットコースターは終わり、なのはとルルーシュは外に出た。銀時とフェイトも慌てて追う。

はやて
『こちらはやてとヴィータ。ターゲットは喫茶店へ向かったで』

フェイト
「了解！！」

薫
『こちら薫と剣心。…かなり仲睦まじい様子よ』

リクオ
『こちらリクオと氷麗。喫茶店につきました。見張ります』

シグナム
『こちらシグナムと麗だ。…もはや新婚夫婦の域ではないかと思う』

ツナ
『こちらツナと神楽。…うわっ、あ～んでお互いに食べさせてもらってる！！』

美琴
『こちら美琴、かがみ、こなた。もうついたわ。私達も見張る』

銀時
「さらに分かれたのか？」

はやて
『こちらはやて。今は二人一組や』

フェイト
”ええっ！？　てことは…”

フェイトは銀時をちらりと見る。

フェイト
”銀さんと二人きり！！　やったぁぁぁあ！！”

フェイトは心の中で驚喜する。なのはと同じく、彼女も恋する魔法少女なのだ。

銀時
「…了解。行くぞフェイ…」

銀時がそこまでいいかけた時、いきなりフェイトが銀時の腕にしがみついた。

銀時
「おおおおい！？　何やってんだお前！？」

フェイト
「いいのいいの。こうしたら恋人みたいに見られてバレないって」

適当な理由をつけて、フェイトは銀時に引っ付く。銀時は少し顔を赤くしたが、まんざらでもなさそうに歩きだした。

その時の二人が遊園地中の人々に恋人として見られていたのは余談である。

クロス・ワールドのどこか

紫
「用意は出来たかしら？」

紫は手にするトランシーバーに話す。

スカリエッティ
『いつでも良いよ』

ディオ
『こっちもだ』

？？？
『私もよ！！』

？？？
『僕もだよ』

四人の返事が返ってくる。

紫
「重畳！！　では、作戦開始といきましょうか」

スカリエッティ
『ルルーシュ君となのはちゃんの絆…試させてもらおう！！』

ディオ
『さて…どうでるか？』

？？？
『このために尾行の誘いを断ったんだから！！』

？？？

『まぁ、僕は始めから興味は無かったけどね』

四人は四者四様の受け答えをして通信を切る。紫はトランシーバーをスキマに投げこむと、呟いた。

紫

「さて、ルルーシュ君、なのはちゃん。愛があるなら…これぐらい、乗り越えて見せなさい！！」

紫は妖艶な笑みを浮かべた。

銀八

「教えて」

生徒全員

「銀八先生！！」

銀八

「はい、毎度おなじみこのコーナー、皆様のご愛顧を受けて三回目だ！！　今回のアシスタントはZ組の頭脳明晰学級委員長にしてなのはの夫、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア！！」

ルルーシュ
「学級委員長、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだ。次回はかなり活躍するらしい。期待しておいてくれ！！」

銀八
「しかしなのはといい仲だな…」

ルルーシュ
「まぁ、な…では最初の質問いくぞ！！　ペンネーム『三国同盟』さんからだ。いつもいつもありがとうな。『剣心達は学生結婚したと言ってましたが、結婚式などはしたのですか？　また、二人が婚約した時はやはり黒狸さんが一番騒いでうっとうしい感じでしたか？』だ。あぁ、結婚式か」

剣心
「一応結婚式はしたでござるよ。Z組の面々と知り合い達だけの小さい式だったでござる」

薫
「はやてちゃんは結婚するって噂もいち早く聞きつけて言いふらしたのよね…。それに結婚式でも酒を飲んじゃって…。かなり酔って

たわ」

銀八

「一応まだ高校生なんだがな…。さて、『三国同盟』さんはまだ未成年なら酒を飲まないように、大人なら飲みすぎないようにしてください！！」

ルルーシュ

「健康にも悪いからな。さて次の質問、ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問だ。いつもいつも質問本当に感謝してるぞ。『こっちでついにエリオがハジケリストに目覚めました。それを見てそちらのフェイトさんの意見を教えてください』…たしかエリオのハジケリスト状態って…」

フェイト

「ら、らめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！　戻して、とにかく戻してぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！　それと私の扱いがヒドいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！　目が、目がぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

銀八

「最後らへんはムスカになっちまったな…では、『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんはなんとかフェイトの出番を増やすのと、エリオをなんとかまともにしてみてください…。あ、うちの作者は別にあれで良いと言っています。それと、今度また質問しに行く予定があるようで

す」

フェイト
「その小説、消すっ！！」

フェイトはソニックフォームになって飛び去った。

銀八
「…どうやら時間は無いようだ。だが…ｓｉｂｕｇａｋｉさんの所にはあのサービスが…どんどんいけルルーシュ！！」

ルルーシュ
「あ、ああ。では次、ペンネーム『銃王　海』さんからだ。『こっちには小三のなのはがいるんですが、写真を送っても良いと言うことで、リリカル組以外に見せたらどうなるかを知りたいのです。あとは…贈り物をして良いかですね。』だそうだぞ？」

銀八
「全員は流石に無理だから、四人に絞ったぞ。こいつらだ」

銀八が指したのは、こなた、桂、雲雀だった。

ルルーシュ

「ん？　三人じゃないか」

銀八
「あと一人はお前だ」

銀八がルルーシュを指す。

ルルーシュ
「そ、そうか…」

銀八
「さて、この写真、どう思う？」

銀八がなのはの写真を見せる。

こなた
「お！！　なのはちゃんじゃん。ん～。やっぱりかわいいね～。この状態でもすぐさまギャルゲの攻略対象だよ！！」

桂
「うむ。確かに愛らしいな。今の魔王になるとは思えな「スターライト・ブレイカァァァアー！！」ぎゃぁぁぁぁあ！！」

なのは
「今、何か聞こえたかな～。あれ？　これ、何かな？」

吹っ飛んだ桂を足蹴にするなのは。

雲雀
「ふん。興味無いね」

ＡＬＬ
”だろうなぁ…”

銀八
「さて、ルルーシュ、お前はどうだ？」

銀八がルルーシュに聞いた途端になのはが顔を真っ赤にする。ルルーシュはそれをちらりと見ると、話しだした。

ルルーシュ
「確かにかわいい。だけどな…」

そう言ってなのはを抱きよせる。

ルルーシュ
「今のなのはよりかわいい奴なんていないよ…」

なのは
「ルル君…」

なのはがルルーシュを見つめる。ルルーシュも見つめ返す。

銀八
「…さて、贈り物だが…良いぞ!!　そのキャラクターに合った贈り物をお願いするぜ!!　では、『銃王　海』さんはとりあえずなのはとルルーシュに贈る贈り物を考えながら廊下に立ってなさい!!　さて、最後の質問は…あれ？　ルルーシュどこ行った？　…まぁいいか。ペンネーム『ラムネ』さんからの質問だ。『Q1…クロス学園の購買部ってどんな感じですか？』か。これは…お前ら、頼む」

はやて
「合点や!!　購買部はかなり豊富な種類があるんや。代表的な物としては、『古河パン』のパンや、『トリコ』に出てくる料理、また、なんと翠屋も出張販売するんや!!。とりあえず何でも揃った良い購買部や」

銀八

「だそうだぜ。さて、ラムネからもう一つ質問が…『Q2…紫さん!!　質問です!!　ＢＢＡってなんの略ですか!?』お前死ぬ気かラムネぇぇぇぇ!?」

紫
「あらあら…そんなこと聞いて…覚悟は、出来てるのかしら?」

ハルヒ
「校長先生、手伝うわ」

こなた
「…その質問は女の敵だよ」

麗
「『奴ら』のように遠慮無しにぶっ殺させてもらうわ!!」

唯
「私も行くよ…」

はやて
「たしかラムネさんのとこには『ネス』君とか『ポーラ』ちゃんとかおったよね…。まぁ関係ないわ。…潰す」

紫
「では、行きましょう。９９％までなら殺してもいいわ！！」

皆
「合点！！」

皆がスキマに消えた。

銀八
「…では、『ラムネ』さんは、あれだけの奴らから逃げれる訳無いんで出来るだけ多くの手勢を集めて対抗してください…。でも無理です。多分『おおみそか』を食らわしても死にません…。何とか生き残って下さい。また、『ＢＢＡ』の意味を知りたい人は感想お願いします。今回は長かったな…なら、締めはお前ら頼む」

ルキア
「うむ。このコーナーでは、読者の皆様からの質問を受けつけておる！！　また、今回から『贈り物』もありだ！！」

山本
「どんどん送ってきてくれよな！！　ではまた次回！！」

次回予告

楽しそうにデートをするなのはとルルーシュに…危機迫る!!

???

『ククク…このゲームを無事に終わらせる事は出来るかな?』

トランプ爆弾魔登場!!

なのは
「ルル君…助けて!!」

なのは、最大のピンチ!?

銀八
「くそっ、どこにいやがる!!」

はやて
「いっそ広域魔法で…」

ツナ

「あのゲームを終わらせる方法は無いのか！？」

そして―

ルルーシュ
「頼む…これが最後の一枚だ！！」

決着は！？

こなた
「次回、クロス学園（ゼット）Z組、第九話『黒幕の目的は大体最後らへんになって分かる』。次回も卍解して見てね！！」

第八話『恋には試練と戦いがつきものである！？』（後書き）

次回の元ネタを知っている人もいるのでは？

それと、今日からテスト週間なので更新が停滞します…すいません。

第九話『黒幕の目的は大体最後らへんになって分かる』（前書き）

私たちの全てはまだ始まってもいない。だから、本当の自分を始める為に…今までの自分を、終わらせよう―フェイト・テスタロッサ
（魔法少女リリカルなのは）

今回、巻末に緊急告知があるよ！！―フェイト・T・ハラオウン

見逃さずによく読んでくれ！！―銀時

そういう事を言うとこやない…いや、そういうとこやな―八神はやて

第九話『黒幕の目的は大体最後らへんになって分かる』

ルルーシュ
”おかしい…”

ルルーシュは思っていた。先程からこの遊園地には似合わない服装をした一いわゆるスーツ姿の男達をよく見かけている。何かあったのか？

ルルーシュは不審に思ったが、まぁ心配は無いだろうと思い、自分の腕にひっついているなのはの方に目を向けた。

ルルーシュ
「次は何に乗ろうか？」

なのは
「ん～。あ、あれなんかどうかな？」

なのはが指したのは観覧車であった。…恋人達にはよくあるパターンか。

ルルーシュ
「よし、行くか」

なのは
「うん！！」

二人は連れ立って歩きだす。…その後ろを、相変わらず尾行している人影があった。

銀時
「こちら銀時、フェイト。なぁ、もう尾行しなくてもよくないか？」

フェイト
「全く心配無いよね…」

はやて
『こちらはやて、ヴィータ。確かになぁ…。心配いらんかもな。それにいい写真も撮れたし…』

シグナム
『こちらシグナム、麗。何やってるのですか、主はやて！？』

はやて

『えぇやん。それに、これは売れそうやで～』

リクオ
『ルルーシュにはファンが多いからな…それ見せたらショック受ける人が多いんじゃねぇか？』

はやて
『まぁえぇやん』

シグナム
『…全然よくなガハッ！？』

いきなりシグナムの声が途切れる。

フェイト
「あれ？　シグナム？」

麗
『…はやて～？』

シグナムが持っていたはずのトランシーバーから何だか背景に『ドドドドド』とか出てそうな麗の声が聞こえてきた。

フェイト
”なのはと麗って仲いいよね…怒った？”

はやて
『な、なんや、麗？』

びびった声で麗に応対するはやて。麗が言った言葉は…。

麗
『その写真一枚いくら？』

銀時ａｎｄフェイト
「「買うんかいィィィィィィィ！！」」

銀時とフェイトが盛大に突っ込んだ。

麗
『だってかわいいじゃない』

フェイト
「麗ってそんなキャラだっけぇぇぇ！？」

大丈夫だ。タグに『キャラ崩壊』がある。

フェイト
「いや、そういう問題じゃあないよ!?」

今回はフェイトはツッコミのようだ。前回ボケすぎたからか。

はやて
『えーとな、一枚千『ふざけてる?』…ご、五百や…』

麗、恐ろしや。

麗
『じゃあ一枚予約ね。お金は後で』

はやて
『毎度~』

ツナ
『商談成立しちゃいましたよ…』

ツナがため息をつく。

ヴィータ
『ん、おい、なのはとルルーシュが観覧車に向かったぜ』

ヴィータの声で銀時とフェイトは観覧車に注目する。

銀時
「よくある恋人展開か？」

フェイト
「…かもね」

この観覧車はあんまり大きい物ではなく、ゴンドラは１３個しかない。しかしゴンドラ一個一個にアニメのキャラクターが書かれており、かなりレアな観覧車である。ちなみに、書かれているキャラクターは…。

番号１…高町なのは

番号２…フェイト・Ｔ・ハラオウン

番号３…泉こなたａｎｄ柊かがみ

番号４…涼宮ハルヒ

番号５…平沢唯

番号６…御坂美琴

番号７…及川氷麗

番号８…八神はやて

番号９…朽木ルキア

番号１０…長門有希

番号１１…緋村薫

番号１２…宮本麗

番号１３…神楽

である。もう分かっただろうか。

そう、これはＺ組の女子メンバーの観覧車、『Ｃ．Ｈ．Ｚ．Ｇ』である。略さずに言うと、『ＣｒｏｓｓＨｉｇｈｓｃｈｏｏｌ　Ｚｃｒａｓｓ　Ｇｉｒｌｓ』である。

フェイト

「なのは達はどれに乗ったかな？」

フェイトはトランシーバーでみんなに聞くが…

はやて
『いや、それは分からんなぁ…』

かがみ
『ごめん、見てなかったわ…』

氷麗
『こっちもです』

神楽
『こっちもアル』

どうやらみんな見ていなかったようである。

こなた
『しょうがないなぁ…有希ちゃ～ん？』

こなたがトランシーバーに言うと、ここにはいないはずの少女の声

がした。

長門
『…何…？』

フェイト
「あれ？　有希ちゃん？」

フェイトがトランシーバーに聞く。長門は確かいなかったはず…。

長門
『先程家にいる”座敷わらし”の仕事が終わったから来た…』

あ〇ゃくらさんですね。わかります。

氷麗
『座敷わらし？　妖怪がいるんですか！？』

リクオ
『…氷麗、多分家のモンじゃないぜ…』

リクオ、氷麗、お前らが考えている妖怪じゃない。

はやて
『リクオ、氷麗ちゃん、何の話をしとるんや？』

リクオａｎｄ氷麗
『『何でも無い（です）』』

銀時
「それで？　長門、なのは達の場所分かるのか？」

長門
『任せて…』

長門の声の背景にキーボードを叩く音が混じる。

長門
『衛生回線も既にハッキング済み』

銀時ａｎｄフェイト
「「なんかすごい事やっちゃってるゥゥゥゥゥゥゥゥ！？」」

銀時とフェイトが汗を浮かべてシャウトする。流石長門、衛生回線

もハッキング済みである。

長門
『…番号3、泉こなたａｎｄ柊かがみのゴンドラに乗っている』

銀時
「そうか…」

フェイト
「まぁ今さら乗っても仕方ないし…二人の様子を見ようよ」

はやて
『そやな』

剣心
『待て、みな』

観察という方針に落ち着いたみなを剣心がいきなり遮った。いやに厳しい声になっている。

かがみ
『どうしたのよ?』

かがみが聞く。

剣心
『妙だ。さっきから警官が数十人もうろついている』

銀時
「んだと?」

銀時は周りをみてみた。…確かに警官がかなりいる。なぜ今まで気づかなかったのか。

美琴
『何かあったのかしら?』

神楽
『…嫌な感じしか、しないアル…』

神楽の呟きがトランシーバーを通して皆の耳に溶けた。

なのは
「うわぁ…いいながめ…」

なのはが外を見て感激している。夕焼け空に、数個の雲が浮いていて、かなりいい雰囲気だった。

なのは
「すごいね…ルル君？」

なのははは正面に座るルルーシュを見る。ルルーシュは夕日に顔を向け、眺めていた。彼の瞳に夕日が映える。ギアスを持つ瞳。しかし、今は純粋な夕日しか映ってはいなかった。

なのははふと悪戯心が湧き、ルルーシュの隣に座った。体をルルーシュに寄りかからせ、耳に唇をよせる。ルルーシュも夕日から瞳を離し、なのはを見た。なのはは、その瞳にまだ夕日が残像として残っている気がした。

なのは
「ルル君…大好き」

ルルーシュ
「…俺もだ」

二人は見つめ合う。…その瞬間だった。

いきなりルルーシュの下にスキマが開いた。

ルルーシュ
「なっ！？」

なのは
「えっ！？」

ルルーシュがスキマに吸い込まれる。

なのは
「る、ルル君！！」

なのははルルーシュを追ってスキマに飛び込もうとしたが…無情にも、なのはが飛び込む前にスキマは閉じた。

ゴンドラの中に少女一人。先程まで暖かく差していた夕日が、いきなり寂しさを混じらせた赤黒い光となった気がする。

なのは
「どういう…こと…？」

なのはは一人呟くしかなかった…。

―――――――――――――

ルルーシュ
「あでっ！？」

その頃ルルーシュは、スキマを通り抜け、観覧車の外に出されていた。いきなり空間にスキマが空き、放り出されたのである。

ルルーシュ
「どういう事だよ…なんだあの空間…」

ルルーシュは立ち上がる。その時、ルルーシュの目に多数の警官達が飛び込んできた。

ルルーシュ
「警官！？　確かにおかしいと思ってはいたが…何かあったのか！？」

銀時
「おい、ルルーシュ！！」

フェイト
「ルルーシュ君！！」

警官達を見るルルーシュに、銀時とフェイトが走ってきた。

ルルーシュ
「先生にフェイト！？　何でここに！？」

銀時
「どうだっていいだろ！！　なのははどこだ！？」

ルルーシュ
「なのはは観覧車だが？」

フェイト
「や、やっぱり！！　ぎ、銀さん、どうしよう！？」

フェイトが青ざめる。

銀時
「おおおおおおおちつけふふふフェイト、るるるるルルーシュ」

ルルーシュ
「お前が落ち着け！！　何かあったのか！？」

明らかに慌てている銀時とフェイトにルルーシュが突っ込む。二人は少しは落ち着いたようだ。

銀時
「いいか、ルルーシュ、よく聞け…あの観覧車には…」

銀時＆フェイト
「「爆弾が仕掛けられているッ！！」」

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生!!」

銀八
「はい、はじまりました『教えて!!　銀八先生』。前置きめんどいからとっとと行くぞ。今回のアシスタントはZ組の『瞬神雷公』こと、フェイト・T・ハラオウン!!」

フェイト
「フェイト・T・ハラオウンです。今回の巻末には私に関する重大発表があるから、ぜひぜひ、ていうか絶対見てね!!」

銀八
「まだ詳しい話は聞いていないんだけどよぉ。どういう事なんだ?」

フェイト
「まぁそれは巻末で。では早速質問行きます!!　ペンネーム『文照一』さんからです。『剣心は銀時の強さを知ってるでしょうか?　剣で戦う同士だから知ってるかな??　と思いました。』…剣心?」

剣心
「結論から言うと、知っている。…いや、実は銀時やヅラ、そして…高杉とは『知っている』以上の間柄…」

銀時
「それ以上は言うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ!!　というわけで、『文照一』さんは剣心の言葉の意味を推測しながら廊下に立ってろぉぉぉぉぉぉ!!」

フェイト
「そこまで言っちゃったらなぁ…。では、次の質問。ペンネーム『三国同盟』さんから。『ディオに質問。太陽を克服したと言っていましたが、どうやって克服したんですか？　まさか気合いか（笑）　また、息子のジョルノはこの世界にいるんですか？』…ディオ先生どうぞ」

ディオ
「スカリエッティに体を改造してもらっただけだ」

フェイト
「あんたすごいよ!?　怖くなかったの!?」

銀時
「お前、体を他に改造されたりするの怖くなかったの？　ドライバ

ーとか」

フェイト
「モンハン編ネタ！？」

ディオ
「もしもそんな事をしたら気化冷凍法からの空裂眼刺驚（スペース・リパー・スティンギー・アイズ）をお見舞いすると言っておいたからな」

銀時
「怖すぎるウウウウウウウウウウ！？　で、ジョルノか…ジョルノは…いるんじゃねぇの？　出るかどうかは作者の気まぐれだな」

フェイト
「そんな答えでいいの！？」

銀時
「考えてなかったらしい…。では、『三国同盟』さんは空裂眼刺驚（スペース・リパー・スティンギー・アイズ）をかわすために波紋をマスターしろ！！」

フェイト
「で、では、気を取り直して次の質問。ペンネーム『銃王　海』さんからだよ。贈り物もある。『ＢＢＡって、何ですか？』」

銀時
「…校長、いないよな？」

ディオ
「心配するな。言っておいた」

銀時
「そ、そうか…なら、言おう。ＢＢＡとは…『ババア』の略だ！！」

フェイト
「そりゃあ怒るよね…。そしてそこの柊さんからルルーシュ君に、無限弾ハンドガンが贈られてきたよ」

ルルーシュ
「ありがとう！！　俺にも戦う方法が出来た！！」

銀時
「では、『銃王　海』さんは校長は行かないから結界を解いて廊下に立ってろ！！」

フェイト
「結界張ってたんだ…。では、次はペンネーム『ロムスカ王』さんの小説『仮面ライダークロス』のブロリーさんから質問、そしてピ

ッコロさんからルルーシュ君に贈り物だよ。ブロリー『そっちの世界にニートはいるのかな？　かな？　いたら教えろ。血祭りにあげに行ってやる！！』だって。そしてピッコロさんは『仙豆だ。食え』…ルルーシュ君にこれ！！」

ルルーシュ
「おお！！　仙豆１５個入りの小袋だ。ありがたくいただいておく！！　…どっか本編で使うかもな…」

ルルーシュは仙豆を手に入れた！！

フェイト
「ドラクエ！？」

銀時
「そしてニートだが…いない方がおかしいよな。ニートはもはや社会現象では…？　では、『ロムスカ王』さんはなんとかブロリーを止めてください。ニートも将来が無いことは無い！！　…２％ぐらい」

フェイト
「確率低っ！！　で、では最後の質問。ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからだよ。『今回そちらに『リリカルボーボボ』の主人公である我等がボーボボが『なのは』と『フェイト』のコスプレ（バリアジャケット）をした写真を送ります。どんな反応をするか教

え…』ｓｉｂｕｇａｋｉィィィィィィ！？」

なのは
「ボーボボォォォォォォォォ！？」

フェイト
「潰すっ！！」

フェイトはバルディッシュを構える。

なのは
「待って、フェイトちゃん！！　追伸がある！！」

銀八
「何だ…？　『追伸…もしまた砲撃してきたら…その時はそちらに例のガジェット？型を一万体位サービスで贈ります。存分に楽しんでください』…？　ガジェット？型ってなんだ？」

フェイト
「ガジェット？型…私達の天敵、サービスマンの姿をしたガジェットだよ…思い出しただけでも身震いが…」

フェイトは一度、ガジェット？型と戦ったのだ。

なのは
「…でも、相手の思惑は分かったから、手は打てるよ…。ここは、こっちからｓｉｂｕｇａｋｉさんの所にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしに行こう！！　そして遠距離から砲撃なの！！」

フェイト
「それがいいね…行くよ！！」

なのはとフェイトは飛びさった。

銀八
「…では、『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんはどうにかしてあいつらの攻撃を防いでください。今回はここまでだ！！　次回もお楽しみに！！　巻末のお知らせも見ろよ！！」

次回予告

ルルーシュ
「俺がそのゲーム、受けるぜ！！」

ルルーシュ、恋人を救うため孤独な戦いへ！！

はやて
「ここら一体吹き飛ばしてあぶり出したる！！」

フェイト
「いや、やめて！！」

爆弾魔はどこ！？

かがみ
「あのゲームでルルーシュ君が勝つ方法って何だっけ？」

そして…その時が、訪れる。

ルルーシュ
「あと…二十秒っ…」

デート編、完結！！

桂
「次回、クロス学園Z（ゼット）組第十話『男なら誰かの為に強くなれ！！』

刮目せよ！！」

緊急告知

クロス学園初の長編シリアス

執筆予定！！

『～Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　Ｆ．Ｔ～』

ｒｉｎｇ

「…はい。という訳で、長編シリアスを書いてみようかなと思います。これは、ある漫画のあるエピソードを、クロス学園のメンバーで吹き替える物です」

銀時

「主人公はもちろん俺で」

フェイト

「私がキーパーソン！！」

ｒｉｎｇ
「大体の内容は決まっていますが、とりあえずデート編終了後、一つ短編を挟み、長編シリアスに入ろうかなと思っています。そこで、皆さんに募集をします」

銀時
「クロス学園の登場人物以外で、この長編シリアスに出てほしいキャラクターを募集する。また、作者が知らないキャラクターは出せないので悪しからず」

フェイト
「もちろん、オリキャラもありだよ」

ｒｉｎｇ
「それほど数は募集しないので、一人一キャラに制限します。では、応募待ってるぞぉぉぉ！！」

第九話『黒幕の目的は大体最後らへんになって分かる』（後書き）

応募待ってます！！

第十話『男なら誰かの為に強くなれ！！』（前書き）

今回はめちゃくちゃ長いので、『教えて銀八先生』と名言は休みます…つ、つかれた、まさかの１００００字オーバー…。

第十話『男なら誰かの為に強くなれ！！』

剣心
「どういう事だ、斎藤！！」

斎藤
「今言った通りだ」

剣心が警察官の一人一剣心の親友（ライバル）、斉藤　一に聞いた。斉藤はタバコに火をつけながら答える。

斉藤
「あの観覧車には全室に爆弾が仕掛けられてあるらしい。…爆弾魔がどこにいるかは分からん。４時に犯人から連絡があると３時位に連絡が合った」

斉藤は時計を見る。今現在３時５８分。

はやて
「動かないつもりなんか！？」

斉藤
「阿呆。動くわ、豆狸。ただ下手に動いて犯人を刺激しても観覧車を爆破されるだけだ。とりあえずは４時を待つ」

斉藤の正論中の正論を聞き、はやては悔しそうに下がる。

斉藤
「…あと、十秒…」

そして…時計の針が、４時を差した。

携帯がなる。斉藤はゆっくりと携帯を開き、耳に当てた。

？？？

『おい…警察のバカども…例の物は用意出来たか…？』

斉藤
「貴様にバカ呼ばわりされる覚えは無いわ阿呆」

はやて
”この人が刺激しとるゥゥゥゥゥ！？”

はやては心の中でシャウトする。

斉藤
「用意は出来ている…トランプだったな？」

？？？

『いいか！！　ゴンドラが一周する十分が過ぎたら爆破するが…それまでに貴様等に最後のチャンスをやろう！！』

斉藤
「何…？」

？？？

『トランプでゲームをやろうじゃないか…』

斎藤
「それに勝てばいいのか？」

？？？

『運が良ければ客は死なないですむぜぇ～』

斎藤
「ち…」

斎藤は舌打ちして電話から耳を離す。

斎藤
「犯人はトランプで勝負を挑んできた…。この中でトランプに強い奴はいるか？」

みんな顔を見合わせる。その時ー。

ルルーシュ
「その勝負…俺が受ける！！」

ルルーシュが斎藤に近づく。斎藤は不敵に笑った。

斎藤
「いいだろう…携帯だ」

ルルーシュ
「ああ…。おい、トランプのどのゲームで勝負するんだ？」

？？？

『ガキか…まぁいい、ゲームは…時計（クロック）カードだ！！』

（ここからの説明はディオ様ボイスでお楽しみください）

時計（クロック）カードとはッ！！　トランプゲームの一つであるッ！！

このゲームはジョーカーを除いた五十二枚のトランプをよく切りッ！！　『時計（クロック）』の文字盤のように配置した十二カ所と中央に一カ所の計十三カ所にカードを四枚ずつ置くッ！！

中央にある『十三時』の山の一番上のカードをめくるとスタートだッ！！

（お疲れ様でした。ここからは普通にお楽しみください）

ルルーシュ
「いくぜ！！」

ルルーシュは十三時の山からカードを一枚引く。

ルルーシュ
「最初に引いたカードはスペードの3…。そのスペードの3のカードを『3時』にあたる山の一番下に表のまま入れる。次はその『3

時』の山の一番上のカードを引く…」

ルルーシュは『3時』の山からカードを引く。

ルルーシュ
「カードはハートの4…。先程と同様に『4時』の山の下に入れる。そして4時の山から一枚引く…。それを繰り返す！！」

ルルーシュはゲームを続けていく。

ルルーシュ
「次はダイヤの10…。『10時』の山に入れる。その上のカードはダイヤの4。『4時』の山の下には4のカードが二枚になった」

後ろで銀時やフェイト、はやてが心配そうにながめる。

フェイト
「なるほど…このゲームを続けていくと、やがていずれかの時刻の場所に四枚のカードが開かれていく。『時計（クロック）』が出来ていく訳ね」

その通りである。さて、犯人の思惑がわかっただろうか？

ルルーシュ
”犯人はこのゲームで何をさせようと企んでいるんだ…”

ルルーシュ
「四枚目の４のカード…最初に四枚が揃い表示された時刻は…『４時』！！」

―その瞬間だった。

轟音と共に、『四番』のゴンドラが爆発したのだ。

銀時
「四番のゴンドラが爆発した！？」

はやて
「ま、まさか…トランプは１３。ゴンドラも１３…そうか！！」

はやては気づいたようだ。ルルーシュも勿論、気づいていた。

ルルーシュ
「これは時計の爆破ゲームか！！　この観覧車には１３のゴンドラがあり、１３の時刻を意味するカードと一致している！！　このゲームで四枚のカードが開いた時刻と同じ数字のゴンドラが爆破され

るって事か！！」

こなた
「なのはちゃんを含む客は、１番、３番、１３番に乗ってる！！」

ルルーシュ
「く…」

ルルーシュはトランプを見る。

ルルーシュ
「なのはが乗っているゴンドラは『３番』！！　３のカードはすでに…」

フェイト
「さ、３枚、開かれてる…もう１枚引いちゃったら…なのはは！！」

―――――――――――――――

なのは
「きゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

なのははすぐ隣のゴンドラが爆発したのを目で見ていた。

なのは
”ゴンドラに…爆弾が!!”

なのははすぐさまレイジングハートを取り出す。ゴンドラを破り、脱出しようというのだ。しかし…

レイジングハート
『Ｍａｓｔｅｒ!!　Ｙｏｕ　ｍｕｓｔ　ｎｏｔ　ｄｏ　ｉｔ!!（マスター!!　いけません!!）』

なのは
「レイジングハート!?」

レイジングハート
『Ｌｏｏｋ　ｔｈａｔ!!（あれを!!）』

なのははレイジングハートに言われ、窓から外を見る。なのはの他にも、乗っている客が二人もいたのだ。

なのは
「く…私が脱出しても、他の人が助からない…」

レイジングハート
『Ｔｈａｔ' ｓ　ｒｉｇｈｔ…（その通りです）』

なのはは窓からトランプをするルルーシュを見た。

なのは
「ルル君…助けて！！」

―――――――――――――――

ルルーシュ
”なのは…必ず助ける！！”

？？？
『ククク…さあ、爆破ゲームを続けろ！！　果たしてこのゲームを無事に終わらせれるかな！？』

ルルーシュは舌打ちする。

はやて
「くっそ…犯人はどっかでルルーシュ君のカードを見とるはずや！

！　一体どこに…」

銀時
「ち…俺達も何も出来ないなんてまっぴらごめんだぜ！！　ルルーシュ！！　俺達は爆弾魔を探す。お前は…なんとしても勝て！！」

ルルーシュ
「分かっている…任せておけ！！　…！！　『８時』のカードが開いた！！」

８時のゴンドラが爆発する。

フェイト
「時間はないよ！！」

銀時
「行くぞ！！」

銀時達は走り出す。

こなた
「有希ちゃん！？　聞いてた！？」

長門
『…うん。今、衛星から探している。だが、恐らくしらみつぶしの方が早い。そっちに任せる』

銀時
「よし…行く「待て！！」ッ！？」

いきなり銀時達を誰かが呼び止める。

皆の前にゆっくり一人の男が現れた。堂々たる体躯に、超長身。そして通称『ジョジョ立ち』と呼ばれるそのポージング。銀時達は目を見張る。そう、この男は…

銀時
「ディオッ！？」

フェイト
「ディオ先生！？」

美琴
「あんた…」

ディオ
「すまないな…あるうら若き貴婦人に頼まれてな…貴様等をここから先に行かす訳にはいかんのだ…ザ・ワールド!!」

ディオはスタンド『ザ・ワールド』を発現させる。まさかのディオの登場に、うろたえる一同。

銀時
「く…時間停止能力は強力だ、ここは先手必勝!!」

フェイト
「行くよ!!」

銀時が木刀を、フェイトがバルディッシュを構えてディオに走る。

しかし、その時二人の隣を三人、誰かが走り抜けた。

美琴
「あとで何かおごってもらうわよ?」

こなた
「そうだね～」

かがみ
「行くわよ二人とも…投影（トレース）・開始（オン）」

かがみが手にいきなり双剣を出現させた。干将・莫耶（かんしょう・ばくや）。知ってる人ならばピンとくるだろう。彼女の能力は…『投影魔術』である！！
しかし、彼女の物は何故か霊子で出来ており、白い。

かがみ
「はあっ！！」

かがみは斬りかかるが、ディオはザ・ワールドを駆使してかわす。

かがみ
「今の内に行きなさい！！　ここは私たちが押さえる！！」

銀時
「おう！！」

フェイト
「気をつけてね！！」

銀時やフェイト達はディオからすぐさま離れ、また捜索に出た。こ

なた、かがみ、美琴の三人はディオと相対する。

ディオ
「三人か…まぁいいだろう。うら若き貴婦人は少しでも足止めすればよいと言ったからな…」

美琴
「その『うら若き貴婦人』って誰なのよ？」

ディオ
「簡単に教えるとでも思うか？」

美琴
「…無理でしょうから、力ずくで聞いてやるわ！！」

美琴は雷の槍を放つが、すぐさまザ・ワールドが阻む。

ディオ
「ふむ。まだ貴様等では私には勝てまい…」

こなた
「やってみなきゃ分かんない！！　蒼炎丸！！」

こなたの蒼き炎がディオを襲ったが、やはりディオはかき消した。

ディオ
「そこでだ。貴様等が私に『ザ・ワールドの時間停止能力』を一度でも使わせた場合…貴様等の勝利としよう」

かがみ
「あら…やけに甘いのね」

ディオ
「勘違いするな。私はうら若き貴婦人に頼まれているだけだ…。それに、ザ・ワールドは最強のスタンド。パワーと充分な射程距離を備えている。それだけでもキツいと思うが？」

確かにそうである。ザ・ワールドは時間停止能力を差し引いたとしても、パワー、スピード、射程距離。全てにおいて反則級である。しかもディオ自体が強力な吸血鬼…。キツい戦いになる事は目に見えている。

かがみ
”ならば…ある程度の遠距離から、かわせないほど速く、なおかつ受け止められないような威力がある技が必要…そんな技…”

ない、とかがみは言おうとしたが、ふと、彼女の師匠から受け継いだある技を思いだした。

かがみ
「なんだ…あるじゃない。美琴ちゃん、こなた。とりあえず時間稼いで。隙を見つけて、どうしてもザ・ワールドを使わなきゃならない一撃を叩きこんでやるから！！」

それを聞いた美琴とこなたはニヤリと笑った。

美琴
「”超電磁砲”もありかなと思ったけど…時間を稼ぐのが必要なら私は時間稼ぎに回るわ」

こなた
「頼んだよ、かがみん」

かがみ
「かがみん言うな！！　…まぁいいわ、お願いね！！」

こなたと美琴は頷き、ディオに向けて走る。

こなた

「蒼炎丸！！」

こなたが薙刀を突きの形に構える。すると、円の形を持った炎がこなたの前に出た。

こなた
「…炎霜火（えんせんか）…」

地をけり、突きの状態のまま、炎を纏ったこなたが突貫する。まさに炎の弾丸の如きである。

ディオ
「無駄無駄ァァ！！」

ディオはザ・ワールドを駆使し、こなたを止める。そこに、美琴が走りこむ。

美琴
「てぃ！！」

美琴は砂鉄で作った剣を振るう。しかし、ディオはそれを素手で止める！！

ディオ
「気化冷凍法!!」

美琴
「危なっ!?」

ディオが手を突き出す。繰り出した気化冷凍法を美琴は飛び退いてかわしたが、砂鉄が氷づけになった。

美琴
「殺す気満々か、あんたは!!」

ディオ
「加減はせんと言ったはずだが?」

美琴
”くそ…一瞬でいいんだ…かがみの為に、隙を!!”

美琴は考えるが、悩む時間は無い。

ディオ
「行くぞ!!」

ザ・ワールドが突撃してくる。

美琴
「やはりアレしかない！！」

美琴は砂鉄の剣でザ・ワールドを止め、距離を取った。

美琴
「最大の電力を消費するし、使い勝手も悪いけど…食らえぇ！！」

美琴から多大な電気がほとばしる。まさに雷である。

ディオ
「そんな技やらせると思うか！？　スペースリパ…「炎霜火！！」
ぬぅ！！」

止めようとしたディオに、こなたが炎霜火で突貫。見事にディオを
止める。

こなた
「行かせない！！」

ディオ
「邪魔を！！　喰らうがいい！！」

ディオが腕を振り上げる。こなたは身構える。

こなた
”ロードローラーか！？”

ディオの十八番、ロードローラーかとこなたは身構えるが…。

ディオ
「桑の実ＤＡ☆！！　そうだろう！？」

繰り出したのは、ロードローラー…じゃなくて、桑の実である。

こなた
「いいえ！！　ケフィアです！！」

ディオ
「何ぃ！？」

ディオが繰り出した海原ＹＯＵ☆斬の桑の実攻撃をこなたはケフィアガードで防ぐ。

かがみ
「何なんだそれは！！」

隙をうかがいながらもツッコミを忘れないかがみ様、どうもご苦労様です。

こなたが足止めしている間に、美琴の準備が整った。

美琴
「食らえぇぇ！！　ボルテッカァァァァァァ！！」

かがみ
「ポケモンんん！？」

美琴が体に雷を纏い、突撃する。ボルテッカー。スマブラＸではピカチュウの最後の切り札となる、でんきタイプの中でも強力な攻撃！！

ディオ

「く！！　ならば今度こそ、ロードローラーだッ！！」

ロードローラーを叩きつけるディオ。しかし美琴は…

美琴
「無駄無駄無駄ァァア！！」

かがみ
「ディオ先生のお株を奪った！？」

ロードローラーを突撃の雷で弾き飛ばす。しかし、それで威力は弱まったようだ。

美琴
「でぇぇぇい！！」

ディオ
「ぐぁぁぁぁ！？」

美琴がディオを体当たりで吹き飛ばす。そう…ついに、隙が出来たのだ！！

こなた
「かがみーん！！」

かがみ
「任しときなさい…食らいなさい！！　我が弓道の師の直伝の技を！！　投影（トレース）・開始（オン）」

かがみが弓矢を投影する。

かがみ
「…『梓弓』。そして…」

弓は聖なる弓、梓弓。…そして、弓につがえた矢は、ある『宝具』に見えた。

かがみ
「偽（カラド）・螺旋剣擬き（ボルグもどき）！！」

そして、それが放たれた途端！！

ディオ
「ザ・ワールド！！　時よ止まれ！！」

一時が止まった。美琴に吹き飛ばされたディオは、着地する。

ディオ
「危なかったな…まさかこんな物を隠しもっていたとは…流石に食らってはマズい。…私はここまでだな」

ディオは『偽（カラド）・螺旋剣擬き（ボルグもどき）』を砕いた。

ディオ
「そして、時は動き出す…」

一時が動き出す。固まっていた美琴、こなた、かがみが動き出した。

美琴
「…あ、今、止まってた！！」

こなた
「かがみのアレが消えたしね！！」

ディオ
「その通りだ。まさかあんな物を隠し持っていたとはな…。貴様等の勝ちだ。早く行くがいい」

ディオの言葉に、美琴とこなたははっとした。

美琴
「そうだ、急いで行かなくちゃ！！」

こなた
「行くよ、かがみん！！」

かがみ
「うん！！」

三人はまた爆弾魔を探しに走る。そんな中、かがみは自らの師の事を思っていた。

かがみ
”師匠…技、借りちゃいました…”

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「…ん？」

ここは八神はやて宅である。そこのキッチンで、エプロンを着た赤い弓兵が料理を作っていた。

シャマル
「どうかしたの？　アーチャー」

リインフォース
「何か感じたのか？」

「いや、少しな…シャマル、ザフィーラ、リインフォース、これを食卓に運んでくれ」

ザフィーラ
「心得た」

シャマル
「了解～♪」

リインフォース
「うむ」

シャマル、ザフィーラ、リインフォース達に指示を出しながら料理

を作る赤い弓兵。そう、かがみの師とは…どっからどう考えても中の人ネタでしかない八神はやてをマスターとする赤い弓兵、アーチャーである！！　ちなみに彼は、クロス学園で家庭科の教師も勤めている！！

アーチャー
「…今、何か言われた気がしたが…気のせいか」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

銀時
「どういうことだ、雲雀！？」

雲雀
「さぁね。僕はただ…君達を足止めするよう言われただけだ」

その頃銀時の前には、クロス学園風紀委員…通称『遊撃隊（ヴィソトニキ）』の隊長、雲雀恭弥が立ちふさがっていた。フェイト達を先に行かせ、銀時は雲雀と対峙している。

…『遊撃隊（ヴィソトニキ）』という名前だけで風紀担当の先生がわかった人はかなりの達人だ。

雲雀
「ある貴婦人に頼まれたものでね…」

銀時
「また貴婦人か…誰なんだよ？」

雲雀
「それは言えない。だけどね…」

雲雀が真剣な表情になった。銀時は何か理由があるのかと表情を変える。

雲雀
「『遊撃隊（ヴィソトニキ）』に割く予算を上げてくれると言われてね…」

銀時
「いや、お前らしくねぇかなり人間的な理由だな！？」

雲雀
「という訳だ、足止めをさせてもらうよ」

雲雀がトンファーを構える。銀時も木刀を抜き、だらりと構えた。

―沈黙。それは、疾風と共に終わりを告げた。

銀時
「うおらぁ!!」

雲雀
「ふっ!!」

銀時の木刀と雲雀のトンファーがぶつかり合う。

双方接近戦を得意とするタイプ。勝負はかなり長引きそうだった。

―予告爆破時間まで、あと三分―

はやて
「くそ!!　どこにおるか分からへん!!」

はやて達は未だに爆弾魔を見つけられなかった。どこかでルルーシュを監視している以上、あまり観覧車から離れてはいないはず。な

のに見つからないのだ。

はやて
「いっそ広域魔法であたり一帯吹き飛ばして…」

フェイト
「だ、駄目だよはやて！！」

シュベルトクロイツを取り出すはやてをフェイトが必死に止める。

そんな時、ツナが呟いた。

ツナ
「そういえば…あのゲームでルルーシュが勝つ方法って何なんだ？」

フェイト
「あぁ、それは…」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

所変わって、ここは観覧車前。

ルルーシュ
「…六時が開いた！！」

六時のゴンドラが轟音と共に爆発する。

「くそ！！　このままでは客が乗っているゴンドラも時期に爆破されてしまう！！」

「このゲームで少年が勝つ方法は無いのか！？」

周りで人が騒ぐ。しかし、そんなのも気にならないほどルルーシュは集中していた。

ルルーシュ
”たった一つだけ…このゲームを終わらせる方法がある…それは…”

ルルーシュはカードで出来ている時計の中央…十三時を睨む。

ルルーシュ
”それは十三時のカード、つまり『キング』を四枚開ける事だ！！
初めに十三時からスタートしているからキングが四枚出ればその時点でカードは引けなくなりゲームは終わる！！　今、キングは二

枚開かれている。だが…”

ルルーシュは目を移し、三枚開かれているなのはが乗っているゴンドラの番号、三時のカードを見る。

ルルーシュ
”その前に3のカードを引いたら…なのはの命は…”

ここまでルルーシュは三枚開いた『三時』のカードを某王様レベルの脅威のドロー力で引いていなかった。ルルーシュは祈るようにカードを引く。

ルルーシュ
”ッ!! よし、三枚目のキングを引いた!! あと一枚だ!!”

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイト
「『キング』のカードを四枚開いて、『十三時』を開くことだよ」

フェイトがツナに説明した瞬間、リクオの目が光った。

リクオ
「分かったぞ！！　爆弾魔の居場所が！！」

氷麗
「ほんとですか、リクオ様！？」

リクオにみんなが注目する。

リクオ
「盲点だったぜ…『キング』のカードが四枚開かれてゲームが終わるなら…『十三番のゴンドラには爆弾は仕掛けられていないじゃないか』！！」

ＡＬＬ
『ッ！！』

ツナ
「そういう事か！！　ルルーシュのカードを見れて、なおかつ一番安全な場所は…『十三番のゴンドラ』！！」

はやてがすぐさまトランシーバーを握る。

はやて

「全隊に報告!!　爆弾魔は…『十三番のゴンドラ』や!!　急ぎ!!　後一分もない!!!」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

こなた
「『十三番のゴンドラ』!?」

かがみ
「そうか!!」

美琴
「そいつは盲点だったわね…」

通信を聞いたこなた、かがみ、美琴が走る。今、この遊園地にいるZ組メンバーの中で、一番観覧車に近いのはルルーシュを除いてこの三人だった!!　はやて達はもう観覧車より少し遠く、間に合わない。爆弾魔の確保は、この三人、そして、ゲームを続けるルルーシュに託された!!

ルルーシュ
「あと…二十秒っ…!!」

ルルーシュは勢い良くカードを引く。

ルルーシュ
「A！！　ダメだ！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

かがみ
「あと二十秒！！」

こなた
「間に合え！！　卍解！！　大無間蒼炎丸！！」

こなたが卍解し、ものすごい勢いで飛び出した。もう観覧車は射程距離だ！！

かがみ
「投影（トレース）・開始（オン）！！」

かがみが霊子で白く輝く弓、『梓弓』を投影する。

かがみ

「矢は…これ！！」

かがみはある矢を投影する。―その昔、三国時代。蜀に、五虎将と呼ばれた猛将達がいた。かがみが投影したのは、その中にいた弓の名手、黄忠が使う矢。その名も―

かがみ
「『紅く燃えたる誓いの矢（浄炎火矢）！！』」

かがみが放った矢は紅く燃え、観覧車に突貫する。

美琴
「はぁぁぁぁ！！」

美琴が電気の矢を放ち、ゴンドラに向かわせる。間に合うか！？

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

斎藤
「あと五秒だ」

冷静に呟く斎藤の言葉は、ルルーシュの耳によくしみ、ルルーシュ

の心を冷ましていく。ルルーシュは息を詰め、呟く。

ルルーシュ
「危ない橋でもなんでも…一度渡っちまうもんさ…ツキの女神はいつだって…その先にしゃがみこんでいる…」

―最後の一枚を、ルルーシュは何かを呟きながら引く。

その時の事を、後ろにいた斎藤は後にこう述懐している。

斎藤
『あの時…俺はあの少年の後ろに…白髪の少年を見た。年はルルーシュとあまり変わらない…だが…数々の修羅場をくぐり抜けたような…”闇”のような少年を…』

それ―ルルーシュの後ろにいた少年、赤木しげるを斎藤が幻視した時、ルルーシュは最後のカードを引いていた。そのカードには…『K』と書かれていた!!

ルルーシュ
「へへ…来たぜ…ぬるりと…!!　『キング』!!」

「やった!!　キングが四枚開いた!!」

「時間は止まった！！」

周りで人が騒ぐ。ルルーシュはその騒ぎを聞きながら、ゲームに勝った優越感を持っていた。

―その瞬間。

轟音と共に、十三番のゴンドラが爆発した！！

ルルーシュ
「何！？」

ルルーシュは目を剥く。十三番は爆発しないはず…。

そうルルーシュが思った時、爆炎から三人の少女が飛び出してきた。

こなた
「いやー。やりすぎちゃったね」

かがみ

「やりすぎも何も…」

美琴
「ゴンドラ壊しちゃったわね」

ルルーシュ
「お前らかぁぁぁぁあ！！」

ルルーシュが突っ込む。そう。爆発させたのはこなた達だった。

なのは
「ルル君！！」

救出されたなのはが走ってきて、ルルーシュに抱きついた。

ルルーシュ
「ったく…心配かけやがって…」

ルルーシュもなのはを抱きしめる。

こなた
「う～ん。熱々だねぇ～」

かがみ
「うらやましい…」

そんな事をしている間に、はやてやフェイト達が到着した。傷だらけの銀時、雲雀も現れる。

フェイト
「なのはー！！」

フェイトがなのはに抱きつく。

なのは
「ごめんね、フェイトちゃん。心配かけたね。はやてちゃんも」

はやて
「かまへんかまへん。友達やろ？」

こなた
「銀さんと雲雀君もかなり激闘だったみたいだね…」

銀時

「あぁ…雲雀がやけに粘りやがるからよ…」

雲雀
「ふん…」

なごやかな雰囲気。そこに、やってきた長門が水をさした。

長門
「犯人は…？」

ＡＬＬ
『あ』

全員が爆発したゴンドラを見る。そこへ…

紫
「それについては私が説明するわ」

いきなりスキマが開き、ゆかりんこと紫が現れる。その後ろからディオ、スカリエッティ、そして…

シグナム

「ハルヒ！？」

ハルヒ
「おっす～みんな」

そう、ハルヒが現れた。

ルルーシュ
「…成る程な。全てつながった」

なのは
「え？　何が？」

ルルーシュは紫に目を向ける。

ルルーシュ
「全て校長が企んだ事だったんですね？」

紫
「そうよ～」

紫は悪びれずに答える。

紫
「あなた達の絆を試しにね…」

スカリエッティ
「校長は君達の絆を試すために、芝居をうったそうだ。私が電話の役だった」

ルルーシュ
「成る程。聞いたことがある声だとは思ってはいた」

ハルヒ
「爆弾は私が”キラークイーン”を使ったの」

ディオ
「そして私と雲雀がお前らの足止め役だ」

銀時
「成る程な。なら十三番のゴンドラに乗ってたのは…」

ハルヒがその質問に手を上げる。

ハルヒ
「私よ。脱出には校長先生のスキマを使ったの」

紫
「さて、ルルーシュ君、なのはちゃん」

紫が近づく。ルルーシュとなのはが一歩前に出た。

紫
「今日みたいな事態にもよく対応し、二人には確かな絆があることを見せてもらいました…校長公認よ。幸せになりなさい！！」

ルルーシュ
「言われなくとも」

なのは
「大丈夫。私はルル君が大好きだから！！」

ルルーシュとなのはがそう答えた時…周りにいた誰かが、拍手をしだした。

拍手は鈴なりに広がる。たまに「いいぞ兄ちゃん」などと応援の声が聞こえる。その中で、二人は、また見つめ合い、抱きしめ合った。

能力紹介

能力　『霊子投影魔術』

使用者　柊かがみ

基本的にはアーチャーの投影魔術と同じだが、どうしてもアーチャーレベルの投影ができなかったかがみが考案した。

霊子を使うことにより、投影した物をさらに強く、頑丈にできる。

しかし、まだアーチャーには及ばない。

今回では干将・莫耶や偽・螺旋剣（カラド・ボルグ）。梓弓や浄炎火矢を投影。しかし、霊子を使っているため白く輝いている。

戦闘の師匠は当然ながらアーチャーである。

次回予告

クロス学園初の長編シリアス

ついに開幕

～Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　Ｆ．Ｔ～

かがみ

「次回、クロス学園Ｚ組！！　第十一話『出会いは急だが別れはもっと急』。…次回も見なさいよ！！」

第十話『男なら誰かの為に強くなれ！！』（後書き）

…次回予告は長編シリアスでしたが、次は長編シリアスの映画みたいな予告版。そして『教えて銀八先生』をやろうと思います。

お楽しみに！！

予告　～Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　Ｆ．Ｔ～（前書き）

私はいっつも一人ぼっちやったから病気で死んでしまうこと自体はそんなに怖くなかった。
そやけど今は違う、守りたい日々があって大切に、幸せにしてあげないかん子達がおる。
皆の為に私は生きてよ、笑顔でいよ、強くいよ。そう思った。一八神はやて

なっがいな…一坂田銀八

ぶち壊すな！！一柊かがみ

予告 ～Episode of F.T～

―終わりよ…

もう二度と…

会う事は無い―

～Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　Ｆ．Ｔ～

フェイト
「こんな私に今まで…良くしてくれてありがとう」

フェイト・テスタロッサ・ハラオウン

一失踪!?

???
「素晴らしい、素晴らしい!!　これがプロジェクト!!」

うごめく影…

???
「久しぶりですね…アーチャー」

アーチャー
「…まさか…いや、バカな!?」

クロス学園に、辻斬り現る!?

???
「昔…世間には疎まれた名剣がありました…」

絡み合う謎、ありえない戦い!!

フェイト
「私は…もう、何もいらない…」

フェイトに何が!?

???
「お前、死線が見えるぞ…」

???
「ここでもハジケまくってやるぜぇ!!」

???

『コナチャンノ、クセニ』

？？？
「一世一代の頑張り物語だよ！！」

？？？
「撃滅の…セカンドブリットォォ！！」

キャラクターも続々登場！！

なのは
「全力…全開！！」

ルルーシュ
「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる！！」

遊戯
「行くぜ、海馬ァ！！」

海馬
「言われるまでもない！！」

かがみ
「…体は光で満ちている…」

こなた
「卍！！　解！！」

当麻
「その幻想をぶち殺す！！」

アーチャー
「とりあえず右にさけろ！！」

そして…終わりが訪れる…。

―最後だ―

―戦う意味を持たない…坂田銀時（テメェ）は―

―ここで死ぬぜ―

ザクゥ！！

フェイト

「銀時ィィィィィィィィィィィィィィ！！」

―乞うご期待！！―

銀八

「教えて」

生徒全員
『銀八先生!!』

銀八
「はいはじまりました、一回ぶりの銀八先生。今回のアシスタントは、長編シリアスのキーマンの一人、練鉄の英雄、英霊エミヤこと、アーチャーだ!!」

アーチャー
「…それはバラしても大丈夫なのか?」

作者
「大丈夫だ、問題ない」

銀八
「しかし伏せ字のキャラクター達…ちょっと分かりやすすぎだろ…」

アーチャー
「まぁ作者の文才ならこの程度か?」

作者

「それは言わんでくれ、アーチャー…」

アーチャー
「ク、なら質問といくか。ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問だ。いつも感謝している。『リリカルキャラに質問です。ガジェット?~?１００体とガジェット?型１０００体。ぶっちゃけどっちを相手にする方が楽ですか？　本心でお答えください』。…これ、次の質問の時に送ってきそうだな?」

なのは
「下心見えてるの…でも、答えるよ。せーの」

リリカルキャラ
『ガジェット?型１０００体には勝てる気がしません!!』

アーチャー
「…まぁそうだろうな…」

銀八
「では、『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんは色々な小説を頑張ってください」

アーチャー
「では次だ…『三国同盟』さんからだ。『美琴に質問で~す。この

作品では、同じ学園で同じクラスで周りにカップルと思われてますが、幸せレベルは１０がＭＡＸならどのくらいですか？
もう１０ぶっちぎってますかね？（笑）』」

銀八
「実際どうよ？」

美琴
「な、何いってんのよ！！　あいつとはただの腐れ縁なんだから！！　べ、別に嬉しくなんかないんだから！！　１よ、１！！」

アーチャー
「…凛に勝るとも劣らんツンデレだな…」

銀八
「ツンデレールガンごちそうさまって奴も多いだろ…。では、『三国同盟』さんは……廊下に立ってろ！！」

アーチャー
「思いつかなかったな…。では次だ。『ラムネ』さんから質問だ。
『Ｑ：クロス学院の財力はどれくらい？』…財力か…」

銀八
「そいつは俺に聞くよりも…」

紫
「私が答えるわ」

罪袋『ゆかりん！！　ゆかりん！！　ゆかりん！！　ゆかりん！！』

アーチャー
「相変わらずだな…」

紫
「あら、練鉄の英雄…いえ、アーチャー先生ね。まぁいいわ、それで質問は…財力？」

銀八
「あぁ、財力」

紫
「それはねぇ…実は、生徒の一人兼クロス学園理事の『ある人』がいるから…お金は湯水のように出てくるのよ」

アーチャー
「…なるほど、アイツか…」

銀八
「いや、誰だよ!?」

紫
「そりゃ、『某金ピカ王』よ」

アーチャー
「『俺のこの手が真っ赤に燃えるぅぅ!!　勝利を掴めと轟叫ぶぅぅ!!』…と叫びそうな奴だ」

銀時
「…わかった、確かに」

紫
「実は長編シリアスにも出るわ」

銀八
「マジで?　では『ラムネ』さんは某金ピカ王の財宝をくらえ!!」

アーチャー
「金ピカファンは楽しみにしておけ…では、次の質問…『２４９』さんからの質問だ。『はやてに、なのは、フェイトに先を越された感想は?ついでに彼氏にするなら誰?　そして、ジョジョからディ

オとキラークイーンが出てますが他にも出しますか？』だそうだ」

銀八
「先を越されたたぬき女の気持ちはどうよ？」

はやて
「…分かっとんねん。…私には出会いが無いねん…なのはちゃんもフェイトちゃんも…ブツブツ…」

背景に『ドヨ～ン』が出そうに部屋の隅で体育座りするはやて。

アーチャー
「大丈夫だ、はやて。すぐに相手が現れる…」

はやて
「うわぁぁん、アーチャー！！」

アーチャーの腕に飛び込むはやて。

銀八
「お前、アーチャーに対してはどうなんだ？」

はやて
「うーん…アーチャーもかっこええけど…やっぱどっちかというと家族やな」

銀八
「んで、ジョジョネタは…うーん、多分少しは出るんだが…詳しくは分からねェな…。では、『２４９』さんはメイド・イン・ヘヴンで時を加速させてろ！！」

アーチャー
「出来るわけないだろ！？　では、次…『朧月　琥珀』さんからだ。『観覧車と爆弾魔って元ネタは「遊〇王」ですか？』」

銀八
「ズバリです。遊〇王六巻、『１３の恐怖！！』からの引用です。誰か分かる人いるかなと思ってだしました。では、『朧月　琥珀』さん、廊下に立ってなさい！！」

アーチャー
「では、最後といこうか。『クロウド』さんからの質問だ。『紫ってババアってことは何歳ですか？』。…追伸もあるな。『Ｐ，Ｓもし攻撃、移動をこっちにしてきたらカウンター×１０億倍＋子供が見ちゃいけないＢＬ＆ＧＬの画像を無限に送り続けるのでご注意ください。』」

銀八
「まてアーチャー!!　その追伸は言ったらダメだろ!?　引っかかれよ!?」

アーチャー
「ふむ。確かにその通りだが…別に予想を裏切ってしまっても構わんのだろう?」

紫
「流石は練鉄の英雄。私達には考えつかないことを簡単にやってのける!!　そこに痺れる!!」

罪袋
『憧れるゥ!!』

はやて
「さりげなくアーチャーの名言やな」

銀八
「お前ら…それと、校長の年齢だが…実はここでは、紫校長はクロス学園開校から未だに初代校長をやめていない。そしてクロス学園はこの前創立１２００年を達成…ゴハ!?」

紫

「ダ・マ・レ♪」

銀八を足蹴にする紫。

アーチャー
「…それでは、『クロウド』さんは最後だから部屋の掃除をお願いしよう。今回はここまでだ!!　次回からの長編、楽しみにしておけ!!」

(注)　これは長編シリアスの没ネタです。もしかしたら大幅に変えて書くかも…。

一問おう

一あなたが私のマスターか

クロス学園で一

聖　杯　戦　争!!

「俺はランサー…。…俺の槍のサビになれ！！」

疾風の如き錬成の槍兵！！

「『無限の（アンリミテッド）錬成槍（ボルグ）！！』」

ランサー！！

「私はアーチャーのサーヴァント。真名は…」

ビリビリ雷姫！！

「『超電磁砲（レールガン）！！』」

アーチャー！！

「私はあなたのサーヴァント！！　クラスはキャスターだよ！！」

砲撃一直線！！

「『星光の（スターライト）殲滅砲（ブレイカー）！！』」

キャスター！！

「アサシンのサーヴァントとはいえ…少しは気配はバレるか？」

絶対遵守の力を持つ暗殺者！！

「『絶対遵守の魔眼（ギアス）』」

アサシン！！

「俺ガ…マモル…」

虚の力を得た狂戦士！！

「ウガァァァァア！！」

バーサーカー！！

「言ったはずだ、無免許運転は…特権だろ！！」

奴ら殺しの騎乗兵！！

「『奴ら殺しの散弾銃（イサカライオット）！！』」

ライダー！！

そして…

一問おう

一あなたが私のマスターか

雷神の大剣使い！！

「『大雷神斬刃砲（プラズマザンバーブレイカー）！！』」

セイバー！！

聖杯を巡り、クロス学園で戦争が始まる！！

～『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　Ｃｒｏｓｓ』第６次聖杯戦争～

…いつか内容を大幅に変えて書くかもしれません。

予告　～Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　Ｆ．Ｔ～（後書き）

…分かる人なら分かる長編シリアス。

ある漫画のエピソードとある漫画のエピソードを合わせたもの…。

ご期待ください！！

第十一話『出会いは急だが別れはもっと急』（前書き）

時間を稼ぐのは構わないが…別に、あれを倒してしまっても構わんのだろう？ ―アーチャー

アーチャー…えぇ、遠慮はいらないわ！！ ―八神はやて

…声優ネタか ―坂田銀八

第十一話『出会いは急だが別れはもっと急』

―沈黙が支配する空間。

飽きるほど暗く、静かなこの空間に、一人の金髪の女が立っていた。
いつもの活発な表情は無い。その表情はむしろ…悲しみ。そして、
憂い。

手には、一枚の手紙を握りしめ、虚空に呼びかける。

「来たよ…出てきて」

―すると。

いきなり空間が割れ、一人の男が現れた。メガネをかけている以外、
いたって普通の男だ。

「約束通り一人で来たらしいな…」

「…当然。だから…」

「あぁあぁ。分かっている。お前のクラスの奴らには手を出さない。なら…手筈通り、頼むぞ」

「…分かった」

「…迷うな下衆が。これは正義だ…絶対的正義の名の下に…」

「…全ての悪に、鉄槌を」

「…その通りだ」

それを最後に、男はこの空間から消えた。

残された金髪の美女は、憂いを帯びた表情で上を見上げた。一月明かりに照らされたその美女は、かのフェイト・T・ハラオウンに他ならなかった―

―その頃、ある町中。

「桂小太郎とお見受けする…」

ヅラこと「ヅラじゃない桂だ」…桂は、学園からそう遠くない橋で、一人の女性に呼び止められていた。女性は全身黒い服で染め上げた、まさに『闇』を体現しているような女だった。ただ、髪だけは金に輝いていたと記しておこう。

桂
「…人違いだ」

「…なるほど。そんなに警戒するとはな…確かにそうか。こんな真夜中、呼び止められて警戒しない奴などいないか…」

桂
「分かっているな。…何の用だ」

「用など無い。ただ…」

女はいきなり手に漆黒の剣を出現させた。それに驚くも、桂は対応し、刀を引き抜き…斬られていた。

「…ふん、こんな物ですか、桂小太郎」

桂
「貴様…やはりその剣は…」

その言葉と共に、桂はよろめいた。その肩から血しぶきが上がり…
桂は川に落ちた。

女は剣を消し、桂が落ちた川を見る。そしてすぐ目を離し、桂が持
っていた刀を取り、闇に消えた。

一とある事務所

「今月は給料無しって…何でですかぁ!?」

ある事務所で、青年がデスクに座っている赤毛のポニーテールの女
性に詰め寄っていた。その弁からして、どうやら給料無しらしい。

「払いたくても、無いものは払えないさ」

「何言ってんですか!!　この前百万飛んで十五万の振り込みがあ
ったでしょう!?」

青年ー黒桐幹也がさらに詰め寄る。給料が無くてはジリ貧だから当然だろう。

「飛んでないぞ、それ」

しかし女ー蒼崎橙子は冷静に突っ込み、ため息をつきながら机の下から何かを取り出した。

橙子
「それが、これなんだがね…イギリスで作られたウィジャ盤なんだが…」

幹也
「またそれですか!?」

橙子
「しょうがないだろう？　急に売りに出されたんだ…金を積まなきゃ買えなかったんだ。という訳だ。今月は社員は自分で生活費を工面してくれ」

幹也
「…そうさせていただきます!!」

幹也は肩をいからせて橙子から離れる。それを見計らったのか、壁に背を預けていた一人の黒髪で着物を着た女性が橙子に話しかけた。

「橙子…話の続き」

橙子
「ん、あぁ…そうだったな」

橙子は女の言葉に応じ、タバコに火をつけた。灰皿に灰をいれると、橙子の表情が変わる。

橙子
「今月、この町のいたる所で『辻斬り騒動』が起きている。まだあまり公にはなっていないが…どうやら依頼人は何故か知ってしまったようでね…式には、その辻斬りの捜索及び、保護を頼みたい。が…抵抗するなら、殺しても構わん」

式
「そうか…」

黒髪で着物を着た女…両儀式は一言だけ呟き、壁から背中を離した。

橙子
「もう行くのか？　随分従順じゃないか」

式
「興味を持ったんだからしょうがないだろ…」

ぶっきらぼうに返す式に橙子は笑みを返す。

橙子
「そうか…ほら、書類だ。事件の概要も知らなくて、何をする気だお前は！！」

書類を投げる橙子。それを式は一瞥し、すぐに目を離した。

式
「いらないよ。そいつは俺と同類だ。…俺と会ったら、多分殺し合いになる」

橙子
「…そうか。なら、これだけでも持って行け」

橙子が投げた書類を式はキャッチする。その書類には…

式

「『クロス学園』…それと『万事屋銀ちゃん』？」

「今の私達に出来るのはこれくらいだろうな」

顔に一文字傷がある制服を着た女が呟いた。それに、隣に立つ男が言葉を返す。

「あとは見回りぐらいかな…斗貴子さん、今晩から…」

「分かっている。蒼崎の所にも頼みはしたが、それで私達が動かない理由にはならない」

一文字傷の女―津村斗貴子が言い、踵を返して歩き出した。男―武藤カズキはあわててそれを追う。

カズキ

「斗貴子さん、どこに？」

斗貴子

「手は多い方がいいだろう？　少し旧知の仲がいる所がある。行ってみよう」

斗貴子が歩くのを、カズキは追う。その先には、大きな学校、クロス学園があった。

銀八
「期間転校生？」

紫
「その通りよ。ある一定期間だけ、転校してくる生徒をウチが受け入れることになったの」

銀八は紫に呼び出され、校長室にいた。ハタ…いやバカ校長ならまだしも、さすがに紫の前では無礼は出来ないために普通に銀八は椅子に座っていた。

銀八
「…また面倒が増えるだろーが。そんなことで大丈夫か？」

紫

「大丈夫よ。問題ない…はず。はい、これ期間転校生の資料よ」

銀八
「校長がそう言ってもな…期間転校生とはいえさらにキャラが増えたら影薄くなる奴がさらに出るんじゃねぇか？」

軽口を叩き合いながら銀八は紫から期間転校生の資料を受け取る。

紫
「学園に来るのは次回…じゃなくて明後日よ」

銀八
「いや、次回だろ。言い直さなくていい。どんな奴が…」

銀八は資料に目を通す。

銀八
「…おい、五人もいるのは何でだ」

紫
「同時期に五人頼まれたからよ。問題ないわ。あなたのクラスなら」

銀八
「その根拠はどこからくる…」

紫
「勘よ。長年の校長生活で培った勘」

そう言われては、銀八に反論の余地はない。紫の勘はよく当たる。

銀八
「…はいはい。ならあいつらにも言っておこう」

銀八は資料を受け取り、校長室から出る。そして、資料に目を通した。

銀八
「…仲村ゆり…蒼乃カズマ…シャルロット通称タバサ…竜宮レナ…
そして、次元零夜(つぐもとれいや)…か」

一役者は揃った。闇にうごめく影。転校生。辻斬り。それを追う者達。学園の皆…。

クロス学園史上最大の戦いが始まる!!

～Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　Ｆ．Ｔ～

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！！』

銀八
「はい、始まりました長編シリアス最初の銀八先生。今回は質問一つだから、俺だけでいくぞ！！　ペンネーム『２４９』さんからだ。『クロス学園って入るのに年齢制限ってあるの？』だ。さて、お答えするが…。こいつらは今高校生だ。だが、システム的には小中高一貫で、全ての校舎が一つの敷地にまとめられている。つまり、小学生からはいれるぞ。では、『２４９』さん、緊張をほぐすには…とりあえずロケットランチャー撃ち込みますから破壊してみせろ！！　では今日はここまで…」

ハルヒ
「まだよ！！　発表があるわ！！」

フェイト
「この長編シリアス中のＯＰ、ＥＤが決まったよ！！」

なのは
「では、大発表だよ！！」

ＯＰ『Ｅｎｄｌｅｓｓ Ｔｅａｒｓ…』（１１Ｅｙｅｓ Ｃｒｏｓｓ Ｏｖｅｒ ＯＰテーマ）
ｓｏｎｇ ｂｙ 彩音

ＥＤ『Ｔｒｕｓｔ Ｍｅ』（デュララ！！ ＥＤテーマ）
ｓｏｎｇ ｂｙ 松下優也

なのは
「だよ！！ ＯＰで熱くなって…」

フェイト
「ＥＤはデュラＥＤパロディで！！ 配置はおまかせ！！」

はやて
「今度こそ今日はここまでや！！」

第十一話『出会いは急だが別れはもっと急』（後書き）

ＥＤはデュラパロディでお願いします！！

考えてみてくださいね！！

知らない人はニコ動へｇｏ！！

今回出て、また次回からも関わる新キャラ

両儀　式（空の境界）

武藤　カズキ（武装錬金）

津村　斗貴子（武装錬金）

仲村　ゆり（Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！）

蒼乃　カズマ（スクライド）

タバサ（ゼロの使い魔）

竜宮　レナ（ひぐらしのなく頃に）

次元　零夜（オリジナルキャラクター）

第十二話『新章に入ったら仲間はほぼ確実に増えるよね』（前書き）

間違いなの？―タバサ（ゼロの使い魔）

はぅ～！！　かぁいいよ～！！―竜宮レナ

持ち帰っちゃダメだからね！？―涼宮ハルヒ

第十二話『新章に入ったら仲間はほぼ確実に増えるよね』

クロス学園の朝は、騒がしく始まる。

当麻
「不幸だぁぁぁぁぁぁぁ！！」

美琴
「こっちの台詞よぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

叫びながら走っているのは言わずとしれた不幸男、上条当麻とその彼女、御坂美琴。

美琴
「か、彼女じゃないっ！！」

え？　そうなの？

当麻
「お前な、インデックス！！　起きないのに時計止めんじゃねーよ！！」

インデックス
「止めたんじゃないよ！！　手が当たって『止まった』のかも！！」

美琴
「止めたことに変わりないでしょうがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

当麻の頭に乗っているのは言わずとしれたインデックス。クロス学園の学食にはまり、よく学園に来るらしい。

インデックス
「とうま、短髪、あと五分かも」

当麻
「ちっきしょおぉぉ！！」

美琴
「当麻、それは行数稼ぎに見えるわ…」

呑気に言うインデックスに叫びを返す当麻、それに突っ込む美琴。
その隣を、バイクが走りぬけた。

孝
「当麻、美琴、走りじゃ間に合わねーぞ」

麗
「頑張ってね～」

バイク通学の孝と麗が走っていく。バイクなら余裕で間に合うだろう。

麗
「あ、そうそう当麻、美琴ちゃん。今日は遅刻したら罰則があるらしいわ。なんか今週だけみたいだけど」

それを最後に、孝と麗はバイクのエンジン音を響かせて走っていった。

当麻
「…罰則だと？」

美琴
「…何だかはわかんないけど…」

当麻

「あぁ…面倒なことには変わりない…」

当麻、美琴
「「…ヤバい！！」」

当麻と美琴は突っ走る。しかし…

バラライカ
「貴様等、五秒遅刻だぞ！！」

当麻
「大尉かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そう、校門にいたのは、『遊撃隊（ヴィソトニキ）』の担当先生、バラライカ大尉様である。

バラライカ
「たった五秒とはいえ、遅刻したのはいただけん。罰として、これから一週間毎日朝校門の掃除だ！！」

美琴
「了解～大尉（カピターン）」

バラライカ
「…よし。いい。行ってよし」

バラライカから解放された当麻、美琴は教室へと走る。

当麻
「インデックス。お前は…」

インデックス
「学食に行ってくるんだよ！！」

美琴
「一人で大丈夫なの？」

美琴は心配する。何と言ってもインデックスは子供なのだ。誰かがついておきたいが…。

『…ワタシガ、ツイテオクヨ』

美琴
「あ、ツカサちゃん」

現れたのは、いつもは購買部の前で客寄せをしているアンドロイド、『アンドロイドつかさ』だ。ちなみに外見は目が赤い以外は完璧に柊つかさ。作者の盟友、『ラムネ』さんが所属しているある組合から送られたアンドロイドだ。

当麻
「なら、頼んでいいか？」

ツカサ
『マカセテ。ワタシモ、ヒマダッタシネ』

そう言うので、当麻と美琴はツカサにインデックスを任せ、教室に向かい、扉を開けた。

入ってきた二人を認め、銀八が呆れたように話し出す。

銀八
「おいおいお前ら、遅刻だぞ。いくらお前らの夜が激しいからって…」

そこまで言った時、美琴が雷の槍で銀八をぶっ飛ばす。

美琴
「そういう関係じゃないわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

銀八
「ぎぃやぁぁぁぁぁぁぁ！？」

銀八は吹っ飛び、黒板に頭を突き刺した。

美琴
「はぁ、はぁ…あら？」

銀八に攻撃をかました美琴は、教卓に立っている五人の姿を認めた。
五人は美琴と銀八を見比べ、苦笑いをしている。

美琴
「あ、あれ？　だれこの人達…」

銀八
「よくぞ聞いた！！」

銀八が黒板から顔を引っ張り出す。

銀八
「こいつらは期間転校生だ。一定期間だけこのクラスに来て生活する。まぁ色々な所を学ぼうっていう理念を持った制度だ」

アーチャー
「その通りだ」

アーチャー先生が教室に入ってくる。説明のために来たらしい。

アーチャー
「期間は未定だが、それなりに長くなるらしい。さて、転校生達を待たせているぞ。はやく自己紹介をしたまえ」

「「「「「はい！！（ああ）（…コクリ）」」」」」

五人が五者五様の反応をしてうなずいた。そして、一人の快活そうな少女が先陣をきった。

ゆり
「ＳＳＳ学園から来ました、仲村ゆりです！！　よろしくお願いします！！」

銀八

”…『死んだ世界戦線』か”

続いて出てきたのは、一見粗暴そうな男だった。

カズマ
「スクライド学園から来た、蒼乃カズマだ！！」

銀時
”正体不明の能力、アルター能力を持った男、か…”

銀時は紹介と同時に書類を見て確認をしている。

「…シャルロット・エレーヌ・オルレアン。…タバサと呼んでくれたらいい」

続いて挨拶したのは眼鏡をかけた少女、タバサ。

銀八
”トリステイン魔法学院から来ている。魔法の使い手らしいが…なのは達みたいな魔法ではないのか？”

レナ

「雛見沢から来ました！！　竜宮レナです！！　気軽にレナって呼んでください！！」

続いては髪が長めの少女、竜宮レナ。原作時からかなり髪が伸び、大人びた容姿になっている。

銀八
”雛見沢から来ている。礼儀正しく、優しいいい女子生徒らしいが…この『ある性格に問題あり』ってなんだ？”

…それは間違いなく、『アレ』だろう。

銀八
”まぁいいか。さて、最後の奴だが…こいつは…”

実は銀八は、この最後の生徒に漠然とした違和感を持っていた。…何、と聞かれてもわからないが、漠然とした違和感である。その生徒とは…

零夜
「次元零夜です。よろしくお願いします」

この生徒、次元零夜である。

銀八
”見た目は悪くない。…てぇか、むしろ良いな。美男子って感じだ。うらやましいぞコノヤロー。…別に悪いようには見えないんだが…何だこの違和感は…”

アーチャー
「銀八。ボーっとするな。生徒が困っているぞ」

銀八
「あ？　あ、すまねぇなアーチャー。少し考え事を…」

アーチャー
「なに、構わん。ではな」

アーチャーは教室から出て行った。と思ったら戻ってきた。

アーチャー
「忘れていた。剣心、薫。今日の放課後に応接室に来い。お客さんだ」

剣心
「拙者にでござるか？」

薫
「私も？」

アーチャー
「あぁ。頼むな」

アーチャーは今度こそ出て行った。

銀八
「…んじゃーおめーらは適当に座ってくれ。授業始めるぞ授業ー」

転校生達が席につき、授業が始まる。

ナノハ
「先生」

と思った所でなのはが遮った。

銀八
「どした、なのは？」

ナノハ
「先生、違います。なのはじゃありません、ナノハです」

銀八
「あ？　ナノハ…？」

ナノハ
「はい！！　名前がナノハ・ヴィ・ブリタニアになりました！！」

ＡＬＬ
『はいいいいいいいいいいいいいいいいいい！？』

なのはの爆弾発言にクラス中が驚愕の叫びを上げる。

銀八
「結婚したのかお前ら！？」

こなた
「それどこのギャルゲー！？」

アル
「そんなに驚くことじゃ…このクラスで二例目だし」

アルの言うとおり、このクラスには剣心と薫という前例がいる。とはいえ…。

銀八
「あの父親と兄をどう説得した…？」

ルルーシュ
「父親はすぐ認めてくれたんですがね。兄の方がちょっと…なので、ちょっとギアスを使って…」

…恭弥、哀れ。

銀八
「はぁ…んで、ナノハって呼べばいいのか？」

なのは
「いえ、表記しにくいのでなのはでいいです」

かがみ
「なら言わなくても…」

ルルーシュ
「どうせいつかは言わなきゃならんからな。今の内に言っておこうとな」

ルルーシュとなのははは二人して頷く。

銀八
「…んで？　授業遮ったのはそれが理由か？」

なのは
「あ、違います。今日フェイトちゃんと桂くんはどうしたんですか？」

銀八
「ん？」

はやて
「二人とも今日おらんのんよ」

そう、なのはの隣の席と、はやての前の席。つまりフェイトと桂の席が、今日は空だった。

銀八

「いや、連絡は来てないが…あとで聞いておこう。まずは授業だ授業ー」

ハルヒ
「で、ここが学食よ」

ゆり
「へぇ～、すごいわね。ウチの学園よりも大きいわ」

カズマ
「何の料理があるんだ？」

時間が飛んで放課後。ハルヒ、孝、かがみ、長門、エド、ルキアは転校生の皆を連れ、学園の紹介をしていた。

カズマ
「結構色々あるな…」

タバサ
「…はしばみ草がある」

カズマとタバサは何やらお気に入りの料理を見つけたらしい。

ゆり
「…ねぇハルヒ、麻婆豆腐があるけど…どんなの？」

ハルヒ
「あぁ、それは止めといた方がいいわ…ラー油と唐辛子を百年間ぐらい煮込んで合体事故のあげくオレ外道マーボー今後トモヨロシクみたいな料理だから…」

レナ
「そんなの食べる人いるのかな、かな？」

レナの疑問にハルヒは深く頷いた。

ハルヒ
「いるわ。先生が一人。元シスターらしいんだけど…」

ゆり
「どんな人なのか見てみたいわ…」

はいてないあのシスターさんですね、わかります。

タバサ
「有希、有希」

長門
「…何？」

タバサ
「図書室、どこ？」

長門
「…こっち。小室君、行ってくる」

孝
「あぁ。…戻ってこいよ？」

長門
「…分かっている。タバサ、行こう」

タバサ
「…うん」

似たもの同士の二人は図書室に行ったようだ。

エド
「零夜、どうだよここは」

零夜
「よさそうな所だね。月並みなことしか言えないけど…」

レナ
「私もいい所だと思うかな、かな!!」

かがみ
「なんかまともな人が増えてくれて嬉しいわ…」

エド、零夜、レナ
”…苦労してるんだなぁ…”

エドと零夜とかがみとレナはいい仲になったようだ。

ハルヒ
「ゆり、私もゆりっぺって呼んでいいかしら?」

ルキア
「私も構わんか？」

ゆり
「構わないわ。他人行儀よりはよっぽどマシよ」

孝
「カズマ、みんなの名前覚えたか？」

カズマ
「あぁ。印象が深い奴の名前なら、心に刻んだぜ」

他の皆もいい仲になったようだ。

ルキア
「む…」

ルキアがケータイを取り出し、ハルヒに目線を向けた。ハルヒはその意を解し、頷く。

ルキア
「みんな、すまんが忘れ物をしてしまったようだ。教室に一度戻らないか？」

ハルヒ
「私はいいけど…みんなは？」

カズマ
「俺はいいぜ」

孝
「右に同じだ」

零夜
「さらに同じ」

かがみ
「いいわよ」

エド
「あぁ」

レナ
「みんなが行くなら、私も行こうかな！！」

ゆり
「私一人反対するわけないじゃない…」

どうやらみんな行くことにしたようだ。

それと同時に、長門とタバサが戻ってくる。…タバサはかなりの本を抱えていた。

タバサ
「ここ、面白い本ばかり」

どうやら図書室が気に入ったようだ。

ルキア
「では、戻るとしよう」

みんなで教室まで戻る間も談笑をする。カズマがルキアの名前を間違えて強烈な右ボディーを喰らったり、タバサが本を抱えながら歩くので零夜が少し持ってあげたりと、今日出会ったばかりなのにもう親友のような親密な関係が築かれていた。

教室の前まで来ると、ハルヒとルキアがニヤリと笑って先頭をゆりと零夜にゆずった。

ゆり
「どうしたのよ」

零夜
「なんだ？」

ハルヒ
「何だっていいじゃない。とりあえず入って入って」

ルキア
「そうだ。零夜、ドアを開けてくれ。ゆりも」

零夜
「え？　あ、あぁ…？」

未だに何か分からない二人だが、言われた通り教室のドアを開けると――

パパパパァーーーン！

ＡＬＬ女子

『ゆりっぺちゃん、カズマくん、タバサちゃん、レナちゃん、零夜くん、ようこそーーーー♪』

五人
『へ？』

クラッカーの音と、ハルヒたち以外の生徒たちが五人を出迎えた。

ハルヒ
「二人の歓迎会をやることになってね」

ルキア
「その間、二人を教室に近づけないように遠ざけていたのだ」

説明するハルヒとルキア。そう、ハルヒとルキア達は、ゆりや零夜達を教室に近づけないよう校内を案内していたのだ。

美琴
「さあさあ、主役は真ん中に来なさいよ！！」

当麻
「五人とも飲み物何か飲むか？」

零夜
「お、ああ。サイダーあるか？」

なのは
「何でも用意してあるよ！！」

ゆり
「わ～、ありがとうね。コーラある？」

カズマ
「俺にもコーラをくれ」

こなた
「瓶ので良ければあるよ～」

タバサ
「…紅茶、ある？」

アーチャー
「ふ。任せておけタバサ」

レナ

「は、はぅ～。みんな、ありがとうね！！」

はやて
「そ～んな気にすることないってレナちゃん」

リインフォース？
「そうなのです！！　遠慮はいらないですよ！！」

リインがふよふよと浮いてレナの前に出たとたん、レナの動きが止まった。そしていきなり恍惚そうな表情になる。

レナ
「は、は、は、はぅ～～～！！　かぁいいよ～～～！！」

リイン
「むぎゃ！？」

レナがリインに飛びつき、頬ずりをする。リインは苦しそうにわめいている。

はやて
「リイン！？　レナちゃんどないしたんや！？」

ハルヒ
「ま、まずいわ、レナは『かぁいい物』を見つけたら暴走するのよ！！」

山本
「何で知ってんだ、ハルヒ？」

孝
「さっき本を抱えてたタバサがかぁいかったらしくてな…『お持ち帰り』しそうになったんだ…」

神楽
「それ誘拐じゃないアルか！！」

麗
「本人がアレだからタチ悪いわね…」

突っ込む神楽達に構わず、レナはますます恍惚な表情になる。

レナ
「かぁいいかぁいい…お持ち帰りぃぃぃぃ！！」

アル
「だ、駄目だよレナ！！」

鎧のアルがレナを止めた。…その瞬間。

レナ
「お、おっきい鎧…かぁいいよーー！！」

ＡＬＬ
『何ィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！？』

全員が叫ぶ。だって鎧である。かぁいいって…。まぁ原作ではケンタ君人形や郵便ポストをかぁいいと言っていたレナだ。不思議じゃ…ないのか？

レナ
「かぁいいかぁいいよ～アルくーん！！」

零夜
「レナ、そろそろ止めろって！！」

零夜が止めるが、レナ、意に介さず。

アル
「ちょ、兄さん、ルルーシュ、一護、誰でもいいからなんとかしてー！！」

エド
「無理いうな！！　お前ならお持ち帰りされないから大人しく捕まってろ！！」

ルルーシュ
「…武運を祈る」

一護
「す、すまん、アル」

アル
「えぇぇー！？」

ＡＬＬ
『あはははは！！』

そんな光景を見て、クロス学園の放課後、夕焼けに笑い声が溶けていくのだった。

余談だが、この宴会があってから、クラスの団結がさらに深まったと、ここに記しておく。

…その頃。明るい教室とは裏腹に、暗い雰囲気が漂っている所があった。…万屋銀ちゃんと、学園の応接室だ。

万屋銀ちゃんでは一

銀時
「橙子の奴から依頼？」

式
「あぁ。坂田銀時。お前に頼みがあってきた」

辻斬りを追う両儀式が。そして…

エリオ
「こ、こんにちは、銀八先生」

キャロ
「お邪魔します」

銀時
「エリオにキャロ？　それにお前は…」

何やら頼みがあるらしいエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエ。さらに…

エリザベス
『頼みがあってきた！！』

銀時
「エリザベス！？」

エリザベスまでがやってきた。そして、学園の応接室では一

斗貴子
「久しぶり、剣心、薫」

カズキ
「なるほど、剣心さんか」

剣心
「カズキ!!　それに斗貴子殿も!!」

薫
「久しぶり!!　どうしたのよいきなり」

斗貴子
「少し、頼みがあってね」

こちらにも辻斬りを追う津村斗貴子、武藤カズキがやってきていた。

―――――――――――――――――――――

…歯車が噛み合った。今まで離れていた『辻斬り』と『クロス学園Z組』という歯車が、がっちりと。そして、もういくつか。噛み合う歯車はある。それが噛み合うのは、まだ少し先の話…。

銀八
「教えて」

ＡＬＬ
『銀八先生！！』

銀八
「始まりました銀八先生。前置きめんでぇからとっとといくぞ。今回のアシスタントは、期間限定生徒、『銃王　海』さんのリクエストにより出演、ゆりっぺこと、仲村ゆりだ！！」

ゆり
「はい。今回のアシスタント、仲村ゆりよ！！　今回から期間限定のキャラがアシスタントをするわ！！」

銀八
「んじゃ早速ゴーだゆりっぺ」

ゆり
「オス！！　ペンネーム『章』さんからのお便りです。『クロス学園の生徒がガチでゴジラと戦った場合、どちらが勝つと思います？　予想としては、相討ちの引き分けなんですが・・・』だそうです」

銀八
「相討ちが一番妥当ですね。というか、放射熱戦一発でほぼダウンの可能性がありますので、時と場合によります。というわけで章さ

ん、廊下に立ってなさい」

ゆり
「では次の質問。ペンネーム『三国同盟』さんから。『今回は紫さんに質問。幻想郷から誰かを留学させる予定などはないのですか？学園のメンバーなら、妖怪だろうがなんだろうが受け入れてくれると思いますよ』」

紫
「少しは考えてはいるわ。だけど…みんなめんどくさがって出てこないのよねー。魔里沙とか乗り気みたいなんだけど…現状ではまだまだって所ね」

銀八
「まぁ可能性はあるだろうな。では『三国同盟』さんはもし出るとしたら誰か考えてみてください」

ゆり
「最後の質問よ。ペンネーム『ラムネ』さんから。『Q：クロス学院の図書室ってどんな感じですか？』　今回、タバサが言ってたわよね？」

銀八
「あぁ。こういうのは長門、頼む」

長門
「了解した。図書室は学園の地下に広がる巨大な空間で、まさしく迷路。古今東西あらゆる書物がそろっている。その大きさはネギまの『図書館島』に匹敵する。また、漫画や雑誌なども存在し、実は同人誌までである。このサイトの小説も実はあるのではないかともっぱらの噂」

銀八
「タバサが気に入るのもうなずけるな。さて、『ラムネ』さんは廊下に立ってなさい！！　今日はここまでだ！！」

ゆり
「次回は読書好きな雪風、タバサがアシスタントでくるわ！！　それでは！！」

銀八ａｎｄゆり
「「次回もお楽しみに～！！」」

第十二話『新章に入ったら仲間はほぼ確実に増えるよね』（後書き）

次回、シリアスに突入…乞うご期待！！

第十三話『長編ってのは急展開が普通』（前書き）

桂）……これまでか。敵の手にかかるより……最後は武士らしく潔く腹を切ろう。

銀時）バカ言ってんじゃねーよ。立て。美しく最後を飾りつける暇があるなら……最後まで美しく生きようじゃねーか。

（その男銀色の髪に血を浴び）

銀時）行くぜ　ヅラ。

桂）ヅラじゃない　桂だ。

（戦場を駆る姿は
まさしく夜叉）

―桂小太郎ａｎｄ坂田銀時

かっこいいーっ！！―フェイト・Ｔ・ハラオウン

ナレーションまで再現したわね……一宮本　麗

第十三話『長編ってのは急展開が普通』

「分かっているね……フェイト・テスタロッサ・ハラオウン……」

フェイト
「分かってる……今晩だね」

ここはある路地裏。そこに、件のフェイト・テスタロッサ・ハラオウンの姿があった。

相手はあの眼鏡の男ではなく、別の男だった。男の顔は陰になってよく見えない。

「狙い通り……奴らの意識は辻斬りに向いた。目的を果たすのは今晩としよう」

フェイト
「……」

フェイトは口ごもる。何か思う所でもあるのだろうか。

フェイト

「ちゃんと……約束守ってくれるんだよね？　みんなのことと……それから……」

「心外だね。これでも約束は守る方なのだが」

男は心底心外だという声を出したが、フェイトはそれに反論した。

フェイト
「信じられる訳がない……だって……あなたのことは……」

「彼から聞いた、かい？　まぁそうだろうね。彼は私をよく知っている。私を倒した……いや、封印したのも彼と……彼の師にあたる人物だ」

……どうやら、この男はフェイトの友人の誰かと関わりのあるようだ。

フェイト
「……あなたがどうやって抜け出してきたのかは知らない……。……だけど、私にも目的がある。その目的を達するためなら……」

フェイトは一度言葉を切り、目を瞑る。もう一度目を開いた時には、彼女の目から……光は失われていた。

フェイト
「私はもう……何も、いらない……」

銀時
「ヅラとフェイトが行方不明！？」

一方、万屋銀ちゃんでは、銀時と式がエリオとキャロ、エリザベスから話を聞いていた。

エリオ
「はい……二日前から家に帰ってこないんです」

キャロ
「連絡もありません……」

フェイトは昔色々あったらしく、母親と姉を失っているらしい。
現在はこのクロス学園初等部の二人、エリオ・モンディアル。そしてキャロ・ル・ルシエと共にマンションで生活しているらしい。

エリザベス

『こっちもそうだ。二日前から帰らない』

桂も二日前から帰っていないらしい。

式
「銀時。これは……」

銀時
「あぁ。何か辻斬りと関係があるかも、だな」

式
「どうする？　俺は辻斬りを追う姿勢に変わりはないが……」

辻斬りの捜索、フェイト、桂の捜索。やるべき事は３つ。

銀時
「……神楽はまだ帰ってこないしな……アイツはどこだ？」

銀時がそう呟いた途端、扉が開かれた。

神楽
「銀ちゃん、ただいまアル」

いたのは神楽。そして……

バゼット
「ただいま帰りました、銀時」

ランサー
「買い出し終わりだ。……あ？　式じゃねぇか」

神楽を除くと万屋銀ちゃん唯一の従業員のバゼット・フラガ・マクレミッツと彼女のサーヴァント、ランサーだった。

銀時
「ちょうどいい。神楽、バゼット、ランサー。仕事だ」

銀時はかいつまんで三人に説明する。

バゼット
「なかなか骨がありそうな仕事ですね」

ランサー
「あぁ。面白そうだな」

好戦的なバゼット、ランサーは辻斬りと聞いて闘志をたぎらせる。

神楽
「銀ちゃん、クラスのみんなにも協力を要請した方がいいんじゃないアルか？」

神楽に言われ、銀時は考える。

銀時
「確かにあいつらは強いが……あまり多く動いてもダメだろ。来るべき時まであいつらに言うのは待つべきだ」

神楽
「……そうネ。危険そうなこともあるアル」

二人の間でクラスのみんなには言わない、という方針で固まった時
……

エド
「もう聞いちまったぜ」

こなた
「だね～」

銀時
「ぬぁ!?　お前ら!?」

扉から、エド、こなた、かがみ、唯、リクオ、ルキア、ハルヒが現れた。

唯
「事情は全てドアの向こうで聞かせてもらった!!」

かがみ
「サスペンス劇場か!?」

ハルヒ
「もう聞いちゃったから、関わらせてもらうわよ。答えは聞いてないわ」

銀時
「だろうな……ならしょうがねぇか。手分けして探そう」

銀時が宣言し、皆が3チームに適当に分かれる。

式
「相手はかなりの腕を持つ辻斬りだ。お前らも遭遇するかもしれないから、十分注意しろ。相手の力量を見極めることを忘れるな」

ルキア
「うむ。気をつけるとしよう」

リクオ
「死ぬわけには行かないからな」

銀時
「よし……行くか。定期的に連絡をしろよ」

ＡＬＬ
『了解』

皆はそれぞれの目的のために散った。

一方、学園の応接室では……

剣心
「辻斬り……でござるか」

薫
「噂は確かに聞いてたけど……」

斗貴子
「その捜索を手伝ってもらいたいんだ」

斗貴子が剣心と薫になぜここに来たかの説明をしていた。

剣心
「しかし、なぜ斗貴子殿とカズキが？」

カズキ
「斎藤さんに頼まれたんだ。あの人は今別の事件にかかりきりらしいから、手伝ってくれって」

二人は斎藤に言われ、ここにきたらしい。

剣心
「斎藤の頼み、しかも来たのが斗貴子殿とカズキ。受けない訳ない

でござる」

薫
「協力させてもらうわ」

斗貴子
「うむ、ありがたい」

剣心と斗貴子はがっちりと握手をかわした。

カズキ
「にしても剣心さんと斗貴子さんよく似てるよな……」

剣心、斗貴子
「「それは言わない約束でござる（だ）」」

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生!!」

銀八
「はい、はじまりました『教えて!!　銀八先生』。今回のアシスタントは『リンダマン』さんの希望で出演、本好きな雪風、タバサだ」

タバサ
「何か面白い本があったら教えてほしい」

銀八
「お前あの図書館から何冊借りた?」

タバサ
「２０冊。あそこは桃源郷」

タバサはうっとりする。

銀八
「……タバサ、質問ゴー、だ」

タバサ
「そうだった。では最初……『月光閃火』さんから。『1．Z組の皆（特に女性陣）に質問だ。転校してきた人達の第1印象を教えてくれ。2．作者に質問だ。今回の長編なんだが、ズバリ！予定として何話ぐらい続けるんだ？予告での壮大さからして結構長くなるのか？』」

銀八
「んじゃ一つ目はなのは、こなた、ハルヒ、美琴、唯、頼む。印象が深い奴の事を言ってくれ」

なのは
「うん。ゆりちゃんとは仲良くなれそうだったよ。カズマ君は私の声聞いて驚いてたよ。タバサちゃんは……有希ちゃんに似てたね」

こなた
「レナやゆりっぺは快活そうで気があうかなって思ったかな。零夜君はなんだかミステリアスだったよ」

ハルヒ

「みんな『謎の集団転校生』って感じがしたわ！！」

美琴
「あんたにとっちゃみんなそうじゃない……でも確かに、零夜君は印象強かったわね。あと、タバサはなんだか私の対極みたいな感じがしたわね。仲良くなれそうだったけど」

唯
「またにぎやかになって楽しそうだなって思ったよ！！」

銀八
「はい、答えになったかわかりませんが、そうらしい。んで、２つ目は……」

作者
「かなりかかる可能性もありますが、長くてもあと十話ほどかと」

銀八
「というわけで、月光閃火さんは廊下に立ってろ！！」

タバサ
「次。『ラムネ』さんから。『Ｑ：クロス学院の地下って危険だったりしませんよね？』」

銀八
「なんでこんな質問を？」

タバサ
「今、図書館にいるらしい」

銀八
「何でだ……長門、どうなんだ？」

長門
「危険。罠も多いが、何よりバーサーカーがいる」

銀八
「は！？」

長門
「Ｆａｔｅの第五次バーサーカー、ヘラクレスがいる。イリヤが初等部にいるから、イリヤが登校している間はバーサーカーが図書館を守ってくれている。……バーサーカーだから、容赦はない」

タバサ
「……あぁ、あの人」

長門
「学園の人ならイリヤか私がいえば何とかなるが、他の人なら……」

銀八
「……どうなる」

長門
「……」

目を伏せる長門。

銀八
「……ラムネさんはとっとと逃げろォォォォォ！！」

タバサ
「……では次。『銃王　海』さんから。『質問一、このメンバー上条当麻の場合、テラフレアを連発できるバハムートに勝てる気はしますか？　二、このメンバー達はポケモンは好きですか？』」

銀八
「俺達が接近戦を担当して」

なのは
「遠距離から私が砲撃」

美琴
「私も超電磁砲でぶち抜いて」

はやて
「私が広域魔法かましたら……」

ＡＬＬ
『勝てるくね？』

銀八
「２つ目だが、そりゃ好きだろうな。ポケモンは国民的人気ゲームだ。ただ作者が『ブラック・ホワイト』は知らないらしいから出るとしてもダイパまでだな。では『銃王　海』さん、廊下に立ってろ！！」

タバサ
「次が最後。『エターナル』さんから。『ｒｉｎｇさんに質問。平成仮面ライダーをクロス学園に留学させるなら誰にしますか？』」

作者
「龍騎です。てか、それしか知りませんね。……関係ないですが、

Ｆａｔｅと龍騎って似てますよね。最後に生き残った者が願いを叶える……」

銀八
「……それでは『エターナル』さんは小説頑張れ！！」

タバサ
「次回は……式がアシスタントで来るらしい。それでは……」

銀八、タバサ
「次回もお楽しみに～」

第十三話『長編ってのは急展開が普通』（後書き）

とうとう受験生になってしまいました。更新が大幅に遅れることになると思いますが、ご了承ください。

第十四話『決別の言葉ほど強い言葉はない』（前書き）

さて、今回は前書きでちょいとしたアンケートをしたいと思います。

クロス学園では現在紅桜風の長編シリアスが展開されておりますが……このシリアスが終わると同時に……Z組に新メンバーが加わります！！

候補がいくつかありまして、どれを出すか、です。候補は次のアニメでございます。

なお、実はこれによって次の長編シリアスのストーリーが決まります！！　心してかかれよ！！

候補？、真・恋姫†無双

候補？、恋姫です。キャラかわいいなオイ（笑）

長編は……バトル物になります。個人的には本命な気がします。

候補？、ひぐらし

候補？はひぐらし。レナがレギュラー化か！？　長編はダークになります。恋姫に続く対抗馬か。

候補？、イナズマイレブン

候補？はイナズマイレブン。長編はバトル。恋姫とは違った方向ですが。

……と、こんな感じです。期間は五月十日までです！！

桃香
「私達に清き一票をお願いします！！」

梨花
「僕達が勝つのですよ～♪」

円堂
「俺達に一票！！　入れてくれよなっ！！」

投票待ってます！！

第十四話『決別の言葉ほど強い言葉はない』

――ヴラ捜索グループside

ヴラじゃない桂だ、と聞こえてきそうだが、聞こえない。それはそうだ、そのヴラがいないのだから。

神楽
「いないと意外と寂しいモンアルな」

銀時
「いたらいたでうるせえがな」

エド
「まぁ否定はしないがな……今はヴラを探すのが先決だ」

ヴラじゃない桂だ。

銀時
「といってもヴラの手がかりもなんも無いしな……」

だからヅラじゃない桂だァァァ！！

かがみ
「うっさいわ！！」

ナレーションへもしっかり突っ込むかがみ様。どうもごくろうさまです。

ルキア
「手がかりが無いなら手がかりを見つければいい」

神楽
「聞き込みアルな？　ルッキー」

ルキア
「あぁ。……そしてルッキーはやめろ」

さりげなく突っ込むルキア。

銀時
「んで、来たのがここか」

ルキア
「あぁ。手がかりならとかならこいつらかなと思ってな」

ルキアはそう言いながら扉を見る。彼らの前にあったのは、『生徒会室』であった。

ルキア
「黒神！！　いるだろう？」

ルキアが声をかける。すると中から……

めだか
「朽木同級生か。何用だ？」

クロス学園生徒会長、黒神めだかが現れた。Z組メンバーではないが、ルキア達とは仲が良い。そして、もう一人……

球磨川
『あれー、ルキアちゃんじゃん。久しぶりー』

ルキア
「相変わらずだな、球磨川」

副会長、球磨川禊もやってくる。ちなみに、この小説での彼は『大嘘憑き（オールフィクション）』と『却本作り（ブックメーカー）』の二人の過負荷を使いこなす。

銀時
「実は願いがあってきたんだが……」

球磨川
『あー、これ絡み？』

球磨川は手に持っていた紙をひらひらさせる。恐らくは目安箱に入っていた投書だろう。

球磨川
『最近辻斬りが出て恐ろしくてたまりません。何か対策をお願いします……といってもね、なるべく一人にならないようにとか、早く帰れとかしか言いようないんだけどね』

めだか
「しかし対策をたてねばならんことも事実だな。それで、坂田先生、この案件絡みなのか？」

銀時
「あー、それもあるんだが……」

銀時は手短に桂とフェイトの事を説明する。

球磨川
『なーるほどねー。うん。確かに辻斬り絡みかもしれないね』

めだか
「桂同級生とテスタロッサ同級生のことなら協力せずにはおれんな。いいだろう。まだ色々片付けねばならん案件もあるが……平行して情報を集めておこう」

神楽
「感謝するネ、めだっち、球磨川」

生徒会の協力を取り付けた銀時達は、生徒会室から出る。

エド
「次はどうする？」

かがみ
「また探しに出るしかないわね……にしても」

銀時
「どうした？」

かがみは窓から空を睨む。先ほどまで晴天だった空は一一

エド
「いきなり雲ってきたな」

ルキア
「風も出てきた。……崩れるか？」

銀時
「……暗いな。まだ夕方なんだが……」

風雲急を告げるがごとく、漆黒へと染まっていった。

かがみ
”……今日は日が暮れるのが、早そうね……”

唯
「みんな～差し入れ買ってきたよ～」

リクオ
「あ、すまない」

既に日が暮れた。ここは路地裏。式が率いる辻斬り探索チーム……リクオ、唯、こなた、エリザベスは辻斬りをいまだに探索していた。

唯
「辻斬り来るかな？」

リクオ
「わからないが……辻斬りは一目のつかない夜に、路地裏でやるのがセオリー。この辻斬りもそれは同じだ」

式
「起こっているのはこの付近。しかも最近は毎日のペース。……来る可能性は高いだろう」

こなた
「うんうん。全くだね」

皆思い思いに差し入れをほおばる。唯は焼おにぎり、リクオはカレーパン、式はお茶を飲み、こなたはチョココロネをかじる。

エリザベス
『いつ現れるか分からん。今の内に体力を温存しておかんとな』

一同
『あぁ（うん）（了解）』

エリザベスのボードに相打ちし、皆は空模様を見る。

こなた
「そろそろ崩れそうだねぇ」

リクオ
「夕方からいつ降るかの状態だったんだが……意外と保っているな」

唯
「だね。あ、私傘ないや……」

そこまでしゃべった時、五人の後ろからおじさんが声をかけた。

おじさん
「おいおい君たち、こんな時間まで何してんだい」

リクオ
「あ、いえ、少し用事がありまして……」

おじさん
「早く帰ったほうがいいぞ。なんせ最近この辺りには……」

そこまでしゃべった時、おじさんの顔が苦悶に歪み、背中から鮮血がほとばしった。

女
「辻斬りが出るから危ないぞ」

苦悶に歪んだ表情のまま、おじさんは倒れていく。

唯
「お、おじさん……モブキャラのおじさーん！！」

リクオ

「いや、ちょっと待て」

唯の悲痛な叫び……いや、ボケにたまらず突っ込むリクオ。

女
「やっと現れたか……『クロス学園Z組メンバー』！！」

ＡＬＬ
『ッ！？』

皆は一様に驚いた。この辻斬りは、はなっからZ組メンバーを狙っていたのか！？

女
「お前らをおびき寄せるために……あの男を斬ったのだがな」

リクオ
「何……？」

エリザベス
『まさか、貴様……』

黒き女はニヤリと笑い、自らの鎧の中に手を入れ、あるものを出した。それは……血に濡れた、日本刀だった。

こなた
「刀……？」

こなたは疑問符を浮かべたが、その刀の持ち主を知るエリザベスにとっては、最高の認識材料だった。

エリザベス
『それは桂さんのッ！！』

唯
「ええっ！？」

女
「桂小太郎……別段、大したことはなかったな」

エリザベス、唯の叫びを聞き、女は愉悦の笑みを漏らす。

エリザベス
『貴様ァァァァァァァァ！！』

エリザベスはボードで殴りかかろうとする。……しかし、それより先に、斬り込んだ者がいた。

女
「むっ！！」

女の剣とナイフがぶつかり合い、火花が散る。そう、斬り込んだのは……

式
「……ち」

両儀式であった。

女
「意外だな。あんたは冷静な人物かと思っていたが」

式
「……ヅラの事は関係ないさ。ただ……」

式は飛び退き、目を上げる。その目に映るは、万物の死――直死の魔眼。式はナイフを構える。

式

「……少々ムカついた。それだけだ」

一方そのころ、フェイトを捜索しているハルヒ、バゼット、ランサー、エリオ、キャロは『海列車』の駅にいた。こちらもヅラ捜索チームと同じく、満足な結果は得られていなかった。風も強まり、天気が荒れる。

ハルヒ

「だいぶ荒れてきたわね……」

ランサー

「しかし『海列車』は運行中だ」

空模様を見るハルヒに、海列車の時刻表を見るランサー。海列車は、このクロス学園がある大陸から海を渡り、別の島や、大陸に行ける列車である。

ランサー

「昼の便と……夜にもう一本か。この悪天候の中を……『N・B・T』行き……午後１１時。相変わらずすげぇな海列車は……」

キャロ
「フェイトさん……まさか海列車に乗っちゃったんでしょうか……」

キャロは心配そうにランサーにならんで時刻表を見る。

バゼット
「もしも乗っていたら厄介さは最悪のレベルですね。学園付近だけでも広すぎて手がおえないのに……」

バゼットも深刻そうに言う。

エリオ
「……やっぱり、僕達に何か粗相があったんじゃあ……」

キャロ
「うぅ……」

ハルヒ
「そんな訳無いでしょ。心配性よ二人とも」

縮こまる二人をハルヒは激励する。いつまでもここにいてもしょ

うがないので、五人は駅を離れ、川に出た。

ランサー
「お～い、フェイト～」

エリオ
「フェイトさーん！！」

ランサーやエリオが呼びかけながら先を進む。その後ろを歩いていたキャロは、ふと視線を感じ、川向こうに視線を向けた。

――そこには――

キャロ
「あ……」

ハルヒ
「キャロ？　……あ……」

――キャロが会うことを願っていた――

バゼット

「どうしました、キャ……」

ランサー
「おい、お前ら……な!?」

エリオ
「フェ……!!」

ＡＬＬ
『フェイト（さん）!?』

――フェイト・Ｔ・ハラオウンが、立っていた――

ランサー
「お前どこいたんだ!?　探したんだぞ!!」

バゼット
「みんな心配していますよ!!」

ランサーとバゼットが顔に喜色を溢れさせ、声をかける。

ハルヒ

「とりあえず学園に戻りましょう！！　こっちはこっちで辻斬りとかヅラがいなくなったりしたんだから！！」

エリオ
「今、そっちに行きます！！」

エリオが駆け出す……が、それをフェイトは手で制した。

フェイト
「……いいえ……いいのよ、そこにいて……」

キャロ
「……え？」

フェイトは……その、何も映っていないかのような目で、ハルヒ達五人を見た。

フェイト
「――私はもう……あなた達の所へは帰らない……」

ＡＬＬ
『ッ！？』

皆が息を呑む。

フェイト
「ここで、お別れよ……」

キャロ
「フェイト、さん……？」

ランサー
「お、お前何言い出すんだフェイト！？」

ランサーがフェイトに声をかけると、フェイトはランサーをその目に捉えた。……その目は……。

ランサー
”ウッ！？　な、なんだあの目は……ひ、光も何も、映ってねぇじゃねーか！？”

歴戦の英霊、クー・フーリンである彼さえもビビらせる目であった。

フェイト

「……私にはあなた達も知らない『闇』がある……『闇』はいずれ……あなた達を滅ぼす！！」

バゼット
「クッ……」

ハルヒ
”ほ、本当にフェイト！？”

あまりのフェイトの気迫に、バゼット、ハルヒでさえ戦慄を覚えた。

フェイト
「現に……この辻斬り事件は、私『達』が起こしたもの……」

エリオ
「な、なぜそんな……！？」

フェイト
「なぜそうするのかも」

エリオの言葉が鋭く遮られる。

フェイト
「あなた達が知る必要のない事よ」

いたたまれなくなって、キャロが叫ぶ。

キャロ
「フェイトさんっ！！　一緒に帰りましょうっ！！」

しかし、その叫びも届かず……

フェイト
「……今日限りでもう……二度とあなた達に会う事はない。みんなにも……よろしく伝えてね」

呆然とする五人の前で、フェイトは踵を返し……最後の言葉が、呟かれる。

フェイト
『こんな私に……今まで、良くしてくれてありがとう』

――さようなら――

その言葉と共に、フェイトは去っていく。

ハルヒ
「ま、待ちなさいよ、こんなの……納得すると思ってんの!?　来なさいっ!!」

ハルヒが無数の兵器を展開し、剣群を打ち出そうとする。しかし……そんなハルヒを、近場の屋根の上から、機銃掃射が襲った。

ハルヒ
「なっ!?」

ランサー
「下がってろ、ハルヒ!!」

バゼット
「エリオとキャロもです!!」

ランサーが前に飛び出し、ゲイボルグを神速で振るい、機銃掃射を防ぐ。バゼットはエリオとキャロを抱きかかえ、弾幕から逃れる。

エリオ

「フェ、フェイトさん……」

キャロ
「フェイトさん……」

そんな状況の中でも、エリオとキャロは去っていくフェイトを見つめる。そして、二人は叫んだ。

エリオａｎｄキャロ
『フェイトさんっ！！』

しかし、その声も虚しく、フェイトの姿は、夜の闇に消えたのだった。

ランサー
「見失ったか……」

ハルヒ
「……そうね」

何者かの機銃掃射を受け、フェイトを逃がしてしまったハルヒ達は、その現場の川で小休止をとっていた。エリオとキャロは放心状態である。

ハルヒ
”無理もない、か……”

ハルヒは憔悴しきった二人を見て思う。

バゼット
「駄目です。機銃掃射していた建物の屋根に行ってみましたが……跡も何もありません」

探索に行ったバゼットが戻ってくる。手がかりなし、のようだ。

ハルヒ
「……バゼットさん、ランサー」

バゼット
「はい？」

ランサー
「あぁ？」

いきなり座りこんでいるハルヒが声を発し、立ち上がった。

ハルヒ
「……エリオとキャロを連れて銀さん達と合流して、今あった事全部話してきて……一言一句漏らさず」

バゼット
「ハルヒはどうするのですか？」

立ち上がったハルヒは、その質問に顔を上げた。その目は、決意をおびていた。

ハルヒ
「少し……別行動を取るわ。心配はいらないわ。無茶はしないから」

ランサー
「……あぁ、分かった」

ランサーが頷くと、ハルヒも頷きを返し、走り去った。

バゼット

”ハルヒ……何を考えているんです？”

バゼットにはそう思うことしかできなかった。

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！！』

銀八
「よォーし。銀八先生はじまるぜ。本編は色々大変だが、銀八先生は動じずにマイペースを貫き通すぜ。今回のアシスタントは、『三国同盟』さんの要望で出演、両儀式だ」

式
「面倒だが……まぁやるか」

銀八
「本編でもかなりのかっこよさを見せているな」

式
「まぁな。では最初の質問だ。ペンネーム『エターナル』さんからだ。『キャスター「とりあえず質問よ！そっちのアーチャーとランサー、こっちのアーチャーとランサーのことをどう思う？」』」

アーチャー
「とっとと答えを得ろと伝えろ」

ランサー
「君主の妻を寝取った男にサーヴァントらしくねぇって言われてもねぇ」

挑戦的な発言をする二人。

銀八
「では、『エターナル』さんは黒美琴をどうにかしてください」

黒美琴
「呼んだかしら？」

銀八
「いきなり出てくんな！！　恐いわ！！」

黒美琴
「なら帰るわ。興味無いし」

（黒美琴についてはエターナルさんの小説『銀魂ｘＦＡＴＥｘリリカルなのはｘ禁書目録～とある侍とサーヴァントと魔法少女～』参照）

式
「ぱっと来てぱっと帰ったな……では次だ……って最後か。ペンネーム『ラムネ』さんからだ。『Ｑ：出られません、どうしましょう。』」

銀八
「……確か前回、バーサーカーに追われてたな。学園の地下の図書館で」

式
「よく逃げれたな……」

銀八
「……さて、長門、どうするんだ？」

長門

「迷った時用に、図書館のどこにも誘導スイッチがある。それを押せば光が誘導してくれる」

銀八
「なら楽勝だな」

長門
「ただし、バーサーカーにも光で見つかる」

式
「……結局バーサーカーに追われるのか」

銀八
「……『ラムネ』さんはとりあえず周りを見てからスイッチを押してください。今回はここまでだな」

式
「次回は……カズマが来るぞ。では……」

銀八ａｎｄ式
「次回もお楽しみに～」

第十四話『決別の言葉ほど強い言葉はない』（後書き）

さて、ここで読者の皆様にクイズです！！

今回、銀魂紅桜編以外のベースが、ようやく出てきました。そのベースは、何のマンガで、何のエピソード？

答えは感想にてお願いします！！

第十五話『身近な奴は意外とすごかったりする』（前書き）

作者
「うおおおおおお！！」

銀時
「どうした作者！？」

作者
「十万アクセスがぁぁぁぁあ……キタァァァァ！！」

なのは
「超えたの！？」

作者
「おう！！　これも今読んで下さっている読者の皆様のおかげです！！」

フェイト
「本当にありがとうございます！！」

作者
「そして……企画だ！！」

十万アクセス突破記念、クロス学園Z組、キャラ人気投票!!

作者
「を開催します!!　では、ルール説明です」

ルール
1：今までクロス学園に登場したキャラが対象。
2：読者の皆様は『一位』、『二位』、『三位』、『四位』、『五位』を決めてそれぞれに一人ずつ、投票してください。票の内訳は……

一位：10ポイント
二位：7ポイント
三位：5ポイント
四位：3ポイント
五位：1ポイント

になります。

3：追加投票があります。あんまり票は多く集まらないと思うので、何話かたったらまた投票の合図をします。つまり同じ人でも複数回投票が可能な訳です。

4：投票は感想、またはメッセージでお願いします。

作者
「他に聞きたい事があればどんどん聞いてください！！　投票期間は……作者が票が集まったな、と思った時です！！　それでは投票お願いします！！」

第十五話『身近な奴は意外とすごかったりする』

式
「ぐああっ！！」

唯
「あううっ！！」

式と唯が吹き飛ばされ、地面に倒れ込む。何とか立ち上がるが、もう足元すらおぼつかない。

女
「どうした？　足掻いてみせろ」

相対している辻斬りの女たるや……未だに一太刀も攻撃を受けていなかった。まさに圧倒的。五人がかりでも、意味が無い。

式
”くっ……何故だ、何故……”

しかしそれより先に、式には信じられない事があった。それは……

式

”なぜ……見えない！？”

そう。直死の魔眼で見えるはずの死が……どういう訳か、女には見えないのである。それだけではない。

唯

「ライトハンド・ソナー！！」

唯が魔力音波を響かせる。しかし女には……

女

「効かない、そう言ったはずだが」

通用しないッ！！

唯

「な、何でっ！？」

女

「雑だな……しかも軽い！！」

女が漆黒の大剣を唯に振り下ろす。

唯
「リフレクト・ソナー！！」

大剣が音波の防壁に止められ……

女
「この剣は幾多の城壁を破った竜の息吹。貴様の手に負えるモノではない！！」

止められない！！　あっさり防壁は破られ、唯に刃が迫る。

唯
「ううっ……あああっ！！」

唯はなんとかギー太で止めるが、あっさり吹き飛ばされ、川に突き落とされる。

こなた
「ゆいにゃんっ！！」

女
「戦場で他人の心配とは……余裕だな」

その声を聞き、こなたは身構え、バックステップで距離をとる。
しかしそれも構わず、女は大剣を振り上げた。

こなた
”ッ！？　この距離で大剣が届く訳が……”

女
「認識不足だ。甘いな……風よ、吼え上がれ！！」

女の大剣が、凄まじいまでの黒き輝きを放つ。

女
「卑王鉄槌（ヴォーティガーン）！！」

大剣が黒き輝きを纏い、さらに巨大な剣となる。その大剣が、ためらいも無しにこなたに振り下ろされる！！

こなた

「ッ！！　蒼炎丸ッ！！」

蒼き炎が黒き輝きとぶつかり合う。

こなた
「な、に……このパワー！！」

リクオ
「助太刀だ！！」

妖怪状態になったリクオが祢々切丸を構え、こなたに助太刀する。
刀と薙刀が、黒き大剣を止めようと拮抗する。

女
「……踏み砕く！！」

しかし、女はさらに大剣に力をこめる。黒き輝きが、蒼き炎を徐々に押し込み……そして。

――ピシッ――

リクオ

「ッ！？」

こなた
「そんなっ！？」

ありえない音と共に、祢々切丸、蒼炎丸にひびが入っていく。

女
「ふ……」

女が口角をつり上げる。目は仮面に隠れて見えないが、恐らくは愉悦に満ちた目をしているだろう。

女
「終わりだ」

リクオ
「ぐああっ！！」

こなた
「ああっ！！」

女は大剣にさらに力を込め、リクオとこなたを吹き飛ばす。二人はそろって近くの空き家に激突。空き家は砂塵を上げて崩れ、がれきが二人を飲み込んだ。

女
「三人……さて、あとは貴様等だけだ」

大剣が禍々しい光を帯び、式、エリザベスに向けられる。

式
”く……あの剣か！？　唯の防壁をあっさり破る剣……能力無効の力を持っていると考えられる……だから俺の目でも見えないのか？”

式は女に対して能力が効かないのは、あの大剣の仕業だと解釈した。大剣は唯の防壁をあっさり破り、先ほどはこなたの炎を一振りでかき消していた。そう考えるのが自然だろう。

式
”ならば……信じられるのは己の純粋な剣技のみ！！”

式は自己暗示に入る。自らの体を戦闘用に作り替えることで……式の戦闘能力は格段に跳ね上がるのである。

式は今まで使っていなかった日本刀――古刀・九字兼定の鞘を飛ばし、構える。

女も先ほどからいきなり変化した式の雰囲気を感じ、眉をひそめた。

女
「なるほど……面白い。かかってこい、礼儀を教えてやる、両儀式」

白刃が煌めいた。

銀時
「本当に言ったのか!?　フェイトがそんなこと!?」

銀時の怒声が、夜の街に響く。彼が怒声を発する原因となった女――バゼット・フラガ・マクレミッツは深く頷いた。

バゼット
「えぇ。私達が見聞きしたことは今のが全てです」

ハルヒを除いたフェイト探索チームは、ハルヒの言うとおりに銀時達ヅラ捜索チームと合流していた。

かがみ
「何考えてんのよ、フェイトちゃん……」

かがみが呟くが、誰もそれには答えない。――否、答えられない。

銀時
「『今日限りでもう二度とあなた達に会う事はない』か……」

ランサー
「あぁ。そう言ってた」

銀時
「言い換えると……『今日中にもう一度大きい出来事を起こす』と言っているようにも聞こえる」

銀時の呟きに皆がハッとする。流石は主人公、こういう時は実に冴えている。

エド
「辻斬りはフェイト達の仕業なんだろ?」

エドはエリオとキャロを横目で見ながら聞く。二人は未だに放心状態に近かった。

バゼット
「そう言っていましたが……」

エリオ
「そ、その辻斬り達に脅されてるんでしょうか、フェイトさんは！？」

ルキア
「その考えが『吉』」

エリオの言葉にルキアが返す。

ルキア
「反対にフェイトがそいつらと本当の仲間だっていうのが『凶』だ」

ルキアの言葉に皆はまた沈黙する。

エド

「さて……俺達はどうする？」

銀時
「んなモン決まってんだろ」

銀時が立ち上がった。腰の木刀を持つ手に力が入っている。

銀時
「フェイトをとっつかまえて、一発叩いてやんねーとな」

バゼット
「酔狂な台詞ですね、銀時。あなたらしくもない」

銀時の言葉にバゼットは軽く笑って立ち上がる。それを見て、銀時もふっと笑う。

銀時
「あいにく好きな物は甘い物と酔狂な奴だからな。俺はフェイトの担任だ。無断欠席は許さねぇ、それだけだ。……さて」

銀時が皆を見回す。皆、銀時を見返す。

銀時
「一一行くぞ」

煌めいた白刃。それは式の古刀・九字兼定ではなかった。また、女の黒き大剣でもなかった。その白刃は……

剣心
「大丈夫でござるか、式殿」

レナ
「何とか間に合ったよ～」

逆刃刀で女の剣を止める剣心、手斧を構えて式の前に立ちはだかる竜宮レナのものであった。

式
「お前ら、どうして……」

剣心
「道は違えど、目的は同じだったという事でござるよ」

剣心が手で指す方を見ると、転校生組のゆり、カズマが唯を川から助け出し、薫、カズキ、斗貴子ががれきに埋まったこなた、リクオを助けていた。

式
「……剣心とカズキ、斗貴子は分かる。だが他の奴は……？」

レナ
「それは……私達が、ある組織に入っているからです」

式
「ある組織？」

式の疑問に、レナは息を吐いてから、答えた。

レナ
「……ＡＣという組織です」

式
「いや待て。それはいいのか！？　どう考えても『ポポポポーン☆』しか思い浮かばないのは俺の気のせいかっ！？」

レナ
「れ、レナに言われてもぉ……」

式に突っ込まれ、困り果てるレナ。レナ、ゆり、カズマは『ＡＣ』という名の組織に参加しているらしい。

レナ
「それについてはまた後で……今は、あの人を止めましょう」

手斧が無機質で無骨な輝きを放ち、女に向けられる。

女
「増えた……が、それがどうした？」

ゆり
「サポート役も増えるって事よ！！」

ゆりの叫びと共に、銃声が疾る。銃弾が女の命を奪おうと、牙を向く！！

女
「概念も何も無いただの銃弾か」

大剣で銃弾を弾き、女はゆりに剣を向ける。

女
「バーストー！」

剣心
「やらせぬ！！」

剣心が飛び込み、大剣と逆刃刀がぶつかり合う。

剣心
「ぐっ！！　なんという力……」

剣心はあまりの女の力に驚き、飛び退いて距離をとる。

剣心
「女とは思えんでござる」

女
「そうか……しかし貴様は日本刀といい格好といい『アサシンのようだな』」

女は少し昔を懐かしむような表情をしたが、すぐにその表情も消える。

剣心
「アサシン……？　アーチャーが言っていたのを聞いたことがあるでござるが……まさか！？」

女
「私の正体を掴んだか？　ならば本気で来い。私は本気で来なければ倒せるような相手ではあるまい？」

その瞬間レナが叫ぶ。

レナ
「タバサちゃん、今だよっ！！」

闇に沈む空に、タバサが舞った。近くの家の屋根の上から、女を狙って飛び降りたのだ。

タバサ
「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラース」

タバサの魔法――ジャベリンが、女に向かって唸りを上げて牙を向く。女は剣心とレナに気をとられ、反応が遅れた。さらに、タバサだけではない。

カズマ
「衝撃の……ファーストブリットォォォォ！！」

カズマがアルター能力を使い、突貫。女がいたであろう所を渾身の力で殴りつける。

土煙が上がり、タバサ、カズマが飛び退いてレナの隣へやってくる。

カズマ
「手応えありだ！！」

タバサ
「……無事ではないはず」

タバサとカズマの渾身の一撃。普通なら無事であるはずがない……。

女

「流石に危なかったぞ」

が、それは普通なら、の話だ。もう辻斬りの正体を掴んだ読者の皆様は分かっているだろうが、彼女は……規格外。

タバサ
「……嘘……」

カズマ
「ちぃっ！！」

追撃を撃とうとするカズマだが、それより先に女の大剣が振り上げられる。

女
「誉だ。我が旭光の錆と消えよ！！　エクス――カリバー！！」

漆黒の光が輝く。黒き『最後の幻想（ラスト・ファンタズム）』が皆を吹き飛ばす！！

女
「誉であろう。我が聖剣によって倒されることは……」

光が途切れた後に残る物は、ただのがれきの残骸に、異様に開けた地面だけであった。

女
「さて……む？」

女は何処かへと行こうとしたが、かすかなうめき声を聞き、体を返す。

女
「……生きていたか」

ゆり
「う……う……」

地面にうずくまっていたのは、ゆり。吹き飛ばされ、全身に傷を負ってはいたが、意識はあった。

女
「……ちょうどいい。お前らの戦意を削ぐためにも……一人ぐらいには死んでもらおうか」

女は大剣を振り上げる。先ほどまでの戦いを見れば分かるように、

彼女に容赦はない。

ゆり
「こ……のォッ！！」

女
「……散れ」

ゆりは抵抗しようとするが、時既に遅し。ためらいもなく、大剣が構えられる。

――しかし、その時、女にはある呟きと、風切り音が聞こえた。

――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ（我が骨子は捻れ狂う）――

女
「くっ！？」

女はいきなり何かを察知したかのように飛び退く。

そこを、風切り音と共に捻れた剣が突き抜ける。

女
「この、剣は……」

銀時
「うォォォォォォォォ！！」

女が剣を放った相手に気をとられた所を、銀時の木刀が狙う！！

女
「ぐあっ！！」

見事に直撃。女は吹き飛んだが、上手く体制を立て直して着地した。

銀時
「おいおいゆり、お前らしくもねーぞへばりついて」

ゆり
「うっさい……」

ゆりを守るように仁王立ちする銀時。修羅の気のようなものが漂

う。そして――

アーチャー
「間に合ったようだな……」

先ほどの剣を放った男、アーチャーがやってくる。――女の表情が、一変した。感慨深げに女はアーチャーに語りかける。

女
「やはり、あなたでしたか……お久しぶりですね、アーチャー……いえ、シロウ」

それに対して、アーチャーも感慨深げに返す。

アーチャー
「あぁ、久しぶりだ……セイバー」

女が仮面を外す。その顔は、絶世の美女。かの誇り高き騎士王。そして、アーチャーのかつての仲間――セイバーであった。

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!!』

銀八
「いよぉーし、教えて銀八先生始めるぞ。今回のゲストは緊急変更だ!!　漆黒の暴君、辻斬り女、セイバーオルタだァ!!」

セイバーオルタ
「ふざけた質問は斬り殺すぞ」

銀八
「いや、それは流石に……」

セイバーオルタ
「まぁいい。ではいこう。『ユートピア』さんからの質問だ。『質問、生徒会は他にもいるんですか?』」

銀八
「生徒会か……」

めだか
「私達関連か？」

球磨川
『だね』

セイバーオルタ
「他の生徒会は誰か、という質問だ」

めだか
「ふむ、ならば説明しよう」

会長：黒神めだか
副会長：球磨川禊
書記：桂ヒナギク
会計：毒島冴子
庶務：？？？
担当教諭：グラハム・エーカー

銀八
「ちょっと待てェェェ！！　いくら何でもカオスすぎだろうが！！　特に担当教諭！！」

グラハム

「阿修羅すら凌駕する存在だ！！」

セイバーオルタ
「……では、ユートピアさんは生徒会庶務が誰なのか推測してみろ。次だな。『エターナル』さんからの質問だ。『では、式に質問。クロス学園で戦いたいのは誰ですか？』『黒美琴「向こうの私に質問よ。私と戦ってみたい？というより戦いなさい。そして、アンタを蹂躙したい」』……私と同じ存在から質問が来ているが」

銀八
「気にするな。式、美琴、頼む」

式
「やはり同じ刀を使う者として剣心と戦ってみたい」

美琴
「いいわ、かかってきなさいよ、落ちた弱い私……」

銀八
「では、『エターナル』さんはどうやって戦わせるか考えてください」

セイバーオルタ
「最後の質問だ。『ラムネ』さんからだ。『Q：今、私のいる場所

を誰か教えて下さい。そして、その辺りにある珍しい書物を全部教えて下さい（チーズ連合組合の発展の為に）。その代わり、クロス学院の皆様。その辺りにある何か持ってきて欲しい欲しい書物を教えて下さい。借りてきますので。』」

銀八
「……何冊も本を抱えてバーサーカーから逃げれるのか？」

セイバーオルタ
「別にいいだろう。では、私は『Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ』の小説を頼むとしよう」

長門
「もう恐らく出口に近いはず。……私とタバサでその辺りを全部読みたいから、全部。あと、貴重な文献が欲しいなら魔導書がある棚を押してみるといい。貴重な文献の部屋に行ける」

銀八
「『ラムネ』さんはくれぐれもバーサーカーには気をつけてください。今回はここまでだ！！」

セイバーオルタ
「それでは……」

銀八ａｎｄセイバーオルタ
「「次回もお楽しみに！！」」

第十五話『身近な奴は意外とすごかったりする』（後書き）

どしどし投票お願いします！！

第十六話『敵の狙いはあまりにも意外すぎる所にあったりする』（前書き）

構わん。どんな技でも好きなだけ使え。だが、俺が殺すと言った以上……お前の死は絶対だ――緋村剣心

こっちのが断然かっこよくね？――坂田銀時

よせでござるよ、銀時――緋村剣心

第十六話『敵の狙いはあまりにも意外すぎる所にあったりする』

アーチャー
「……手を退いてはくれんのかね、セイバー」

セイバー
「残念ながら無理ですね……。私もこんな戦いを望んではいない。シロウ……あなたと戦う事になるとは」

アーチャーの言葉にうつむきながら返すセイバー。強力な令呪か何かを使われているのか、セイバーでも抗えないらしい。

それを聞き唇を噛むアーチャー。彼は剣も扱えるとはいえ所詮は弓の英霊なのだ。生粋の騎士であり、剣の英霊であるセイバーに勝てるはずもない。どうするか考えをめぐらすアーチャーに、セイバーがいきなり先ほどとは違った冷徹さを混じらせた声で話しかける。

セイバー
「……我が主の命でな。私は邪魔するものを斬らねばならんのだアーチャー。……だが、私に残った最後の良心かな。私自ら手は下さん」

セイバーオルタは手に持つ聖剣――エクスカリバーを地面に突き刺した。するとそこから紫と言うべきか、黒と言うべきか、とにか

くいとうべき色をした虫のような物が出てきた。

それはアーチャーの前でうごめき、ある人物の形をつくっていく。

それは――

アーチャー

「……なるほど、そういうことか……確かに私を殺すにはうってつけか」

円卓の騎士筆頭、黒き聖騎士、ランスロットであった。第四次バーサーカーと言えば分かるだろうか。

ランスロットはアーチャーを一瞥すると、黒き大剣『無垢なる湖（アロン）光（ダイト）』を抜き放つ。そして――

ランスロット

「■■■■■■■■■ー！！」

叫びと共に、アーチャーに振り下ろす。

アーチャー

「投影（トレース）」

それをアーチャーは両手に投影した双剣『干将・莫耶』で受け止める。

ランスロット
「■！！　■■！！　■■■■！！」

ランスロットが斬る、斬る、斬る、斬る！！

アーチャー
「せい！！　は！！　は！！　とっ！！」

アーチャーが避ける、避ける、受け止める、避ける！！

ランスロット
「■■！！　■■■■■■■！！　■■■■！！」

ランスロットが斬る！！　蹴る！！　殴る！！

アーチャー
「せい！！　は！！　フィッシュ！！」

アーチャーが避ける！！　受け止める！！　避け……って。

ゆり
「フィッシュって何よフィッシュって」

剣心
「アーチャー殿がネタに走るとは……」

まぁたまにはそんな事もあるだろう。

アーチャー
「はあっ！！」

ランスロット
「■■■！！」

またもやアロンダイトと干将・莫耶がぶつかり合い、お互い飛び退いて距離をとる。互角ー一。素人や『並の』達人ならばそう見るだろう。しかし、『真の』達人であるアーチャーには、この闘いが自らにとって有利に働かないと分かっていた。

その理由とは……

アーチャー
”私がむやみやたらと投影を使えないからだ”

その通りである。アーチャーはランスロット相手ではむやみやたらに投影は使えないのだ。なぜならば……ランスロットの宝具、『騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）』があるからである。この宝具はおよそ武器となり得る万物に触れることで、自分の宝具に変える宝具であり、鉄柱から戦闘機、果ては他者の宝具すら自らの支配下に置いてしまう。それはアーチャーが投影した剣に対しても、例外ではない。

しかし、そんなことはどうでもいい。そんなことより、アーチャーにはかなり不可解な事があった。

アーチャー
”もう一度試す!!”

アーチャーは片手に何の概念も持たない剣を投影し、ランスロットに向けて投隔する。

すると、ランスロットは『アロンダイトを持ったまま』剣を掴み、己の宝具とする。そう。これが不可解な点。

アーチャー
”なぜアロンダイトを解放した状態でナイト・オブ・オーナーを使えるのだ！？”

そう。本来アロンダイトはナイト・オブ・オーナーを封印しなければ使用出来ないのだが、何故かランスロットはナイト・オブ・オーナーとアロンダイトを同時に使用出来ていたのである。

アーチャー
”これでは打つ手が無い……純粋な剣技で私がランスロットを凌駕出来る訳がないからな……”

正確には、アーチャーにも光明はある。ランスロットはスキル『無窮の武練』を持つため、例え狂化し、バーサーカーになり果てようとも、その剣技は衰えない。つまり、わずかな隙を狙ってくる。とすれば、アーチャーの戦法である『わざと隙を作り、攻撃を誘導する』ことは実に有効な戦法となりえるのだ。しかし――

ゆり
「文字が多いわねぇ」

だまらっしゃい！！　……コホン。しかし、いくら理性が無いとは言え、相手はかの湖の騎士。破られないという保証はなかった。

アーチャー
「思ったよりも厄介だな……さて、どうするか」

アーチャーが思うに、策は二つ。一つはこのまま耐え、隙を探す。もう一つは投影を使い、勝負を決めにいく。

アーチャー
”安全なのは明らかに前者……だが”

アーチャーはク、と皮肉げな笑みを浮かべる。

アーチャー
「あいにくと……私は我慢弱い！！」

ゆり
「グラハム先生！？」

アーチャーはまたもやただの剣を投影し、ランスロットに投げつける。ランスロットは先ほど己の宝具と化した剣で弾き、アーチャーに迫る。

ランスロット
「■■■■■■■■■■■■！！」

アーチャー
「はぁぁぁぁぁあ！！」

一合、二合、三合、四合。ランスロットは冴え渡る剣技で迫り、アーチャーはそれを見事な技能で受け流す。

二流の極み。そんな言葉がある。アーチャーはまさにそれだ。才など無い二流の極み、アーチャー。才に溢れ、アーサー王すら上回るとも唄われる騎士、ランスロット。まさにこの二人は対極。

アーチャー
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

ランスロット
「■！？」

しかし、二流が天才に勝てないなんて事は無い。アーチャーは莫耶を振り下ろし、ランスロットが宝具とした剣を砕いた。

アーチャー
「確かに私は貴様のような才には乏しい……」

だが、とアーチャーは続け、干将を振り上げる。

アーチャー
「たとえいかなる理由があろうとも、セイバーを裏切った貴様に負ける訳にはいかん！！」

そのまま、力の限り振り下ろす。

ランスロット
「■■■■■！！」

アーチャーの渾身の一撃。しかしランスロットはそれをアロンダイトで防ぎ、飛び退いた。才の差が、ここで出たか。

アーチャー
「まだだ！！」

しかし、まだアーチャーの手は止まらない。アーチャーは今の一撃で脆くなった干将・莫耶を廃棄し、新たな双剣を投影する。そして一一両方とも投げつける。

ランスロット
「■■■■！！」

しかし、それは裏目に出た。ランスロットはアロンダイトを鞘に納め、両手で飛んできた干将・莫耶をつかみ、己の宝具としてしまったのだ。

アーチャー
「ち！！」

アーチャーは舌打ちし、新たな干将・莫耶を投影し、ランスロットに向ける。しかし、ランスロットとアーチャーが持つ宝具は今同じ。技量はランスロットが上で、しかもナイト・オブ・オーナーで強化済み。……状況は、圧倒的にアーチャー不利。

ランスロット
「■■■■！！」

ランスロットは黒く染まった双剣を振るい、アーチャーに向かって突貫する。双剣がアーチャーの首を刈ろうと牙を向く。

――それに対してアーチャーが行った行動は――

アーチャー
「……ふ」

――ただ一度、鼻で笑っただけであった――

振り下ろされる剣を、アーチャーはただ干将で受け止めた。すると――

――ピシィ――

ランスロット
「■■■■■■■!?」

ランスロットが驚愕の声をあげる。なんと、ランスロットが持っている干将が、粉々に砕け散ったのだ。

アーチャー
「遅い!!」

慌てて防御に入ろうとするランスロットに、アーチャーの剣が一閃。ものの見事にランスロットの右腕を斬り落とす。

ランスロット
「■■■■■■!!」

苦しみの叫びを上げるランスロット。目をむき、自らの腕を斬り落としたアーチャーを睨む。

そのアーチャーはすでに、弓に剣をつがえて構えていた。

アーチャー
「甘かったな湖の騎士よ。その剣は私がわざと骨子を甘く投影した外見ばかりのすっからかんの物だ。私が何の考えも無しに貴様に武器を与えるとでも思ったか？」

そう、アーチャーはわざと骨子を甘く投影した剣を投げつけ、ランスロットにあえて武器とさせたのだ。案の定それにはまったランスロットは、手痛い一撃を受けたのである。

アーチャー
「終わりだ、湖の騎士よ、いささか……楽しめたぞ」

剣に魔力がこもり、放たれる。

アーチャー
「偽・螺旋剣（カラド・ボルグ）！！」

捻れた剣が、無抵抗のランスロットに胸を突き刺したとみるや、
アーチャーはつぶやく。

アーチャー
「――”壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）”」

刹那、爆発が起こる。

アーチャー
「グゥゥレイトォ！！」

ゆり
「アーチャー先生絶対最近ガンダム見たでしょ！？」

今度は容姿が似てるからか、ディ○ッカの真似である。

”壊れた幻想”により大々的な魔力の奔流が巻き起こり、ランスロットを粉微塵に吹き飛ばした。ランスロットを形作っていた黒い虫が飛び散り、次々と消えていく。

アーチャー
「貴様の負けだ湖の騎士よ。……あの世でセイバーを裏切ったこと、

じっくりと悔いるがいい」

アーチャーがそうつぶやいた途端、先ほど銀時達がいた川が水柱を上げた。アーチャーとゆりは知らぬ間に、川から少し離れていたのだ。

ゆり
「な、なに!?」

ゆりの叫びに答えられる奴はここにはいない。アーチャーは水柱を睨みつけ、ゆりを抱えて走り出す。

ゆり
「な、何よっ!?　自分で歩けるわよ!!」

アーチャー
「怪我人がえらそうに言うな!!」

ゆりに返すアーチャーだが、その思考の中では単純な考えが渦巻いていた。

アーチャー
”銀時では……セイバーには勝てん!!”

先ほど皆が戦っていた川には橋がかかっている。川を渡るには必須の橋だが、今はその橋に大穴が開いていた。

その穴の縁に黒き剣の英霊、セイバーが川を見下ろして立っている。

いや、正確には違う。川を見ていたのではなく、川に叩き落とされた銀時を見ていたのだ。

セイバー
「おかしいな……こんなに弱かったのか、銀時？」

銀時
「うっ……せぇ……な……少しは……黙れねーのかよ……」

もはや銀時は満身創痍。アーチャーはランスロットに止められた。他の皆はセイバーのエクスカリバーによって負傷。銀時は一人で戦わざるを得なかった。

ちなみに、バゼットやランサー達は他を探しているため、救援は期待出来ない。

セイバー
「黙れ？　……ふっ。よくそんな台詞が言えるな……いいだろう、跡形もなく、斬り捨ててやる」

セイバーが飛び降り、銀時にエクスカリバーを振り下ろす。それを銀時は半身で避け、木刀を横薙ぎに振るう。

銀時
「うォォォォォォォォ！！」

セイバー
「……ぬるいな」

しかし、その渾身の一撃も、セイバーがわずかに身をかがめることで防がれてしまう。

セイバー
「そろそろ終幕といくか」

銀時

「がはぁっ！？」

見事すぎる右ボディー。セイバーの右拳が、銀時にクリーンヒット。銀時は壁まで吹き飛ばされる。

銀時
「ぐは！！」

セイバー
「終わりだ」

セイバーは一気に距離をつめ、身を守るために構えられた木刀を斬り砕き、銀時を貫いた。

セイバー
「悲しいものだな、かつての英雄がこの様か！！」

話しながらさらに深く刺し貫くセイバー。

セイバー
「剣が折られては勝機はあるまい……ここで消えるがい……何！？」

セイバーがエクスカリバーを引き抜こうとするが、なんと銀時がエクスカリバーを掴み、全く動かすことが出来ない。

銀時
「まだだ……まだ……俺の剣は……折れちゃいねーんだよ！！」

血を吐きながらも不敵な笑みを浮かべる銀時に、セイバーは悪寒を感じ、剣を引き抜く。一一次の瞬間。

アーチャー
「……ふん、お前の勝手だが。銀時、その前に右に避けろ」

その声が響くと同時に、銀時は右に飛び退く。そこを、猟犬の剣が走った。

アーチャー
「駆けよ、猟犬……”赤原猟犬（フルンディング）”」

アーチャーが放ったのは、持ち主が健在である限り標的を狙い続ける宝具、フルンディング。猟犬が牙をむき、セイバーを襲う。

セイバー
「アーチャーか！！」

セイバーはエクスカリバーを振り上げ、フルンディングを斬り砕こうとする。――それを、アーチャーが先読みしていない訳がない。

アーチャー
「……”壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）”」

またもや爆発。魔力の奔流がセイバーを巻き込み、吹き飛ばす。

セイバー
「くっ、相変わらず姑息な真似を……」

アーチャー
「ク、なんとでも言いたまえ……ゆり、救急車を」

ゆり
「了解！！」

なんとか着地したセイバーに、アーチャーが歩み寄る。……主従であり、また友人でもある。そんな二人が、ここに対峙した。……が。

セイバー
「……まぁいい。目的は達せられた」

アーチャー
「何……？」

セイバーは川岸までジャンプし、アーチャー達と距離をとる。そして、背中を向けた。

セイバー
「まんまとはまったな、アーチャー。私の目的はここで貴様等を殺すことじゃない。……足止めだったのだ」

アーチャー
「足止めだと！？」

セイバー
「その通り……最後に一つ、私たちの狙いについてヒントをやろう」

セイバーはクツクツと笑いながら去っていく。

セイバー
「……”次元神”だ。それが私たちの目的。……せいぜい無い頭を

ひねって考えるといい。ではな」

闇がセイバーを包み、そして消える。アーチャーはセイバーが消えた所を見つめながら、セイバーのヒントについて考える。

アーチャー
「次元……神？」

だが、アーチャーの思考回路は、何も思いつくことはなかった。
そしてやがて、サイレンが響きだした。

「はぁっ！！　はぁっ！！　……くっ……」

「存外に粘るな……」

ここは銀時達とはまた離れた路地裏。そこに、五人と対峙する一人の男がいた。どうやらかなり長い時間、五対一という不利な状況で戦い続けてきたらしく、息があがっている。が、それにも構わず挑戦的に男は話す。

「元来諦めが悪いもんでね……誰なんだよ、てめぇら……どこから

来やがった……」

五人は一人を除いて仮面をかぶっており、素顔が見えない。

「んであなたはどういうつもり何ですか……フェイトさん！！」

フェイト
「……」

仮面をかぶっていない一人とはフェイト。男の質問にも眉一つ動かさず、冷ややかな目で男を見つめる。

「どこから、か……そんなの、今から捕らえられる貴様に知る必要があるのかね？　……『次元神の息子』よ」

「ッ！？」

男は驚きの表情を浮かべるが、構わず仮面は続ける。

「それとも名前で呼んだ方がよいかな？　……次元神の息子、いや……『次元零夜』！！」

零夜
「……ッ！！」

そう。追われていた男の正体は……かの転校生、次元零夜だったのである！！

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！！』

銀八
「いよぉーし。銀八先生始まるぞ。今回のゲストは影薄キャラかと思わせつつも意外なるキーパーソン、次元神の息子、次元零夜だ！！」

零夜
「どうも。その目……敵対を止めぬ瞳。ならば体裁を取り繕う必要はないな……。威厳を得る為に変えていた……この顔でいる必要も…ない！！　そうだ……これが本当の私。次元零夜。設定年齢１９

歳！！　蟹座のＢ型ッ！！」

銀八
「美…美形だ！！　……って何やらせんだ。たしか漫画のスクライドネタだったか」

零夜
「では一つ目の質問いきます。『エターナル』さんの所の凛さんからの質問です。『クロス学園のみんなに質問よ！次の中で勝てそうなのはどれ？１．ガンダム全シリーズの主人公機体。２．ゴジラファイナルウォーズに出てきた怪獣達。３．ＦＦ全ラスボス』」

銀八
「スルーした！？　さて、答えですが……全部無理あるだろーがァァア！！　エターナルはキングギドラと戦っとけ！！」

零夜
「んじゃ、次な。『月光閃火』さんから。俺の生みの親でもあるよね。『作者に質問…今やってる長編で登場してるカズマの他に、スクライドからのキャラって来るのかな？例えば“劉鳳”とか…。あと、スクライドのファンディスクのシルバーでやっていたサウンドドラマでの【カズマと劉鳳が互いの名前を言い間違い合う】シーンって…やったりする？』」

作者

「ん～……劉鳳は考えてなかったですね……しかもファンディスク見てないんで、厳しいッスね……すいません」

銀八
「月光閃火、バカ作者ですまないな」

零夜
「次は……『ラムネ』さんからです。『Q：頼まれて私の持ってきた『本』と引き換えのギブ　アンド　テイクだ　呼べよ……早く呼べ！（援軍を）』」

銀八
「まだバーサーカーに追われてんのか……どうする？」

ＡＬＬ
『その提案、キャッチａｎｄリリースだ』

銀八
「……ラムネはさっさと逃げろ。あ、あと緋弾のアリアは作者がわからないらしい。バカ作者ですまないな」

零夜
「最後だ。『ボッスン』さんから。『質問です。スザクさんとカレンさんとＣ．Ｃさんと土方さんと沖田さんと山崎さんとユーノさん

とカナさんとあずにゃんさんと獄寺さんと新八さんと澪さんと律さんとムギさんは、出ないですか？教えてください。』」

銀八
「多いな……まぁいい、全部表にするぞ」

スザク、カレン、C．C→未定。もしかしたら……

土方、沖田、山崎→出ます

ユーノ→可能性なし

カナ→ぬら孫？　なら出ます

あずにゃん、澪、律、ムギ→出ます

獄寺→恐らく出ません

新八→恐らくは出ます

銀八

「以上だ……ではボッスンさんは最後だから片付け頼むな」

零夜

「今回はここまでです。では次回もお楽しみに！！」

第十六話『敵の狙いはあまりにも意外すぎる所にあったりする』（後書き）

今回……アーチャーをかっこよすぎ、またネタを盛り込みすぎたかな……。

第十七話『次元零夜はよく見たら名前からモロに次元神であるａｎｄ先手を取ら

重大発表です！！

二回目の投票、開催です！！

今回は……

１：投票方式は前回と同じ。

２：前回と同じキャラに投票しても構いません。

です。さぁ活躍したキャラの票が伸びるか、それとも……？　投票お願いします！！

第十七話『次元零夜はよく見たら名前からモロに次元神であるａｎｄ先手を取る

零夜
「……調べはついてるらしいな……なぜ知ったのか」

零夜の声に闘気がにじみ出て、相手を威圧する。まだ若いとはいえ次元神。迫力は普通の人間では及びもつかない。

「それも君が知らなくてよいことだ」

一人の男が前に出、日本刀をすらりと抜く。そして何事かをつぶやく。

「小手調べといこう」

なんと水流が刀から巻き上がり、零夜に迫る。

零夜
「あめーんだよ……空間、決裂」

零夜は手を振るい、空間を割る。水流が割れた空間に飲み込まれて消える。次元神。やけにハイスペック。さすがに神である。

「さすがは次元神……やるようだな」

「ご丁寧にどうも……」

ニヤリと余裕の笑みを浮かべる零夜。次元神とは全ての次元を操る存在。負ける要素はない。

……しかし、相手の表情は淡々として変わらない。零夜の強さは見ればわかる。……それ以上という余裕があるのか。

零夜

「あんたらも嫌に余裕だな」

「……いや、何。余裕という物ではないよ。ただ……」

――もう勝負はついた。それだけだ――

鮮血が空に舞った。

紫
「……皆さん、夜分遅くよく集まってくれたわね」

円卓で紫が話し出す。ここは学園会議室。学園を代表する者達が集う場所。今回のこの事件を見てみぬふりをすることは出来ないと考えた紫は、まずは会議を行うこととしたのだ。

今回は先生達を中心に、Z組からは負傷した銀時に変わりランサー、剣心、かがみ。助っ人からは式に斗貴子。そしてACからはゆり、レナが出席していた。

アーチャー
「さて、話すことは色々あるのだが……」

円卓の一角、アーチャーが口火をきる。

アーチャー
「辻斬りの犯人はセイバーオルタ。桂小太郎は彼女に斬られ消息は不明だ」

ランサー
「んでよ、フェイトは何故かはわからないがあっち側についたのを

確認してる」

剣心
「銀時はセイバーに斬られ重傷、こなた、リクオは武器を破損しているでござる」

紫
「近況報告はその辺でいいわ。大体耳に入ってる。それより……」

紫はゆりとレナに目を向ける。

紫
「『ＡＣ』という組織について、教えてくれるかしら」

ゆり
「……はい。ですが、この話は他言無用でお願いします」

そう前置きして一呼吸置き、ゆりは語り出す。

ゆり
「皆さんは、伊一九号氏を知っておられますか？」

かがみ
「伊一九号？」

聞き慣れない名にかがみが、いやかがみだけでなく皆が首を傾げる。それに反応したのは一一

紫
「伊号じいさん、まだ生きてたの？」

知っているらしい紫ただ一人であった。

グラハム
「伊号とは何者だ？」

生徒会担当の教師、グラハム・エーカーが紫に質問。紫は頬杖をついて語り出す。

紫
「レベル５の予知能力者（プレコグ）のエスパー・ドルフィン。超能力イルカのじいさんよ」

かがみ
「レベル５！？　美琴と同格じゃない！？」

美琴と同格だという伊号の力に息を飲む皆。ゆりは紫に軽く頷いて話を続ける。

ゆり
「紫さんの言うとおり、伊号じいさんは現在では最高の予知能力者です。それは……」

ゆりはそこで一度言葉をきった。

ゆり
「じいさんは私達が発足するまでに３０００件以上の予知を行ったんですが……阻止する努力をしても予知した通りになってしまうほどなんです」

紫
「回避不能の予知ね。……なるほど。それを回避するのが、あなた達の仕事か」

レナ
「平たく言えばそうなります。表向きは『たまには違法な事もする』運び屋ですが」

斗貴子
「どこのラグーン商会だ……」

レナにぼそりと突っ込む斗貴子。

レナ
「実質、私達が関わって回避された予知もあります。そして今回の予知は……」

レナは言いにくそうだったが、意を決したように言う。

レナ
「『クロス学園の崩壊』」

ＡＬＬ
『ッ！？』

皆が息を飲む。学園の崩壊。それを伊号が予知したというのか。

ゆり
「だからこそ。私達はここに派遣されてきました」

レナ
「大事な事を黙っていてすみません。機密事項なんです」

紫
「……とりあえず、今知れただけでもよしとするわ」

紫はそう言って、円卓に向き直った。

紫
「これよりクロス学園、そしてＡＣ、斗貴子、式達は無期限の共闘態勢に入るわ。皆はすぐに敵やフェイトの捜索を……まだ奴らは派手な動きは辻斬りしかしてない。目的の『次元神』とやらもまだ得てはいないはず……」

「それは見通しが甘いね、八雲紫」

いきなりモニターが円卓の中央に現れる。それに映る人物は、仮面をかぶった男……そう、さっき次元零夜と相対していた男である。

「私達はすでに目的を達した……次元神の息子、次元零夜を手に入れた！！」

男はモニターの前に傷つき、縛られた男を見せる。その男は、他

ならぬ次元零夜、次元神の息子であった。

レナ
「零夜くん!?」

紫
「くっ……ま、まさか……」

「その通り……私達は今夜11時の海列車でここを出る。そしてそこから海列車は天候悪化のため無期限の出航停止になる……別の国に移った私達に手は出せまい。ではな。せいぜい追ってくるといい」

モニターがかき消える。紫はいつもは見せない狼狽した姿で円卓を叩きつけた。

紫
「やられた!! 後手に回った……」

バラライカ
「……もう11時だ。手遅れだがな。紫、スキマでどうにかならんのか?」

紫

「ダメよ。海列車は外部を能力無効の電波で覆われているの。私でも干渉出来ないわ」

スカリエッティ
「打つ手なしということかい？」

紫
「んな訳あると思う？」

スカリエッティの言葉に紫は苛立ちを隠さずに返し、水差しをつかんで喉を鳴らして飲む。

紫
「別の国に移ったら手が出せない？　せいぜい追ってこい？　……いいわ、追ってやろうじゃないの。そっちの見通しも砂糖みたいに甘いって事を知るがいいわ……すぐ戦闘準備！！　敵は恐らくは海列車が向かった『Ｎ．Ｂ．Ｔ』！！　あいつらはＮ．Ｂ．Ｔのエージェントだと考えられるわ。戦闘準備が完了し次第、乗り込むわよ！！」

ランサー
「しかし、行く方法は？」

ランサーの質問に紫はニヤリと笑って返す。

紫
「こっちにも切り札って物があるのよ！！」

――午後１１時１０分前、海列車の駅――

「まさかこうもあっさり捕まってくれるとはねぇ、フェイト・Ｔ・ハラオウン」

意地が悪そうな役人がフェイトを見て悪態をつく。フェイトはそれを睨みつける。

フェイト
「……ふざけるな」

「おお怖い怖い。しかし手錠で魔力を封じられているあなたなど…怖くもなんともないのですよ！！」

その声とともに、役人はフェイトを思い切り蹴りつけた。

フェイト
「がは！！」

フェイトは地べたに叩きつけられる。役人はフェイトに向けて唾を吐き、兵に命じる。

「おい、連れていけ」

「はっ！！」

命じられた兵はフェイトを立たせ、海列車に無理やり連れ込んだ。

……それを、物陰から見る者達がいた。人影は三つ。一人の女は髪にリボンをつけ、手にはナイフ。それを片手で弄んでいる。

次も女。この女は髪が茶髪の短髪で、手ではコインが弄ばれている。

もう一人は男。彼は学ランを羽織り、黒髪。手にはトンファーがある。

彼女ら三人は、乱暴に扱われるフェイトを見て、一言だけつぶやいた。

『……ビンゴ』

曇天の空の雲が、一瞬途切れ、月の光が差し込んだ。月の光は、道を照らすかのように伸び、三人ー涼宮ハルヒ、御坂美琴、雲雀恭弥の姿を映し出した。

銀八
「教えて」

ＡＬＬ
『銀八先生!!』

銀八
「んじゃ銀八先生始めるぜ～。今回は一つだけだから俺だけだ。『エターナル』さんから。『アーチャーに質問だ。最近見たガンダムはなんだ?ちなみに我らの作者は最近∀とスターゲイザーとイグルーを見た』だ」

アーチャー
「セリフを見れば分かるかもしれないが、００、ＳＥＥＤ、そしてＧガンを見たぞ。次は何を見るかな……」

銀八
「んじゃエターナルはＧガンのドモンの真似をしろ！！　次回もお楽しみに！！」

第十七話『次元零夜はよく見たら名前からモロに次元神であるａｎｄ先手を取ら

どしどし投票してください！！　今まで一回も投票していない人は、二回投票可能です！！

人気投票キャラクターリスト（前書き）

蒼き星さんのご要望で人気投票キャラクターリストを作りました。

投票の際、参考にしてください！！

人気投票キャラクターリスト

［銀魂］
坂田銀時、銀八
桂小太郎
エリザベス
神楽

［学園黙示録］
小室孝
宮本麗

［コードギアス］
ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア

［とあるシリーズ］
上条当麻
御坂美琴
インデックス

［ぬらりひょんの孫］
奴良リクオ
及川氷麗

［ＢＬＥＡＣＨ］
黒崎一護
朽木ルキア

［リボーン］

沢田綱吉
山本武
雲雀恭弥

［鋼の錬金術師］
エドワード・エルリック
アルフォンス・エルリック

［るろうに剣心］
緋村剣心
緋村薫
斎藤一

［魔法少女リリカルなのは］
ナノハ・ヴィ・ブリタニア（高町なのは）
フェイト・T・ハラオウン
八神はやて
シグナム
ヴィータ
シャマル
ザフィーラ
リインフォース
リインフォースツヴァイ
ジェイル・スカリエッティ
エリオ・モンディアル
キャロ・ル・ルシエ

［らき☆すた］
泉こなた
柊かがみ

［けいおん！！］
平沢唯

［涼宮ハルヒの憂鬱］
涼宮ハルヒ
長門有希

［ニコニコＲＰＧ］
アナゴ

［オリジナル］
次元零夜
アンドロイドつかさ

［東方］
八雲紫

［スクライド］
蒼乃カズマ

［ひぐらし］
竜宮レナ

［武装錬金］
武藤カズキ
津村斗貴子

［Ａｎｇｅｌｂｅａｔｓ！！］
仲村ゆり

［ゼロの使い魔］
タバサ

［ガンダム００］
グラハム・エーカー

［Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ］
アーチャー
セイバー
ランサー
バゼット・フラガ・マクレミッツ
バーサーカー

［空の境界］
両儀式
蒼崎橙子
黒桐幹也

［めだかボックス］
黒神めだか
球磨川禊

［ブラッククラグーン］
バラライカ

なお名だけの登場ははぶいております。

人気投票キャラクターリスト（後書き）

……改めてみるとキャラクター多いなこの小説……。

第十八話『フェイト救出第三次計画……一次と二次はどこいった？』（前書き）

パン工場～♪――柊かがみ

……名台詞？――坂田銀八

名台詞！！――泉こなた

第十八話『フェイト救出第三次計画……一次と二次はどこいった？』

――クロス学園内――

学園内では、Z組を中心とした精鋭部隊が組織され、いつでも出れるように準備をしていた。

こなたやリクオはスカリエッティに武器の修理、紫はスキマをつなげまくり、応援を頼んだり。銀時達負傷者は治療を受けている。

……その隅に、二人の少年少女がいた。エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエ、そして彼女の竜、フリードである。

二人（と一匹）は戦闘に参加していないため、傷はない。……だが、心に傷を負っている。姉代わりであり、母親代わりでもあったフェイトから告げられた決別の言葉。……まだ幼い子供には、重すぎた。

キャロ
「フェイトさん……」

フリード
「キュクル～」

悲しそうに目を伏せるキャロを、フリードが励まそうとするが、キャロは意に介さない。それだけ心の傷は深い。

……しかし、エリオは違った。ただ沈黙する。そして、意を決したかのように目を上げる。

エリオ
「……キャロ。下を向いてても仕方ない。……今は、フェイトさんの下になんとしても行くんだ。……絶対にフェイトさんには何か理由があるはずなんだ」

キャロ
「エリオくん……」

フリード
「キュ……」

キャロが顔を上げる。その顔を微笑んで見つめながら、エリオはハルヒに言われたある言葉を思い出していた。

――――――――――

それは、ハルヒが別行動をとると言い出した時の別れ際。エリオはその時、ハルヒと話していたのだ。

エリオ
「ハルヒさん……」

ハルヒ
「なによ」

エリオ
「フェイトさんは……僕たちが……」

その先は言えない。今言われたばかりだから……確認したくない。

ハルヒ
”……重いわね……”「ねぇ、エリオ」

ハルヒは言葉を発しながら背を向けて、歩き出す。

ハルヒ
「私さ、嘘って嫌いなのよね。だってついても利益なんかないし、信頼とか色々失うし……」

エリオ
「はぁ……」

いきなり語り出したハルヒに、エリオは間の抜けた声しか出ない。

ハルヒ
「でもね」

ハルヒはそこで髪をかきあげる。かきあげた髪は風に舞った。

ハルヒ
「紆余曲折あるかもしれないけど……『友達の嘘』は」

少しずつエリオとハルヒの距離が離れる。しかし、エリオにはしっかりその声は聞こえていた。

ハルヒ
「最終的には許すのが、友達ってモンよ」

――――――――――

―海列車駅構内。午後11時1分前――

構内にアナウンスが響く。

『クロス駅発、N．B．T行き海列車――まもなく出航致します』

ハルヒ
「――チ、もう出るのね」

美琴
「みんなはどう動いたかしら……上手く連絡とれなかったけど」

雲雀
「おそらくは学園に集まってるだろうね……どっちにしろ誰も間に合わない、か」

駅構内に立つ。三人の顔は決意に満ちていた。もう海列車に間に合うのはこの三人のみだろう。

ハルヒ
「二人には重ね重ね悪いわね……そういや美琴、あんた当麻には……」

美琴
「……連絡はしたけど、つかなかった。それと悪いなんて言わないでよね。あんたの頼みなんだから」

雲雀
「……僕は学園の風紀を乱した奴らを噛み殺しに行くだけだよ」

風が美琴の髪を舞わせ、雲雀の学ランを跳ね上げる。……みんなが間に合わないのなら……。

ハルヒ
「……私が助ければいい。二人とも、行くわよ」

美琴
「……うん」

雲雀
「望む所だね」

三人は既に出発しようとする海列車に向け、疾走を始める。その姿一一まさに！！

「ん……こらこら君たち、危な……」

ハルヒ
「どっけェェェェェ！！」

美琴
「ハァァァァァァ！！」

雲雀
「……ふん」

疾風怒濤！！

当麻
「美琴ォォォォ！！」

誰もいなくなった駅構内に当麻の叫び声が響く。もちろん返事は

ない。既に構内はもぬけの空だ。

当麻
「くそ……あのバカ野郎……俺に一言も連絡せずに……」

当麻が悔しそうに呟く。――そう。美琴は当麻は連絡がつかなかったと言ったが……実は連絡などしていなかった。当麻には黙って、ハルヒの追撃班に参加したのである。

夜分遅くなっても美琴が帰らないことに不信感を抱いた当麻は、紫からの招集がかかり、フェイトの話を聞いた時に、もしや美琴が乗り込んだのではないかと思い、すぐさま駅に駆けつけたのだが、間に合わなかったのだ。

当麻
「くそ……ん？」

当麻は何かに気がつき、建て付けの時刻表に向かった。それは掲示板でも何でもないから、普通紙が貼り付けられているなんてことはない。……そこに紙が貼り付けられていたから、当麻の注意を引いた。

当麻
「これは……やっぱり美琴からか！！」

無我夢中で封を破り、中身を読む。

美琴
『――当麻、あんたがこれを読んでるってことは、私は帰らなかったってことでしょうね』

当麻
「いきなり縁起わりぃなオイ」

美琴
『……とまぁ冗談はさておいて、11時発の海列車にフェイトちゃんを確認したから私とハルヒちゃん、雲雀も乗り込むわ』

当麻
「ハルヒと雲雀までかよ!?」

美琴
『というかハルヒが言い出しっぺなんだけどね。それと、何故かわかんないけど零夜君もいたから報告しとくわ』

当麻
「零夜か……確か次元神、だったか」

美琴
『海列車には一つぐらい電話あるでしょうから追って連絡するわ。それじゃあね』

当麻
「……あんの、バカ野郎……ん？」

当麻は手紙から目を離しかけたが、ふと何かに気づき、また手紙に目を向ける。

美琴
『追伸――悪かったと思ってるわ、当麻』

ただ、それだけ。だが当麻にとって、それだけで十分だった。

当麻
「……バカ野郎。そんなこと言われたら……」

彼は手紙を握りしめ、踵を返す。

――助けに行かざるを得ないだろ。やれやれ……不幸だ――

スカリエッティ
「本当にやるのかね、こなた君」

こなた
「……うん。蒼炎丸も了承してる」

ここはスカリエッティの化学教室。……とは名ばかりの研究所だ。
休みの日には彼はよく助手のウーノやクアットロと共にここにこもって何かを作っている。

スカリエッティ
「しかしだね、『あれ』は君の体に大規模な負担がかかるのだよ。
その上「分かってる」……そうかね」

こなた
「分かってる。だけど……今のままの私じゃ、セイバーさん達には及ばない。なら……やるしかない」

スカリエッティ
「……後悔は、無いね？」

こなた
「それ、今さらだよ？」

スカリエッティの言葉にクスリと笑うこなた。

こなた
「いや～、それに、ここまで来たらパワーアップがあった方が燃えるじゃん？　お約束な展開だけどね～」

いきなりシリアスな口調からコミカルに変えたこなたに、スカリエッティはニヤリと笑う。

スカリエッティ
「いいだろう……蒼炎丸を貸したまえ」

こなたが蒼炎丸を渡す。すでにスカリエッティによって直され、輝きを放っている。

スカリエッティは何かの装置に蒼炎丸を取り付けた。

スカリエッティ
「では、こなた君、手を」

こなた
「了解～」

スカリエッティに言われ、こなたは蒼炎丸に手をそえる。

こなた
”蒼炎丸……ここからはあなたにもキツい戦いになる。だから……”

その時、彼女の心に声が響く。

蒼炎丸
”主……我が魂は常にあなたと共にあります……”

こなたが目を開けると、蒼髪の美女ー蒼炎丸が実体化した姿が微笑んでいる。こなたもニッコリ微笑み返し、呟いた。

こなた
「ーリミッター解除」

ハルヒ
「……しかしここは」

荒波がすさぶ海列車。その最後尾に、ハルヒ、美琴、雲雀の三人はいた。……すでにびしょ濡れだが。

ハルヒ
「めちゃくちゃ濡れるわね……一服も出来やしないじゃない」

雲雀
「まぁ予想通りだね。海列車だからこんなものだよ」

波しぶきに不平を上げるハルヒに、まったく波を意に介さない雲雀。敵陣の真ん前だというのにまったく慌ててはいない。

美琴
「さて、どうこっそり中に潜入する？」

ハルヒ
「無駄な戦いはしたくないってのが本心なのよねー。ま、いずれバレるでしょうけど、雑魚との戦いで体力消耗したくないし」

こっそり潜入。これが一番いいのだろうが、これといったいい方法がない。あーでもないこーでもないと議論する三人。

さて、ここで思い出して欲しいのは、今の天気はすごい嵐であるということである。先ほども書いたが、当然波が高い。つまり……。

美琴
「ぬわ！？」

ハルヒ
「み、美琴！？」

美琴がひときわ高い波にさらわれ、海に落ちてもなんら不自然はないわけで。なんとかハルヒが美琴の手を掴んだが、うまく引き上げることが出来ない。

……さて、ここでもう一度思い出して欲しい。今は嵐である。台風などの嵐の時、外の状態を確認したくて窓を開けたくなる……なんて経験はないだろうか。人間は台風などが来ると、意外とテンションが上がったりする。すなわち……

「いやぁ外はすごい嵐……」

ハルヒ
「は？」

雲雀
「……ワオ」

車両の中にいる兵士が、外の様子を見にきてもおかしくもなんともないのである。

「し、侵入者……」

ハルヒ
「ちょーどよかった！！　女の子が溺れてんのよ、手伝いなさい！！」

「な、何！？　わ、わかった！！」

成り行きでなぜか美琴を引き上げる兵士。大人の男が加わったことで、あっさり引き上げることが出来た。

美琴
「ご、ごめん、油断してた」

ハルヒ
「全く……あ、ありがとうね兵士さん」

「いやいや、人命を助けられたなら……ん？」

そこで、兵士はあることに気づく。N．B．Tの関係者しか乗っていないはずの列車に乗っているコイツらは何者なのか？

「き、君たち、まさか……」

――その時、雲雀が動いた！！　鋭く一息に兵士の胸元に飛び込み、トンファーで腹を突き上げる。兵士が浮き上がるほど強烈な一撃。そしてそれにかかと落としを決め、もう一度トンファーを食らわせ、吹き飛ばす。兵士はものの見事にドアを突き破り、中へ倒れこんだ。すべては流れるような一連の動き。兵士は当然のごとく気絶だ。

……それで侵入者がいると気づかない兵士はいない。

「なんだ貴様ら！！」

その言葉に、三人はふっ、と笑い、口を開く。

ハルヒ、雲雀、美琴
『通りすがりの……学生だ！！』

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！！』

銀八
「さぁ始まりました銀八先生。今回のアシスタントはかなり先延ばしにされました、アルター能力の使い手、カズマだ～どうぞ」

カズマ
「かなり先延ばしにされたんじゃねぇか？」

銀八
「新キャラが多くてな……」

カズマ
「ち……まぁいい。呼ばれたからにはキチンとやるぜ。まずは『エターナル』の所のラウラなんとかからだ。『ラウラ「よし、質問だ！美琴、式、なのはに質問だ。それぞれ乗りたい機体は次の内どれだ？
1．ビグラング（ＭＳイグルー）2．ブルーディスティニー一号機
3．ガンダムヘブンズソード（Ｇガンダム）』」」

美琴
「ハイパー銀色の脚スペシャルのヘブンズソード！！」

式
「ビグラングの格闘能力は凄まじいと思うからビグラングだな。だが防御は……」

なのは
「なら残ったブルーディスティニー……だけど私はＮＴだから乗れないね☆」

銀八
「ちがうだろ！！　エターナルはグラハム先生の真似をしろ！！」

カズマ
「分かるのか？　では次は『ボッスン』さんからだ。『ガンダムシリーズのキャラ達は他にも出ますか？』」

銀八
「作者いわく、『出すなら００かＧガンか∀の御大将かですかね』だそうだ。ではボッスンさん、アニメ化おめでとうございます」

カズマ
「それはスケットダンスだろ……では次だ。『リーガン』さんから。『戦国ＢＡＳＡＲＡはでないんですか？幸村とかが出たらおもしろくなるとおもうのですが。』」

作者
『バサラはですねぇ、作者が全くわからんのですよ。見る時間も気力もないんで』

銀八
「……リーガンさん、バカ作者ですまん」

カズマ
「最後だ！！　『天破』さんからだ。『銀さんへ…ロリ巨乳ディールとフェイトさん、どちらの胸を触ってみたいですか？』」

銀八
「どんな質問だコラァァァァア！！　……ディールってどんな奴だ？」

カズマ
「これだ（写真見せ）。作者が一瞬でハートキャッチされたキャラらしい」

作者
『一人称が妾でトランジスタグラマーとか最強だろ……ディールは天破さんの小説、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～ＰＲＯＪＥＣＴ　Ｓ．Ｗ～』の主要人物、さらにＦ２０Ｃさんの小説、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　スクール・ラブ・パニック！！』にも友情出演しております。ぜひ読んでおくんなまし』

銀八
「んじゃ出てこいもう一人の俺」

銀時
「遊戯王な……んで答えは……」

フェイト
「銀時？（ゴゴゴゴゴ）」

……銀時の背後に、バルディッシュを構えたフェイトが立つ。

銀時
「ナ、ナンデショウカー？」

フェイト
「あははー。銀時がどんな答えをするのかな～って」

銀時
「イ、イヤ、キニシナクテケッコウデスヨ？」

カズマ
「そのしゃべり方わかりにくいぞ、金時」

銀時
「金時じゃねェェェェェェェェェェェェ！！　辰馬かお前は！！」

フェイト
「銀時～、無視かな、かなぁ？」

銀時
「それはティアナの台詞……ニギャァァァァァァァァァァ！！
まそっぷ！！」

銀八
「（まそっぷ……？）で、では天破さん、ディールの活躍を作者が期待してるそうだ。今回はここまでだ！！」

カズマ
「次回は……斗貴子らしいぜ。次回もお楽しみに！！」

第十八話『フェイト救出第三次計画……一次と二次はどこいった？』（後書き）

なかなか進まない……。

第十九話『列車内ではなるべく騒がないようにａｎｄドッペルゲンガーって恐ろしい』

ただの人間には興味ありません。
この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら、あたしのところに来なさい。以上。――涼宮ハルヒ

この台詞一つが、ハルヒの全てだとも言えなくはないよね～――泉こなた

はたから見たら迷惑すぎるんだけどな、オイ――柊かがみ

第十九話『列車内ではなるべく騒がないようにａｎｄドッペルゲンガーって恐ろ

――海列車、第６車両（貨物車）

ハルヒ
「なんだかねー……」

ハルヒは頭をかきながらつぶやく。その手には『無数の兵器』から取り出した剣――太陽剣グラムが握られている。

ハルヒ
「ぶっちゃけると……」

そう言う間にも、兵士がハルヒに飛びかかる。

「ぬあああああ！！」

ハルヒ
「よっ」

ハルヒはそれを半身でかわし、そのままの流れで……。

ハルヒ
「張り合い無さ過ぎよ！！」

斬り伏せる！！

ハルヒ
「第7車両に続いて、第6車両もクリア……弱っちいわねぇ」

美琴
「それには同感……あ、ここには電話たくさんあるじゃない。よかったー、連絡が取れそうね」

雲雀
「不甲斐ないね零夜。怪我はないかい？」

零夜
「まぁ心配はない……だが助かった。何でこんな所に？」

戒めを雲雀によって解かれた零夜は、手の動きと傷の具合を見ながら聞く。

雲雀

「そりゃこっちが聞きたいね……ま、今はそれどころじゃあない。とりあえずバレる前に一旦隠れよう」

ハルヒ
「隠れるって……どこによ」

雲雀
「決まってる」

雲雀はふっと笑い、天井を指差した。

雲雀
「こんな嵐の中、屋根に逃げるなんて流石に考えないだろう?」

紫
「準備、できたかしら?」

ぬらりひょん（総大将）
「もうとっくに出来とるわい」

紫を先頭に、精鋭部隊は準備を終え、学園の地下に入った。地下には広大な空間があり、そこには……

ぬらりひょん
「奴良組名物戦略空中妖塞『宝船』……遠出の戦には必須よ」

紫
「悪いわね、いきなり引っ張り出させて」

ぬらりひょん
「気にするな、四百年の付き合いじゃろーが」

こなた
「すっごいね～」

ルルーシュ
「こんな物を隠し持っていたとは……」

皆はきゃいきゃい言いながら乗り込む。そんな中、紫とめだかは外で話しこんでいた。

めだか
「宝船ならあっさり渡れるでしょうが……問題は突入です。宝船で

は目立ちますし……」

紫
「大丈夫。現場指揮なら私のがベテランよ……行ってる間の学園のことは頼んだわ」

めだか
「わかりました。では……」

紫
「それと」

紫は意味深に告げる。

紫
「『絶対に言わないで。』それと絶対に守りなさい。あなた達に任せるわ」

めだか
「わかってます。ではご武運を」

紫
「ええ、ご武運を」

紫を踵を返し、宝船に乗り込む。

ゆり
「紫さん！！　私達には別に移動手段がありますから……」

紫
「わかってるわ。では……」

紫は手に持つ傘をかかげる。

紫
「振り落とされんじゃないわよ！！　クロス学園発、Ｎ．Ｂ．Ｔ行き、『奴良組名物戦略空中妖塞』宝船！！」

ルルーシュ
「よし……出航だ！！　行くぞ！！　全て奪い返しに！！」

ＡＬＬ
『おおォォォォ！！』

学園のグラウンドが真っ二つに割れ、中から宝船が出現する。

そして飛行を開始し、風雨を物ともせず、突き進む。

こなた
「いや～、やっぱこういう登場は男のロマンだよね～」

かがみ
「おっさんかあんたは……」

そんな一幕もあり、宝船は学園がある陸を飛び出す。それをゆりが目で捉え、叫んだ。

ゆり
「いよぉし!!　こっちも行くわよ!!　覚悟はいいか野郎共!!」

式
「とっくに出来ているさ……!!」

カズマ
「うおおお!!　当然だァァ!!」

レナ
「レナも頑張るよ!!」

タバサ
「任せて……」

カズキ
「いよぉっしゃあ！！　燃えてきたぜ！！」

斗貴子
「いつでも構わん！！」

頼もしい言葉と共に、ゆりは雄々しく手を振り上げる。

ゆり
「ゴォジラァァァァァァァァァァァ！！　起動ゥウ！！」

タバサ
「ゴジラファイナルウォーズの統制官……」

ゆりの叫びと共に、海面が盛り上がり、巨大な怪獣が姿を表す。
雄々しく轟くその正体は、怪獣王……

――ゴジラ！！

ゴジラ
「ガァァァァァァァオウゥゥン！！」

ゴジラが唸りを上げる。ゆり達は背中についてある乗る所に飛び移った。

ゆり
「さぁ、ゴジラ、あの宝船を追いなさい！！　その先に、我らが倒すべき敵、そして救うべき仲間がいるわ！！」

ゴジラ
「ガァァァァァァァオウウン！！」

ゴジラはまた一声吼え、ゆっくりと宝船を追いだした。

ルルーシュ
「あの怪獣は……ゴジラか！！」

紫
「まだ体が小さい……初代はあの事件で死んでるから、見たところゴジラジュニアが成長したあの姿かしら」

その話に関しては『ゴジラ対デストロイア』を参照されたし。

首領パッチ
「ん、おい、なんかゴジラくわえてないか？」

紫
「うん？」

首領パッチに言われ、皆はゴジラの口を凝視する。そこには……

天の助
「食べられた！！　俺、やっと食べられたよォォォォ！！　おっしゃあァァァァァァァァァ！！」

天の助がいた。

ゴジラ
「ペッ」

天の助
「あ」

と思ったらすぐゴジラに吐き捨てられた。

首領パッチ
「て、天の助ェェェェ！！」

なのは
「あはは……あ、拾ってくるね」

ボーボボ
「まぁ天の助だから仕方がないな！！」

ルルーシュ
「だな……ん？」

なのはが天の助を拾って（足持ってひきずって）きてから、ルルーシュが気づいた。

ルルーシュ
「ちょーっと待て……なんかこの船におかしな奴らがいるぞ」

皆もそれぞれその三人をガン見する。

首領パッチ、天の助
「「おいそりゃ誰だ」」

ボーボボ
「おめぇらだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

首領パッチ、天の助
「「ギィヤァァァァァァァァァァァア！！」」

ボーボボが二人に見事なドロップキックをかます。

ルルーシュ
「お前もだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

なのは
「ディバイン……バスター！！」

ボーボボ、首領パッチ、天の助
『Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！』

そして結局、まとめてなのはのバスターでぶっ飛ばされる。

ボーボボ
「ぐ、おお……効いたぜ……まさかなのはがツッコミリストのルルーシュ・ヴィ・ブリタニアとつるんでいるとは……」

ルルーシュ
「なんかある意味すげぇ称号もらった気がするが」

首領パッチ
「確かに……見事なツッコミと砲撃だ……」

天の助
「こ、こんなもん食らっちまったら……死、死……」

ボーボボ、首領パッチ、天の助
『死んじゃわない☆』

かがみ
「さっさと死ねやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ボーボボ、首領パッチ、天の助
『ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

まさにシリアスブレイカーのボーボボ達に、かがみの『偽・螺旋剣擬き』が炸裂した。

ボーボボ
「こ、これは凄まじい。まさかティアナレベルのツッコミリストがいるとはな……」

首領パッチ
「世界は広い、ということだな」

はやて
「『いいこと言った！！』みたいなどや顔やめぇ。うざいわこのトゲ頭」

首領パッチ
「んだとぉ！？　三人娘の中でただ一人フラグたってねぇくせに何言ってやがる！！」

はやて
「ぐっさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

痛い所をつかれたはやてが倒れ込み、ｏｒｚ状態になった。アーチャーが肩を叩いてそれを慰める。

リクオ
「で、お前らは何でこんな所にいるんだ」

ボーボボ
「うむ、実は気になる噂があってな」

ボーボボはそのたくましい腕を組み、似合わぬ真剣な口調で話し出した。

ボーボボ
「聞いた話では、Ｎ．Ｂ．Ｔに俺達が以前倒した敵がいるらしい」

首領パッチ
「そういうことだ。当然真拳使いだし、ハジケリストだからお前らじゃどう転んだって勝ち目はねぇ」

天の助
「そこで、俺達が来たって訳だ」

氷麗

「なるほど……同じジャンプとして、心強いです」

ボーボボ
「時期は微妙にずれてはいるがな」

ハジケリスト対策の強力な援軍が加わり、陣営はさらに活気づく。
そこに、電話のメロディーが響いた。

当麻
「来た、連絡だ！！」

ＡＬＬ
『ッ！！』

ここは海列車屋根の上。そこに美琴は電話を持ち出し、連絡をとっていた。他の皆も体が濡れるのも構わず、屋根の上にいる。

美琴
「ー ー当麻？」

当麻

『美琴か。……とりあえず、状況は？　フェイトと零夜は？』

美琴
「零夜はとりあえず助けたわ……けどフェイトちゃんはまだ捕まったままよ」

当麻
『そうか……あ、悪い、紫さんに代わるな』

紫
『……美琴？』

当麻から紫に代わる。指示は紫が出すから当然だろう。

紫
『言いたいことは1つだけ……いいわよ、暴れても』

美琴
「……上等！！」

ハルヒ
「あ、そうそう」

ハルヒが後ろから美琴が持つ受話器をもぎ取った。

ハルヒ
「フェイトちゃんなんだけど……無理やり従わされてるみたい」

紫
『……概要を聞かせなさい』

ハルヒは手短にフェイトが役人に虐待されていたことを話す。

紫
『……なるほど。分かったわ。あんた達もそのままじっとは出来ないでしょ。暴れて来なさい』

ハルヒ
「分かってるわよ。私は……」

ハルヒはなんと、握力で受話器を握りつぶす。その目は、怒りに燃えていた。友人を傷つける奴は許さない、ハルヒ、男気ＭＡＸである。受話器が潰れるのも関わらず、ハルヒは宣言する。

ハルヒ

「……止まる気ないから」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

通信が切れる。紫はため息をつき、電話を置く。

紫
「……任せたわよ、ハルヒ、美琴、雲雀、零夜」

美琴
「じゃあ、これからどうするの？」

ハルヒ
「もう私達がいることは間違いなく知られてるわ。だからこそこそしたって無駄。こっそりやれなくなったのは痛いけど……逆に、大胆な方法がとれるようになったわ」

元々バレるの覚悟で派手にいっても良かったんだけど、なんてハルヒはつぶやき、闇の炎を放出する。

零夜
「確認した所、雑魚（兵）達は5、6、7号車に固まってて、1号車にフェイトさん、2、3、4号車に敵の主力みたいだ」

ハルヒ
「……好都合ね。みんな、作戦があるわ。ちょっと耳貸しなさい」

皆が耳を寄せ、ハルヒは手早く説明を始めた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

7号車。ここはハルヒ達によって壊滅させられていたが、現在は忽然と消えたハルヒ達を探すために、たくさんの兵がいた。

「しかし、こんな所に隠れる場所なんて……」

ない。そう兵は続けようとした。……が、それはかなわない。なぜならば……

その瞬間、7号車が轟音と共に爆発したからだ。

7号車にいた兵は、断末魔をあげる間もなく吹き飛ぶ。

「な、なんだ!?」

「爆弾か!?」

兵達は爆発した車両に向かう。人間の性質上、仕方のないことではあるが、それはハルヒに狙いを定めさせることでしかなかった。

ハルヒ

「案の定ね……だけどこれほど上手く行くとはね……雑魚はほぼ全員が5、6号車に集まってる。やっちゃいますか!!」

ハルヒの闇の炎が、5、6号車を舐めるように包む。ハルヒは4号車の上に移り、後も振り向かずに指を鳴らした。

ハルヒ

「……キラークイーン」

またもや轟音が轟き、5、6号車が跡形も無く吹き飛んだ。きっちり他に被害が無いように爆発の規模を調整している所、抜け目がない。

ハルヒ
「私にかかればこんなもんよ！！　海列車三車両分これでざっと……７０は雑魚が消えたでしょ」

美琴
「ま、こんなもんよね……じゃあ４号車に行きましょうか」

雲雀
「……そうだね。よしんば相手を抜かしていっても結局ははさまれるだけ。なら順次噛み殺していこうか」

ハルヒがうなずき、扉を開けた。そこには……

美琴
「えっ……？　あ、あなたは……メディアさん！！」

キャスター
「……そうよ、美琴ちゃん」

そう。いたのはクロス学園教師の葛木教諭の妻であるメディアこと、キャスターである。

ハルヒ

「なんでこんな所に……まさか！？」

キャスター
「そのまさか、よ……不覚にもセイバーに負けて捕らえられてね……令呪使われてるの」

キャスターはセイバーに襲われて敗れ、捕らわれて令呪を使われ、強制的に従わされているらしい。

キャスター
「……私が助かるかどうかは、あなた達にかかってる。私は令呪を使われてるから手加減は出来ないけど……」

キャスターは自らの懐から何かをだし、美琴に投げる。美琴はそれをキャッチした。

美琴
「これは……『破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）』。……これであなたを刺せと？」

キャスター
「そう、そうしたらリンクは切れる……頼んだわよ。私は……手加減出来そうにない！！」

キャスターが戦闘体勢に入る。その瞬間……

ぷす、と美琴がキャスターを刺した。

キャスター
「……あら？」

美琴
「いや、まともに戦ったら長引きますから、台詞に割り込ませてもらいました。キャスターさんが令呪に抵抗していたから出来たんですが」

あはは、と笑う美琴。キャスターの首もとから黒い虫――セイバーがランスロットを操っていた虫――があふれだし、床にしみを作った。

キャスター
「……なーんか納得いかないけど、まぁいいわ。これで私は自由の身……協力するわよ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

セイバー
「おい、お前」

「……なんだい、セイバー」

海列車二号車。セイバーが正面に座る男に詰問していた。

セイバー
「なぜキャスターを一人で四号車に置いた？　言うのは悪いが、キャスターは私達の中では一番力は無い。奴らは高校生とはいえ一人一人がサーヴァントクラスだぞ。キャスター一人では太刀打ち出来ん」

もっともな意見だ。キャスターは魔術は強力だが、サーヴァント内では一番力が弱い存在だ。そんなキャスターを一人で四号車に置くこの男の神経がセイバーには理解できなかった。

「そうだね……反論のしようもないよ」

だが、と男は笑いながら続けた。

「もとからキャスターが相手にやられるのは計算ずくだ、としたら……？」

セイバー
「……何だと？」

男は、意味ありげに微笑する。

「キャスターはもとから捨て駒……あの女の利用価値は、ある女をキャスター自身の中に閉じ込めておくことさ」

くっくっく、と笑う男。

「楽しみだね……あの穢れた姿を、奴らが見たらどんな反応をするか……」

ハルヒ
「あ、あんた……何よ、あんた！！」

「見りゃあ分かるじゃない？」

ハルヒ
「わ、わかんないわよ！！」

目の前に起こったことが信じられない。ハルヒはそんな声色で言う。それも無理はない。

キャスターから出た虫が再び動き、形を作ったのは１０秒前のことであった。そこから生み出された『全身で黒を体現したかのような女』は、体の調子を確かめるようにストレッチをしている。

キャスター
「……まさか私の体の中に埋めこんでたとはね……」

「そうよ。あんたははなっから捨て駒。私を出すためのね……さて……はじめまして『私』」

黒き女は自らの標的に向き直る。その顔は、狂気に染まっている。殺したくてたまらない、そんな相手が目の前にいるかのようであった。

「……あんたが何なのか、滅茶苦茶気になるけど、聞くのは野暮ってもんね、『私』」

標的にされた女も構え、戦闘体勢をとる。同じような茶髪。二人は顔立ちもよく似ていた。ただ違う所は……

「そうよ、『私達』に対話なんていらない。いるのは……あなたの死、それだけ」

黒き女は、体を闇を表すかのようなドレスで包み、その美しい顔にはイレズミのような赤いラインが走っている。

「……どうにも私に殺したいみたいね、『私』？」

片や標的にされた女は、自らがいつも着ている制服に、美しい顔は、傷一つ無く美しいまま。恐らくはこの世で一番似ている二人だろう。

「そりゃそうよ……だって……」

「そりゃそうよね……だって……」

一一だが、一番似ていないとも言える。この二人は、似ていて対極。絶対に相容れない。

「「あんたとは絶対に相容れない。見た目で分かる。そうでしょ？『私』？」」

雲が切れた。月の光が窓から差し込む。その光が……

一一対峙する、二人の御坂美琴を映し出した。

セイバーオルタ
「セイバーオルタと」

黒美琴
「黒美琴の」

ＡＬＬ
『贈り物こ～な～！！』

セイバーオルタ
「では始めるぞ、セイバーオルタと黒美琴の贈り物こ～な～。敵で名前が分かった私と美琴がやることになった」

黒美琴
「つーか、私一応ゲスト出演よ？　こんなことやらせていい訳？」

黒美琴は、エターナルさんの小説『とあるリリカル銀魂／ＳＴＡＹ　ＮＩＧＨＴストラトス』からの出演です。ありがとうございます！！

黒美琴
「本編では未だにほとんど出番ないのよ……」

セイバーオルタ
「まぁそれはエターナルに頼むのだな。では初めの贈り物だ。ラムネさんから、ショットガン『バニラミント』だ」

黒美琴
「何よその美味しそうな名前。あるとしたらチョコミントだけど」

セイバーオルタ
「この瑠璃色に光るフォルムがポイントらしい……しかしフォルムより機能のが重要だろう。機能は？」

黒美琴
「ダイヤモンドダストを放ち、相手を雪だるまに出来るって」

セイバーオルタ
「ふむ……では、持つ者はこいつだ」

ルキア
「私だ。ありがたくいただくぞ」

黒美琴
「んじゃ次ね……『天破』さんの所の『ディール』から当麻へ……『手作りお弁当』」

セイバーオルタ
「食べていいか？」

黒美琴
「さすがに駄目でしょ……にしても何だかムカムカしてくんだけど（黒美琴は当麻の事が記憶から消えていますが、微妙に覚えているようです）」

紫（いきなり登場）
「ではこの写真を見てちょうだい。こいつをどう思う？（ディールの写真を見せ）」

黒美琴

「はぁ？　何で、……よ……ガクッｏｒｚ」

セイバーオルタ
「み、美琴！？　どうした……な！？（写真を見る）　……く……負けた……ｏｒｚ」

紫
「……二人がｏｒｚになったから弁当は後で当麻に渡すわ。鉄槌と共に。あと二人がｏｒｚになったのは『ディールはロリ巨乳。もちろん黒美琴やセイバーオルタなんて及ばない』って言っとけばすむわ。では次回もお楽しみに～」

――その後

美琴
「くらえ雷の暴風！！」

当麻
「それはネギまだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

うっかり手作りお弁当を見られた当麻が美琴に追われていたそう

な。

第十九話『列車内ではなるべく騒がないようにａｎｄドッペルゲンガーって恐ろ

シリアスブレイカー、ボボボ組がやっと出せた！！

そしてもう一人、やっと黒美琴出せた……。

第二十話『最大の敵は自分である』（前書き）

「だから、ごめん――――それでも私は、きっとアンタに生きて欲しいんだと思う」――御坂美琴

「……涙をそそるね」――泉こなた

「……確かにね」――涼宮ハルヒ

第二十話『最大の敵は自分である』

「人は自分自身には勝てない……良くて引き分けだ」

男はくっくっと笑う。その前でセイバーオルタはニヤリと笑う。楽しくてたまらない、そんな笑みだ。

セイバーオルタ
「なかなかどうしてセンスがあるな。『御坂美琴オルタ』とは……で、あいつは何なんだ？」

「平行世界の御坂美琴さ。マキリの虫に犯され、精神が崩壊して生まれた女だ。御坂美琴の負の象徴であり、御坂美琴に戻ろうとしても到底戻れない哀れな存在……そして、この世界の御坂美琴にとっては……」

そこで、男は一段と笑みを深める。

「……いくらあがいても、届かない存在だ」

――さぁ、あがいて見せたまえ、御坂美琴――

美琴
「とにかく……ここは私に任せて。みんなはさっさと次行って！！」

美琴が手をバチバチさせながらハルヒに向かって指を差す。

ハルヒ
「一人で大丈夫なの？」

美琴
「当然よ。こんな奴に負ける訳ないじゃない」

黒美琴
「……ふぅん」

みんなを行かせようとする美琴に、黒美琴は汚い物を見るかのような視線を浴びせる。まるで『あんた馬鹿ぁ？』とでもいいそうな視線だ。

黒美琴
「行かせるとでも思ってんの？」

黒美琴の手が黒く光る。黒き雷が、うなりを上げて飛んだ。

キャスター
「く！！」

いち早く反応したキャスターが防壁を張る。しかし、それより速く反応した者がいた。

美琴
「はああ！！」

美琴が黒き雷に自らの電気の槍をぶつけ、軌道をそらせた。挑戦的に黒美琴に向かって中指を立てる。

美琴
「あんたの相手は、私でしょ？」

黒美琴
「……ははっ！！」

黒美琴が笑う。純粋な狂気が顔に現れる。

ハルヒ
「上から回るわよ！！」

零夜
「ああ。美琴、死ぬなよ！！」

美琴
「死なないわよ！！」

ハルヒ、雲雀、零夜、キャスターが外に飛び出す。美琴と黒美琴は改めて相対することとなった。

黒美琴
「あ～あ、逃～げられた。殺す人数が減ったじゃん」

美琴
「よく言うわ……あんたさ……」

いかにも残念そうな黒美琴を、美琴は呆れたように見る。

美琴
「ハルヒ達をわざと逃がしたでしょ？」

黒美琴
「……あら、ばれた？」

黒美琴はクスクスと笑った。先ほどまでの残念がった様子はどこへやら。クスクスと笑い続ける。

美琴
「本気で殺す気なら、今のあんたの電力はありえない。私の普通の2／3しか電力を持たない槍で、ハルヒ達を殺そうなんて馬鹿げた発想は無いわ」

黒美琴
「……案外鋭いわねぇ『私』。ま、欲を言えばあの三人も殺したかったのよ？」

黒美琴は髪をかきあげた。頬の赤いイレズミのような線が映える。

美琴
「どうやらあんたは私より馬鹿みたいね？　ここは列車の車両。本気でやれば逃げ場も無いここなら私たちを一網打尽に出来た。それをしなかったのはどういう了見よ？」

美琴は挑戦的な口調で蔑むが、それを黒美琴は一笑に付した。

黒美琴
「あんたは『私』だけど、『私』の思考回路は理解出来ないみたいね？　さっき言ったじゃない。『私がいるのはあんたの命、それだけ』って。私にとって他の奴らの命なんて、虫けらに等しいのよ」

そう、虫けら。黒美琴にとっての虫けら以外とは、必ず殺す、と思う相手、御坂美琴に他ならないのだ。だから美琴を潰す。一対一で。

黒美琴
「他の虫けらの命は一瞬で潰す。だけどあんたは違う……とことん恐怖を味あわせ、それからゆっくり料理してあげる」

美琴
「……納得。とことんやり合いたいって訳ね……いいわ、やったろうじゃない！！」

美琴が額に手をやる。それに対応して、黒美琴も手を上げた。

美琴
「料理されんのはあんたの方よ！！」

黒美琴
「私を舐めると死ぬわよ？」

放たれた雷がぶつかり合い、轟音と共に車両を揺らした。

零夜
「で、何なんだお前は」

第三号車天井。次元零夜は一人の男と対峙していた。

「……」

零夜
「……黙ってちゃわからねえんだが」

何もしゃべらない男に、零夜は不信感を抱いた。

零夜
”夜だからって気にしなかったが……あいつの体は黒い。まさかさ

っきの黒美琴みたいな奴か？〟

零夜は考えながら戦闘態勢をとる。零夜の拳が握られ、明確な戦闘の意志表示が出た瞬間、沈黙していた男が顔を上げた。

「[redacted]！」

砲哮。猛り叫ぶその唸りが響き渡る。理性を無くしたその叫びは、零夜の動きを一瞬止めるのには充分だった。

零夜
「な、何……」

男
「祈レ！！　『サンタテレサ』！！」

男は狂気に満ちた声で叫び、手に持つ三日月型の大刀を振り上げる。激しい煙が上がった。

零夜
「何だってんだ次から次へ！！」

零夜は顔を覆い、煙を透かしみる。煙が晴れたそこには、先ほどの黒い男が四本の腕にそれぞれ大鎌を持って立っていた。そう。零夜は知る由も無いが、この男の名は――ノイトラ・ジルガ！！

ノイトラ
「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！」

零夜
”この叫び……間違いない、こいつ狂化してやがる！！”

ノイトラの突進を間一髪ジャンプで避け、零夜はノイトラの背後に回った。

零夜
”あれは始解……いや、『帰刃（レスレクシオン）』だな。てことはあいつは破面（アランカル）か！！”

面白い。零夜は口元を歪めた。

零夜
「お前には俺の真名を教えといてやる。死ぬ奴は自分を殺した奴の

名前ぐらい……知って死にてぇはずだからな」

零夜は拳を開き、その手に剣を出現させた。

零夜
「生成の達人（メイク・マイスター）、次元神、俺の真名は『アクロス』……よく覚えとけ、お前を殺す、男の名だ」

四号車では美琴と黒美琴が、三号車では零夜と狂化したノイトラが闘っているのに反して、二号車は平穏そのものだった。敵がいないから当然ではあるのだが。

「黒美琴と狂化ノイトラがいるんだ……恐らくは止まっているはず」

セイバーオルタ
「まぁな。……だが暇だ。何かハプニングでも起こらんかな……」

余裕その物なこの二人。よほど自分の強さに自信があるのか……。

「ふむ……確かにいささか暇ではあるなぁ、セイバーよ」

「そうですね。全く今は暇すぎます」

と、セイバーと通路を挟んで向かい側にいた男と女がセイバーに話しかけた。旧知の間柄なのか、幾分か砕けた感じを受ける。

「結局私は誰とも戦ってはおらんからなぁ。ふむ」

「相変わらずの戦闘狂っぷりですね」

男はニュアンスが古風なしゃべり方だ。女は礼儀正しい口調であり、たおやかな印象を受ける。

「まぁ気を静めてくれ。侵入者が出た時点でもう充分なハプニングだ。まさかこれ以上のハプニングは……」

「起こるわよ」

男の言葉が誰かに遮られる。そして……扉が吹き飛んだ。

セイバーオルタ

「ッ！！　来たか！！」

「ふむ……楽しめそうよな」

セイバーが立ち上がり、古風な男も立ち上がる。そして吹き飛んだ扉からは……。

ハルヒ
「ハプニング、起こしに来たわよ」

雲雀
「ふん……」

ハルヒ、雲雀の二人が現れる。ハルヒの手には先ほどと同じ太陽剣グラム。雲雀もトンファーを構えて戦闘体勢だ。

「まさか来るとはね……君達、黒美琴とノイトラはどうした？」

ハルヒ
「美琴と零夜に任せてきたわ。……私達はあんたを狩りに来た訳」

ハルヒは挑発的に中指を立て、左右に振る。ファッ〇ユーのサイ

ンだろうか。

ハルヒ
「ちゃっちゃとフェイトちゃんを助けたいのよ。だからちゃっちゃとどきなさい」

1号車。フェイトは黙し、椅子に座りこんでいる。美しい顔には傷が目立ち、目に安らぎは無い。

フェイトはこの広い1号車に一人で座っており、またそれがフェイトの孤独と悲観を見事に現実に現し、見た目でも分かるように見事に表されている。

そんなシリアスな空気は、外から聞こえるある小さな音に遮られた。

それは何かを叩くような小さいコンコンという音。先ほどから吹き荒れる暴風雨が窓にあたるのとはまた違う、厚みがある音。それが三度、コンコンコン、と響いた。

一度目は、フェイトは気づかない。それはそうだ。こんな暴風雨

の夜にしかも海列車の上、誰かが窓の外にいるなんて誰が思うだろうか。気づかないのも無理はなかった。

フェイトが気づかないと見た窓の外の人物は、先ほどよりも強く、また回数も四回に増やし、コンコンコンコン！！　そこまでしてフェイトはやっと気づいた。

フェイトは目を窓の外にやる。その目が大きく見開かれた。

フェイト
「キャ、キャスターさん！？」

キャスター
「……どうも、お嬢ちゃん」

浮遊の魔術を使ったのだろう。そこにはキャスターがふわふわと浮いていた。

四号車。ここは先ほどより一段と様変わりしてしまっていた。鮮血と破壊の跡。そしてまた、女が黒き女に吹き飛ばされ、破壊の跡がつく。

美琴
「ああっ！！」

黒美琴
「うふふ……ふふふ、あはははは……」

美琴は黒美琴にただただ一方的に蹂躙されていた。もはや元は自分だったことが信じられない程の圧倒的な強さ。レベル６。その道へと至ったかのような。

だがそれでも美琴は諦めない。不屈、その言葉がピッタリ来る戦いっぷりを見せる。雷が吹き荒れ、黒美琴に襲い来る。

美琴
「舐め……るなーっ！！」

黒美琴
「……削るわよォォ？」

しかし黒美琴は、その雷を自らの足元より吹き上げた影で全て飲み込み、そのまま……。

黒美琴
「がーりがり」

美琴
「アァァァ！！！！！！！」

美琴に影の刃を食らわせる。刃が美琴の肉を裂き、血が紅蓮花のごとく吹き出す。

黒美琴
「堕ちてしまうのも楽しいのに。そんなにキレイなままでいたいわけ？」

美琴
「うる……さいっ……」

しかし、それでも美琴は諦めない。不屈の闘志に身を焦がし、手をつき、立ち上がろうとする。

美琴
「あんたは……わかって……ないのよ……私って……人間をね……」

黒美琴
「……へぇ……」

黒美琴の表情が変わる。その立ち上がる美琴の傷を、黒美琴は容赦なく踏みにじる。血が舞い散り、絶叫が響く。

美琴
「アァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」

黒美琴
「あれぇ、いま、何か踏み潰しました、わたし？」

そのまま美琴を蹴り飛ばし、黒美琴はニヤニヤ気味の悪い笑みを浮かべる。もはや美琴は立ち上がるのもやっとである。まさに一方的な蹂躙であった。

美琴
「ハァ……ハァ……」

しかし、美琴にもまだ手段はあった。列車という狭い範囲での戦いである以上、使いにくかった美琴最強の必殺技。

美琴はポケットのコインをまさぐり、その技を出す準備をする。
黒美琴も当然、美琴が何をしようとしているか気づく。

黒美琴
「『超電磁砲（レールガン）』……か。まぁ妥当よねェ」

美琴も黒美琴が自分が何をしようとしているか気づくのは承知の上。超電磁砲の威力、速度ならばそのハンデも関係無しに撃沈出来る。黒美琴も自分の技は初めて食らうだろうから、初見である。ならば避けれる技ではない。

美琴
「わかってんなら……」

コインに電力がたまっていく。獲物を狩ろうと牙を研ぐ。

美琴
「避けてみなさいっ！！」

そして、撃ち出される超電磁砲（レールガン）。唸りを上げて黒美琴の命を奪おうと飛ぶ。

――それに対して、黒美琴はわずかに口角を吊り上げ、右手を上

げた。

黒美琴
「――『超電磁砲・闇』（レールガン・モルガン）」

――そして、それが放たれた。黒美琴が放った超電磁砲（レールガン）は、美琴の超電磁砲（レールガン）をやすやすと飲み込み、威力の衰えを見せず、車両を突き破った。

黒美琴
「うふふ……ふふふ、あはははは……あはははははは！！」

煙が晴れる。御坂美琴は、体中を血に濡らせ、倒れ伏していた。

黒美琴
「あっれぇ、今の……軽めに撃ったのになぁ……あはははははは！！」

狂ったように笑う黒美琴。しかしそれに答える人物はいない。美琴は完全に、意識を失っていた。その美琴に近づき、影を美琴首もとに当てて黒美琴は言う。

黒美琴

「今ここで、あんたの首を取る事は簡単よねぇ……だけど、それじゃあつまらない……もっと、もっと絶望を与えてあげる」

黒美琴は車両から出て、なんと四号車を列車から切り離した。重傷を負った美琴を乗せ、切り離された四号車は列車から離れていく。

黒美琴
「次に会った時は……そう、まずはあんたの恋人……」

――上条当麻をあんたの目の前で殺し、しかる後に、あんたをいたぶっていたぶって殺してあげる。くすくす……うふふ……ふふふ、あははは……あっはははははははははは！！――

黒美琴
「教えて」

ＡＬＬ
『黒美琴先輩～！！』

黒美琴
「いや、何で私？」

セイバーオルタ
「君の人気のせいだよ」

黒美琴
「そんなに？」

セイバーオルタ
「……私に比べたらな。グスッ」

黒美琴
「で、では質問行くわよ。一つだけだけど。『武田軍兵士　清坂剣麻』さんからよ。『ハジケ組が見事にシリアスぶち壊したので、その三人に、オシリスの天空竜の攻撃！！　その後、本家（キン肉マン、テリーマン）マッスルドッキングをボーボボと天の助に、マッスルスパークを首領パッチに食らわせておいてください。それと、この作品にモスラ、キングギドラ、メカゴジラは出ますか？』」

セイバーオルタ
「ボーボボは？」

黒美琴
「もうあっちで食らって伸びてる。『遊戯さァァァァァァァァァァァァァん』とか叫んでた。で、質問だけど……申し訳ないけど、

出ないそうよ。ごめんなさい」

セイバーオルタ
”なんだ？　嫌に礼儀がいいな……”

黒美琴
「アァァァァァァァァァァァ！！　やっぱ似合わないでしょこんなの！！」

セイバーオルタ
「実はストレスたまってたんかィィィィ！！」

黒美琴
「んじゃ贈り物よ！！　ラムネさんから！！　『ハローキティといっしょ！　ブロッククラッシュ１２３！！』よ！！　ってこれクソゲーオブザイヤーじゃない！！」

セイバーオルタ
「ま、まぁ貰ったんだ、プレイしてみるか」

黒美琴
「……んしょ」↑プレイ中

セイバーオルタ
「……むっ」↑プレイ中

黒美琴
「……あ、死んだ」↑プレイ中

セイバーオルタ
「私もだ」↑プレイ中

黒美琴
「……」↑プレイ中断

セイバーオルタ
「……」↑同じく

黒美琴ａｎｄセイバーオルタ
『……出来るかァァァァァァァァァァァ！！』↑ゲームをぶん投げ

黒美琴
「なによあの回避不能弾幕は！？」

セイバーオルタ

「マール・キサラギは２０回当てても死なないぞ……？」↑５０回当てれば死ぬそうで

黒美琴
「いや、まさにクソゲー。難しさな意味で」

セイバーオルタ
「だからラムネさんはもう一つ送ってきたぞ。『覇王鬼帝と逸庶！マインドクラッシュ１２３！！』だ」

黒美琴
「名前からしてヤバすぎるわ！！　ラムネさんは覇王鬼帝と戦っとけ！！　今回はここまで！！　次回を待て！！」

第二十話『最大の敵は自分である』（後書き）

なんか黒美琴の設定がちょいちょい変わってます。エターナルさんすみません……。

第二十一話『奇策とかいう作戦は成功したためしがない』（前書き）

『また勝てなかった』――球磨川禊

「おめーは間違いなく漢だよ」――坂田銀時

『そうでもないさ』――球磨川禊

第二十一話『奇策とかいう作戦は成功したためしがない』

零夜
「うおらぁ！！」

ノイトラ
「■■■■■■！！」

ノイトラの四本の鎌をかわしながら、剣で斬りかかる零夜。彼は『生成の達人（メイク・マイスター）』という蘇生薬や伝説クラスの神具・宝具はもちろん、自ら考えたオリジナル武器も生成出来る次元神ならではの能力を持ち、それによって生み出した剣で戦っていた。通称、次元零夜の真骨頂その1。

強い能力ではあるが、だからといってチートとは言い切れない。彼は生み出す事は出来ても、それを扱う技能がまだ半人前なのだ。いや、それでも常人から見たら強い部類に入るのだが。

その半人前さを自らの手数で補うのが零夜の基本戦術だが、いかんせん一護やリクオ、ランサーやアーチャーやセイバーなど、武芸に優れた者が相手なら苦戦するであろう。

零夜

「よっ！！」

ノイトラ
「■■■！！」

しかし、今回の敵、ノイトラは狂化しており、武芸もくそもないただの力まかせ戦法だ。ノイトラが武芸で零夜の上に立てない以上、多彩な攻撃手段を持つ零夜の手数が勝る。

零夜
「行け！！　『王の財宝』もどき！！」

剣を多数生み出し、ノイトラに放出。ノイトラが鎌を振り回し剣を弾いた所を……。

零夜
「真熱血パンチ！！」

懐に素早く飛び込み、拳をボディに振るう。どっかの宇宙一のサッカー馬鹿中学生キーパー兼リベロが使用する技だが、気にしない。

円堂
「へっくし！！」

さて、パンチを食らったノイトラは大きくのけぞった。十刃最高の硬度を誇るノイトラの鋼皮（イエロ）だが、零夜のパワーならそれなりにダメージを与えれそうだ。

零夜
「続けてくらえ！！」

それに乗じてあざやかすぎるローリングソバットを顔面にかます。
ノイトラはたまらず列車から吹き飛んだ。

零夜
「よし！！」

この海に飲まれては、いかに破面と言えど厳しいだろう。しかもいまのローリングソバットで奴の顔面がへこみ、顎が砕けた手応え……いや、足応えがあった。顔面陥没に顎粉砕骨折。普通の奴なら……いや、普通の奴で無くとも、気絶クラスの一撃だった。

――だから、吹き飛んだノイトラが響動（ソニード）で追ってくるなんて思いもしなかった！！

ノイトラ

「■■■■■■■■■■！！」

零夜
「な！？」

ノイトラの突進を紙一重でかわす。……なんで顎を砕いたのに喋れるのだろうか。理解不能だ。

零夜
「まだ死んでねーのかよ！！」

零夜は舌打ちしつつ、短剣を作って投げる。ノイトラはあっさり弾くが、それはおとり。

零夜
「『空間掌握（コンプレクシオー）』」

突如としてノイトラの四肢の先の空間が裂け、ノイトラの四肢を捉えてはりつけにした。『空間掌握（コンプレクシオー）』。次元神の息子次元零夜の真骨頂、その2である。名前の通りあらゆる空間を掌握し、空間転移や無限収納が出来る力である。ただしまだ完璧ではない為、転移は1回5mが限界で収納にも限りがある。

使いどころが難しく、さらに妙に中途半端なため、使いにくいのが現状だが、今のように微妙に空間を作ったり、零夜は上手く使いこなせてはいる。

零夜
「今度こそしまいだ！！」

零夜は剣を作って飛びかかる。……勝利を焦ったそれは、軽率な行動だった。

次の瞬間、零夜の腹が何かに貫かれた。零夜は驚きに目を見開き、自らの腹を貫いた物……封じたはずの、ノイトラの手を見る。

零夜
「……ぁぁあっ！！」

零夜は剣で腹を貫くノイトラの腕をぶった切り、大きく飛び退いた。口の中に血が混じる。朦朧とする意識をつなぎとめ、何とか『生成の達人』で薬を作りながら零夜はノイトラを睨む。

ノイトラが吠えた。斬られた腕が再生し、元の数に戻る。元の数。それは四本ではない。……八本だ。

零夜が飛びかかる瞬間にはやした四本の腕を加えた八本の腕を振りかざし、ノイトラは雄叫びをあげた。

「たった二人でかなうとでも思ってるのかい？」

ハルヒ
「さぁね。答える気ないし」

ハルヒと雲雀は二号車で敵の幹部格と対峙していた。

先に言っておくと、ニ対四である。しかも一人の男は零夜を一撃で斬り伏せる腕を持ち、一人はセイバー。ハルヒ達に勝ち目は薄かった。

セイバーオルタ
「何かある口振りだな」

ハルヒ
「答える気ないって言ってんでしょ」

雲雀
「全く、日本語がわからないのかい？」

しかし、それでもこの二人は余裕しゃくしゃくである。何かあるのか、セイバーは警戒する。しかし、そこでセイバーの前に男と女が出た。

「セイバーよ。ここは私達に任せてはくれんかな？」

セイバーオルタ
「しかし、こいつの口振りだと……」

「心配ありません。どんな罠があろうと、そうそうやられる私達じゃありませんよ」

男はハルヒの前、女は雲雀の前に移動する。最初にしゃべっていた男は、二人を見て息をはいた。

「いいだろう。ならば君達に任せよう」

「「御意」」

四人が対峙する。ハルヒと雲雀はちらりと視線を合わせ、頷き合った。

ハルヒ
”予想通り、乗ってきたわね……よしよし”

ハルヒは心の中で呟く。実は、ここで闘いをおこす事自体が、ハルヒと雲雀の作戦である。まぁそれは後で説明するとして、今は戦闘に戻ろう。

ハルヒ
「さて、先に名前でも聞いとこうかしら?」

ハルヒが剣を構えて聞く。雲雀もトンファーを持ち、戦闘体勢。

相手の男女は、その言葉に頷いた。

「いいだろう……アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。これで満足かな?」

「サーヴァントライダー。主の命により、あなたを穿つ」

海列車一号車。そこで、フェイトとキャスターは向かいあって座っていた。フェイトが口火をきる。

フェイト
「どういう事!?　キャスターさんは操られてたんじゃ……」

キャスター
「ま、色々話すと長くなるんだけどね。簡単に言うと……」

ハルヒ達が来た→洗脳がとけた→フェイトを助けにきた

キャスター
「みたいな？」

フェイト
「……はぁ」

キャスターのあまりにも簡略化説明をポカンとして聞くフェイト。まだ実感していないようだ。

キャスター
「さっきも言ったように……この列車には今ハルヒ、美琴、雲雀、零夜が暴れてる。私はそのスキにここに来たのよ」

さらに、とキャスターは続ける。

キャスター
「紫やなのはちゃん達も屋形船でこの線路を追いかけてきてる。何やら大人数を引き連れてね」

フェイト
「……っ」

キャスターは立ち上がり、二号車を見る。

キャスター
「はっきり言って操られてるセイバー、アサシン、ライダー、それに黒美琴に『あの男』は正直私でもヤバい奴らよ。今はハルヒ達が足止めしてるけど、厳しいことに変わりはない。だから今逃げれれば……それに越したことは「待って！！」……？」

キャスターの言葉をフェイトは強く遮る。

フェイト
「どうしてそんな事に……！？　私はみんなにちゃんと別れを言ったはず！！　私はもう二度と……あの教室には戻らない！！」

フェイトは悲痛に叫ぶ。キャスターは無言でそれを見つめていたが、やがて口を開いた。

キャスター
「フェイト。あなたはあいつらと取引をしたわね」

フェイト
「……うん。だからだよ。私にはN．B．Tに行く理由があるんだ」

決意をこめたフェイトの瞳。美しく、さらに力のこもった目。――しかし、その目は次の瞬間、曇ることとなる。

キャスター
「……フェイト、あいつらにはね……あなたの欲しい物を叶えてくれる力なんて無いわよ」

フェイト
「……え？」

キャスター
「全て嘘っぱち。フェイト、あいつらは……あなたを騙したのよ」

キャスターから告げられる真実。フェイトはまんまと騙されたのだ。フェイトの瞳が曇る。その端から、一筋の涙がこぼれ落ちた。

さて、所変わって三号車。零夜対ノイトラである。

零夜は先ほどまでは有利に戦いを進めていた。ノイトラの四本の腕を封じ、鋼皮（イエロ）を切り裂いてダメージを与える。

しかし、ノイトラの腕は今や八本。いくら零夜でも苦戦は必死だろう……。

とでも思ったかな、読者の皆さん？　奴を誰だと思っている？

次元零夜、次元神！！　その彼が腕が八本に増えた所で苦戦をするとでも！？

零夜
「腕が八本だろうが百本だろうがムゲン・ザ・ハンドだろうが……」

先ほど貫かれた腹を『生成の達人』で作った薬で癒やした零夜。
不適に笑って剣を握る。

零夜
「全部止めたらすむ話なんだよ。単純な話だ」

その前には、今度は八本全てを空間に縫い止められ、またはりつけにされたノイトラがいた。懸命にもがくが、はずれない。

零夜ならここで真正面から飛びかかり、剣で一刀両断にも出来たろう。単純に終わらせるためなら、それが良かったかもしれない。が……。

零夜
”それでは、また新しい腕で痛手を負いかねない……念には念を、だ”

零夜は剣を空間に放り込む。そして、何事かをつぶやいた。

零夜
「Ｖｅｒｄｅｔｔｏ　ｄｉ　ｆｅｒｒｏ（ヴェルデット　ディ　フェッロ）」

大気が渦巻く。零夜が手を振り上げる、と同時に渦巻く大気が集まり、巨大な拳を作り上げた。空間掌握――その最たる力が、発揮される。

零夜
「――『裁きの鉄槌』」

そしてその鉄槌が、情け容赦も無くノイトラに振り下ろされる。

ノイトラ
「グギャァァァア！！」

轟音と、骨が砕ける音。零夜の一撃は屋根をやすやすと突き破り、ノイトラを文字通り叩き潰した。

零夜
「……全く。破面（アランカル）を狂化させるとはもったいない。狂化せずに剣術

が健在のままだったなら……俺なんて相手にならなかっただろうによ」

零夜は屋根からノイトラを一瞥した後、辺りを見回す。

零夜
”さっき四号車が切り離されたのも気になるが……今はハルヒの策を成功させなきゃな”

所変わって、ここはクロス学園のある教室。その教室の扉が、荒々しく開かれる。

銀時
「あい……つらっ……」

現れたのは銀時……。……そう。紫は重傷を負った銀時を置き、部隊を編成したのだ。重傷の銀時に対する配慮だったのか……何にせよ、銀時はそれに気づいたのだ。

銀時
「行かせるか……フェイトォォ！！」

闘志に身を焼き、銀時は進む。木刀を杖代わりに、一歩一歩地下飛行機発着場に向かう。……その銀時に、後ろから声をかける者がいた。

めだか
「しばし待て、銀時先生」

銀時
「めだか……」

そう、黒神めだか。皆さんは屋形船出発前、紫がめだかに頼んだ事を覚えているだろうか。

紫
『絶対に言わないで』

――そう、この事だ。紫は銀時が知れば、必ず無理をして来る。それを止めるために、めだかを残したのだ。

めだか
「お言葉だが、今の先生が行って何か役に立ちますか？」

銀時
「うるせぇ……どんな体だろうが、戦ってやる！！」

そう言う銀時の肩に、めだかが手を置く。そして次の瞬間……銀時は空中で三回転し、床にたたきつけられた。

めだか
「ほらみろ。今の先生では、軽気の私にすら投げられるのだ。……もう一度言う。行って、意味があるのか？」

完璧な理論。反論の余地なし。今の状態を突きつけ、めだかは銀時を止める。

銀時
「……うるせェよ」

……だが、銀時はそんなことでは諦めない。投げられた状態から、手をついて立ち上がる。

銀時
「意味がねぇなんてのはわかってんだ……だがな……フェイトは……俺の、生徒だ。担任が戦わなくて……どうするってんだよ！！」

銀時が吠えた。気迫。めだかは、負傷した銀時など怖くないはずだった。しかし、その気迫に押される。

めだか
「しかし……」

球磨川
『もういいじゃないか、めだかちゃん』

そこに、球磨川が寄ってきた。球磨川もめだかと共に学園を守るために残っていたのだ。

球磨川
『先生が行きたいって言ってるんだ』
『行かせてやろうぜ』

めだか
「球磨川……しかし、まだ怪我が……」

言いよどむめだか。しかしそれを聞き、球磨川はニヤリと笑う。

球磨川

『怪我が問題なんだね？』

そして、銀時に手をかざす。

球磨川
『なら治しちゃえばいいのさ』

めだか
「……うむ。仕方がないな……」

銀時
「めだか、球磨川……」

球磨川
『それでは、皆さん、一斉に御唱和を』

そして、球磨川が言葉を紡いだ。

球磨川
『Ｉｔ' ｓ　ａｌｌ　ｆｉｃｔｉｏｎ！！』

第二十一話『奇策とかいう作戦は成功したためしがない』（後書き）

諸事情により銀八先生はお休みです。次回またやります。すいません。

ちなみに、今回の零夜の『Ｖｅｒｄｅｔｔｏ　ｄｉ　ｆｅｒｒｏ』はイタリア語で、日本語に訳すと『裁きの鉄槌』になります。文法とかおかしいかもしれませんが、突っ込まない方向で。

第二十二話『作戦成功の暗号は猫・猫・猫……ちがう、トラ・トラ・トラ』（前

更新遅れて申し訳ありません。ついにセンター試験まで百日をきってしまったため、勉強漬けになること必至です。

なので、あと四ヶ月は超・超・亀更新になると思います……読者の皆様には申し訳ありませんが、ご了承の方をお願いいたします……。

では、前書きはここまでとして、本編をどうぞ。人気投票も続々票が集まってきています。こちらもよろしくお願いいたします。

第二十二話『作戦成功の暗号は猫・猫・猫……ちがう、トラ・トラ・トラ』

――クロス学園精鋭部隊の屋形船。現在暴風。

バラライカ
「紫!!　帆がもうもたんぞ!!」

紫
「わかってるわよ!!　まさかこんなに風が強いとはね!!」

現在、屋形船は違った意味で窮地に立たされていた。いわゆる暴風である。屋形船はなんとか耐えていたが、マズいのは帆。ビリビリ裂けそうなまで痛んでいる。

紫
「しょうがないわね……着水するわ!!　大シケ覚悟で海を行くわよ!!」

バラライカ
「聞こえたか同士諸君!!　すぐさま行動に移れ!!　迅速にな!!」

一同
『ＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！』

屋形船がじわじわ高度を下げる。それに伴い、風も弱まる。

紫
「……波が荒れてないわね……」

なのは
「風が強いのは上空だけみたいですね」

バラライカ
「着水まであと十秒！！」

バラライカが宣言してからちょうど十秒、ピッタリに屋形船は静かに着水した。

紫
「……パーフェクト、バラライカ」

バラライカ
「感謝の極み」

着水した後も、屋形船はスピードを緩めずに進む。その後ろを、ゴジラが追う。時折ゴジラは雄叫びを上げる。

紫
「波が荒れてないから海を行きたいのは山々だけど……奇襲をかけるなら上空からが一番。風が収まるのを見計らってか……暴風覚悟でもう一度飛翔する必要があるわね」

紫がつぶやいた途端、前方を確認していたルキアが声を上げる。

ルキア
「おいみんな!!　前に列車が見えたぞ!!」

ＡＬＬ
『何!?』

みんなが前方に集まる。紫はゆっくり歩き、近づいた。

紫
「早すぎる。ルキア、本当に列車?」

ルキア
「む……いや、あれは列車だが……機関部がない！！　完全に止まってる！！」

アーチャー
「切り離された車両ってことか？」

かがみ
「一つしか車両は無いみたいよ？」

こなた
「もしかしたらみんなが乗ってるかもしれないよ！！」

紫
「屋形船、止まりなさい。確認するわ」

屋形船
「分かった～」

ＡＬＬ
『喋れたのかよ！？』

そんな一幕もあり、とりあえず屋形船は車両の前で止まる。紫は

それを待って車両に降りた。

紫
「……これは……誰だか知らないけどまたひどく殺り合ったものね……」

紫がそう呟くほど、車両は破壊されつくしていた。何かが貫いたような穴が扉を吹っ飛ばしてあり、そこら中に傷が見える。

紫
「……なんか、嫌な予感がするわね……」

紫が呟いた途端、隣に降り立つ者がいた。紫は目を向ける。その人物は――

当麻
「――俺も、行かせてくれ」

上条当麻、その人であった。

紫
「構わないけど……どうしたの、いきなり」

当麻
「……不幸な予感がしたんだよ」

当麻は紫と同じようなことを言う。紫はそれを聞き、眉をひそめた。

紫
「……あなたの不幸な予感はあたるからねぇ。……当麻、降りるわよ」

当麻
「おう」

二人は屋根から降り、当麻が扉に手をかけた。

当麻
「……っ」

……のだが、何故か当麻は扉を開かない。……見たくない物が中にあるかのように。

紫

「……開けなきゃ始まらないわ。……開けなさい、当麻」

非情に言う紫。だが、彼女の顔も苦悶に歪んでいる。何やら彼女も察したらしい。

当麻はそれでもためらった。しかし、紫の言った通り開けなきゃ始まらない。ええいままよ、当麻は扉を開ける。

――そして、その予感は見事に的中する。

倒れ伏していたのは美琴――それも、当麻や紫が一番見たくない姿――血濡れ、であった。

当麻
「み……美琴っ！！」

焦った声で彼女の名を呼び、駆け寄って美琴を抱き起こす当麻。紫もそれに続き、美琴の容体をみる。

紫
「あんまり動かさないで。はっきり言って危険よ。すぐ救護班を呼んでくる」

紫は外に飛び出す。当麻はそれも確認せず、美琴を抱きしめ続ける。

美琴
「……ん……」

――そこで、美琴が身じろぎした。当麻ははっとして美琴を見る。
――焦点も合わぬ美琴の目が、当麻を捉えた。

美琴
「とう、ま……」

当麻
「……美琴……」

美琴
「え……へへ……きて、くれた……んだ……」

美琴は無理に笑う。顔の傷が引っ張られる。

美琴
「痛っ……」

当麻
「……しゃべるな。今紫さんが来る……」

当麻が美琴の頭を撫でながら言う。何かを押し殺したような声。
よく見ると、当麻は痛いほど唇をかみしめている。

美琴
「うん……でも、これだけは……いっとか……ないと……」

美琴は、当麻に手をのばす。優しく……いや、それ以上力が出ないのか、優しく、優しく当麻の頬に触る。

美琴
「ごめん……ごめんね、当麻……勝手に飛び出して……」

そう言って、美琴の手が――落ちた。当麻は慌てて脈をとるが、どうやら気絶しただけのようだ。

当麻
「……バカヤロー、ごめんは俺の方だ」

当麻は美琴を抱いたまま呟く。その声にあるのは、怒り、不快、後悔。すくなくとも良い感情ではない。

当麻
「……間に合わなかった。ごめん、美琴」

その後、紫が再びやってくるまで、当麻はずっとそうしていた。

ハルヒ
「そぉいっ！！」

ライダー
「はぁっ！！」

さて、所変わって先行海列車内。海列車上部でハルヒとライダー、内部では雲雀とアサシン。それぞれが激闘を繰り広げていた。

ハルヒ
「でりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃぁ！！」

ライダー
「くっ！！」

大量の剣を撃ち出して物量で攻めるハルヒ。それに対してライダーは最小限の動きだけで剣をかわし、弾き、少しずつ近づいていく。しかし――。

ハルヒ
「よっ」

いざ近づき、ライダーがハルヒに一撃いれようとすると、ハルヒはすぐに飛び退いて距離をとる。そしてまた剣群によって攻める。

ハルヒ
「うりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃぁ！！」

ライダー
「またっ……！！」

舌打ちするライダーだが、迫る剣群にまた的確に対処していく。圧倒的な物量を誇るハルヒ相手では、遠距離戦を挑むのは愚の骨頂。しかし近距離戦を挑もうにも、この物量をかいくぐらねばならず、よしんばかいくぐったとしても――

ハルヒ
「あらよっ～！！」

ハルヒはライダーが近づく一瞬を見計らい、距離をすぐに広げる。
そしてまた休む間もなく遠距離戦に突入する。

ライダー
”おかしい……”

ライダーはふと考える。なぜハルヒは近距離戦を挑んでこないのか。

ライダー
”もうこの遠距離戦で私に致命傷を与えるのは無理だと分かっているはず。なのになぜ近距離戦を挑んでこない？”

ライダーは疑問に思いながらも剣群に対処していく。

ライダー
”どうせまた飛び退く……確かにこちらから有効打は与えていませんが、そちらからも有効打はありませんよ？”

そう、この戦いでは、ライダーはハルヒに有効打を与えにくいが、ハルヒもライダーに有効打を与えにくい。負けないかもしれないが、勝てないだろう――しかし、ハルヒの狙いは別にあったのだ。

ハルヒ
”……まだ大丈夫。時間は稼げるわ……だから急いでよね……”

――キャスター！！

鋭い衝撃音と共に雲雀、アサシンは飛び退く。この二人は二号車で戦闘をしていた。あの男とセイバーはアサシンに言われた通り手は出さず、ただ戦況を見つめている。

雲雀
「……解せないな」

アサシン
「ふむ、何がだ？」

雲雀はアサシンに疑問の声をかける。心底解せない、そんな声だ

った。

雲雀
「君の実力はそんな物じゃないはずだ。アーチャー先生から聞いてるよ……『秘剣・燕返し』を使わないのかい？」

アサシン
「ほう、アーチャーめ、私の事を話していたとはな」

アサシンは面白そうに笑う。

アサシン
「しかしそれを言うならそなたもだ。……隠している力があるのだろう？」

その通りだ。今まで雲雀はトンファーのみでアサシンと渡りあっている。筐兵器も使っていないのだ。

雲雀
「……まぁね。だけど僕はここで使う気はないよ」

アサシン
「何？」

雲雀は含み笑いをする。わからないかい？　そんな顔でアサシンを見る。

雲雀
「君ぐらいなら、使わなくても噛み殺せる。そう言いたいのさ」

アサシン
「ほう、大した自信だな……なら……」

アサシンは刀を構えた。構えから剣気がにじみ出る。

アサシン
「見せてやろう、我が秘剣をな……」

アサシンの構えに、雲雀はニヤリと笑う。そして呟いた。

雲雀
「いや、やらせないさ」

ハルヒ
「キラークイーン！！」

屋根が小爆発し、ハルヒが飛び込んでくる。ライダーもそれを追ってきた。さらに――

零夜
「裁きの鉄槌ッ！！」

黒美琴
「あは☆　だいぶん手応えあるねぇ！！」

恐らくは第三号車で戦っていた零夜、黒美琴も二号車に飛び込んでくる。結果、皆は一同に会した。

セイバー
「ふん、ぞろぞろと……」

ハルヒ
「そりゃ、こっちの台詞よ」

戦っていたにも関わらず、ハルヒの息は上がっていない。時間稼ぎに重きを置いていたからだろう。

ハルヒ
「って……黒美琴……あんた、美琴ちゃんをどうしたのよ」

黒美琴
「あは、今さらぁ？　ぶっ潰して、列車で流してあげたわよ？」

ハルヒ
「あァ！？」

ハルヒの顔が怒りに燃える。今にもつかみかかりそうなハルヒの肩を零夜が掴んだ。

零夜
「落ち着けよハルヒ。美琴は簡単に死ぬ奴じゃねぇさ……それに、今俺達がやる事を考えろ」

ハルヒ
「ぐぅ……わかったわよっ」

ハルヒは大人しく下がり、零夜、雲雀と肩を並べてセイバー、ライダー、アサシン、黒美琴と対峙する。三対四。これでは時間稼ぎも厳しい。

……しかし、ハルヒ達が稼ぐ時間はもう十分だったのだ。

キャスター
「ハルヒっ！！」

ハルヒ
「っ！！　やっと来たわね！！　総員退避っ！！」

いきなりキャスターが三号車に現れる。転移か、飛行で窓から来たか、どちらにしろとにかくキャスターが三号車に来た。――フェイト・Ｔ・ハラオウンと共に！！

セイバー
「なっ！？」

アサシン
「これは……女狐の姿が見えんとは思っていたが……一本とられたか」

アサシンが刀を握り、逃げようとするハルヒ、雲雀、零夜を狙う。その時、先ほどから何も喋らない男がセイバーの隣から動いた。何事かを呟くと、水流がまたもや溢れ、すごい勢いで三号車に進む。

ハルヒ
「来たっ！！　急いで切り離して！！」

零夜
「了解っ！！」

列車を切り離そうとする零夜。しかし水流は待ってはくれないっ！！　水流が零夜を飲み込み……

キャスター
「コリュキオン！！」

フェイト
「プラズマスマッシャー！！」

……そうになった所で、キャスターとフェイトが巨大な魔弾を放つ！！　魔弾は水流を押し止める。零夜が今こそが隙とばかりに、列車の連結部を断ち切った。

ハルヒ
「いぃよっしゃあ！！」

ハルヒが叫ぶ。切り離された列車は、少しずつ距離を離していく。

知らぬ間に、ハルヒは叫んでいた。

ハルヒ
「トラ・トラ・トラっ！！」

黒美琴
「教えて」

ＡＬＬ
『黒美琴先輩～！！』

黒美琴
「二回目ね。このコーナーに私が出るのも」

セイバーオルタ
「作者がお前を書くのは楽しいらしいぞ」

黒美琴
「ま、いいけどね。なら早速行くわ。私の生みの親、エターナルからの質問よ。『セイバーオルタ、リクオ、式、ゆりに質問。

この中で勝てそうな奴はどれ？

1．デビルメイクライのダンテ、バージル、ネロ

2．ＩＳメンバー（一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ）

3．ソラ、リク、ヴェントゥス、テラ、アクア、ミッキー（キングダムハーツ）

4．ソレスタルビーイング（ダブルオークアンタ、ラファエルガンダム、ガンダムサバーニャ、ガンダムハルート）』」

セイバーオルタ
「エクスカリバーが通用するかが問題だな……だが一対多か……各個撃破が出来るなら3が一番いい線いきそうだ」

リクオ
「一対多か……鏡化水月次第だな。2、4には効くか未知数な点から、1か3だな」

式
「対空は難しいから2と4は論外だな。『死』が見えればどれにも勝てるかもしれないが……」

ゆり

「どれにも勝てる気しないわ……」

黒美琴
「やはり対空をしっかりしないと2、4は厳しいんじゃない？　では、エターナルさんは廊下に立ってなさい。アンケートには後で行くらしいわ」

セイバーオルタ
「次は……月光閃火さんだな。『あ～…何だ、本編の黒美琴…【辱しコブラツイストの刑】発令！（そういって、本編の黒美琴にコブラツイストを書けつつノクターン行き確定しそうな辱しめをする）…内容は飛ばして構わんが、次回の後書きで感想をどうぞ…（汗）。（輝刃）』」

黒美琴
「う、うぅ……もう思い出したくもないわ！！」

セイバーオルタ
「贈り物もあるぞ」

［つ巨大ゲコ太ぬいぐるみ］

黒美琴

「ま、まぁ許してあげないこともないわよ！！」

セイバーオルタ
「ツンデレ乙」

黒美琴
「うっさいわ！！　月光閃火さんは顔にお札はりつけて渋谷をあるいてきなさい！！」

セイバーオルタ
「キョンシーか……さて、今回はここまでだ」

黒美琴
「次回もお楽しみに。前書きにある通り作者が受験生だから更新は大幅に遅れると思うわ。ご了承お願いするわね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2191o/

クロス学園Ｚ(ゼット)組!!

2011年10月11日09時56分発行